女鑑

第二百廿九號

女鑑第貳百貳拾九號

目録

女鑑
御諭詞……一
新しき家庭……二

論説
人は自立心なかるべからず……細川潤次郎……六
婦人の早衰……三輪田眞佐子……九
川崎先生に呈して婦道の一端を論ずる書……永潜生……一一

精華
陰德……貝原益軒……一三
孝女ふさ……田山さり子……一五

家政
仕付方……赤堀氏寄贈……一七
婚禮式……有佐常子……一八
上卷むすび……石井泰次郎……一九
たちぬひ……西山たい子……二〇
たいどころ……二一

學藝
國文學講義……井上頼文……二三
漢文學講義……佐々木天游……二五
和書通信講義……山崎彩岐……三一

文林
和歌……東久世通禧外……三三
心の錦……諏訪忠元……三六
心の花……松浦辰男……三五

漫録
竹の御園生……山岡萩雪……三七
女訓綾晒雛形……揖取素彦……四五
女子要書解題……三浦千畝……四六
詠史百首評論……海上胤平……四八
曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず……白松園主人……五〇
一夕話……大宮兵馬……五四
謎うた……超舟漁史……五七

訪問
谷子爵夫人……田島生……五七

教の庭
皇孫の御降誕をいはひ奉りて……下田義天類……六〇
仝……日本女學校生徒……六一
郭公をまつ……鎌田光恵子外……六五
海外なる友に書籍を送る文……安藤ひさ子外……六八

樂園
芳野紀行……下田義天類……七三
幼き人々の爲に……香谷女史……七五

雜報
歡天喜地……八二
○親王御降誕○御摸樣○葉山御用邸の御祝賀○親王殿下の御体量○御命名式○御健勝○奉祝賀表○御命式當日○東宮行啓○新宮御移轉期○萬のひゞき
奉祝の歌……九五
表彰録……九七
教の栞……一〇〇
侯爵山内家婚禮式……一〇一
全國各女學校卒業生……一〇二
杜鵑一聲……一〇九
口繪につきて……一一三
次號豫告……一一五
新刊寄贈……一一五

奉祝御降誕……副島伯爵
薩波裝白……高橋松亭
插畫……同人

定價
一冊　金拾錢
六冊（三ヶ月分）　金五拾五錢
十二冊（半年分）　金壹圓
全國無遞送料

明治三十四年五月十九日印刷
明治三十四年五月二十日發行

編輯兼發行人　川崎直衛
印刷人　並木眞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元　靜思館
（電話本局一千三百七番）



日迺
皇子乃祢継々
耳
皇孫殿下御降
誕生大慶深哉
万邦当之寿
副島種臣

副嶋種臣

宮内省告示第七號

皇太子妃殿下今二十九日午後十時十分東宮御所に於て御分娩親王降誕在らせらる

明治三十四年四月廿九日

宮内省告示第八號

四月二十九日午後十時十分降誕あらせられたる親王御名を裕仁（ひろひと）と命せられ迪宮（みちのみや）と稱しまつる

明治三十四年五月五日

宮内大臣　子爵　田中光顯

君が代は千代に八千代にさゞれ石の
いはほとなりて苔のむすまで

女鑑　第貳百貳拾九號

新しき家庭

新しき文章とは、半解の外國語を交へ、直譯的句調を以つて綴りたるものにあらざるが如く、新しき詩歌とは、輕薄なる調に、西洋諸神の名を列ねたるものゝ謂にあらざるが如く、また、新しき婦人とは、所謂俗風改良の聲に應じて、新しき服裝を爲したるものを呼ぶにあらざるが如く、新しき家庭とは、その外園を煉瓦にし、その室に、テエブルと椅子とを備へ、綠茶に代ふるに、珈琲チヨコレエトの類を以つてし、出づるに自轉車を撰び、口には外國語を上すを以つて、名譽とするが如き人々の組織に成れるものゝ、謂にはあらざるなり。

新しき家庭とは、新しき時勢に應じたる家庭をいふなり。新しき時勢の需に應じて社會に活動く人々の、安慰を求むる所をいふなり。更に、新しき時勢に適すべ

き人を、養成する場所をいふなり。斯の如く、現狀幷に未來に於ける新しき人を社會に供給することは、この新しき家庭隨一の任務にして、要とするところは、その內的性情の新しきにありて、決して、外的性情につきての謂にあらず。形而上の點に於いて新しきものにて、形而下の方面に於いて然るにあらず。されば、如何に、其の外觀を新しくすとも、その內部の精神にして、新しからずむ、輕々しく、これを目して新家庭とはいふべからざるなり。こゝに新といへるは、いふまでもなく、舊に對したる語にして、決して、奇といふ文字と同一視すべからず。社會は、人と共に、日に新にして止まらず。この社會に適應せむためには、家庭も、亦、新時代の空氣を吸入せざるべからず。然りといへども、妄りに、新を喜びて、彼の奇に走るが如きは、決して、家庭の何たるを解するものとは爲すべからず、古きを忘れて、全く一派飛びはなれたる新家庭は、到底、新時代に、長く其の位置をたもつこと能はざるものなり。故に、秩序あり、系統をふみたる、即ち、故を溫ねて、はじめて、到着し得たる、家庭を希望せざるべからず。斯る家庭は、果して、如何なる人によりて主宰せらるべきか。これ、ついで來る

ところの問題なり。いふまでもなく新しき敎育に其の素養を積める、有爲なる婦人を待たざるべからざるなり。

明治女學の旺盛は、空前ともいふべき。而かも、吾人の寡聞なるや。いまだに、新しき期の如き婦人あることを知らず。否、斯の如き婦人に、よりて、主宰せらるゝ新しき家庭あるを觀ず。實際は、這般の婦人、また、這般の新家庭、絶無なるにはあらざるべけれども、その數の、至つて僅少なるは、やがて、吾人の見聞を來さゝる所以にあらざるなきか。若し、然りと答ふべくむば、明治女學の効能、明治主婦の價値、輕々しく、其の鼎の輕重を問はるべきなり。

從來、女子の學ぶや。行はむがために學ばず、學ばむがために學ばずして、人に語り、人に誇らむがために學び、從ひて、學ぶものも、敎ふるものは、その學の目的を解せずして學に從事し、妄りに、舊を捨てゝ新を喜び、奇ならむを勸め、異采あらむを希ひ、滔々として、その裝、まづ、新時代らしくして、却りて、その實は、舊にもあらず新にもあらぬ、一種、曖昧模糊、到底、實行しがたきものを形成せり。これ、少しく心あるものをして、明治女學の有害無益を叫ばしめた

る所以にして、啻に、女學のために惜むべきのみならず、女子一般の不幸、家庭の禍、延いては、國家社會の隆運に關するところ、敢て、尠少ならざるなり。

願ふに、わが讀者諸媛は、夙に、是等の弊を看取し、健全にして新鮮なる思想を養ひ得て、蜃氣樓中に其の家庭を描くことなく、確實に、地上に良家庭を得むと期せらるゝなるべし。希くば、諸媛が、その多年の蘊蓄を實行せらるゝ家庭は、眞に新しき家庭にして、所謂新家庭ならず、その外觀よりも、内部の充實に於いて、まづ、新鮮なるを見るを得せしめられよ。

人の子のおやになりてぞわが親のおもひはいとゞおもひしらるゝ　康資王母

しろかねもこがねも玉もなにせんにまされるたから子にしかめやも　山上憶良

久かたのつきのかつらもをるはかり家のかぜをも吹かせてしがな　菅公母

わがせこは物なおもひそことしあらば火にも水にもわれなけなくに　安部郎女

いにしへもたぐひもあらじ我が宿に枝をつらぬるかしは木のかげ　大納言光頼



人は自立心なかるべからず

細川潤次郎

凡そ、人たる者は、個々の身体を有する以上は、成年の後は、須らく、自立すべき者たるを以て、豫め、自立心を養成せざるべからず。自立心とは、其の人、自ら、勤勉し勞苦に耐へ、以て、其の志を成就し、徒に、他人に依頼せざる謂にして、即、其の人の、他日、自立すべき根本なり。然れども、一方より之を見れば、人類は、本、群居の動物たるを以て、決して、單獨の生活をなす者に非ず。此れ、即、人の一家をなす所以なり。一族をなす所以なり。又、一邑一國をなす所以なり。此の動すべからざる原則により、何人と雖も、尊長に事へ、卑幼に接せるが如き、朋友に對し、其の他、一般の公衆に對するが如き、何事に付きても、自然の秩序あるべきことあれば、一身一個の心に任せて、恣に、行動すべき者に非ざること、固より、論を待たず、殊に。女子に在りては、自立の範圍尤狹隘にして、他人の牽制を受くること、更に、多しとす。其の家に在るや、父母の命令に從ふことと勿論にして、出で丶他人に嫁するときは夫及舅姑に事ふるが如き、其の他、族人に接するが如き、成る丈け、其の歡心を得んことを力めざるべからず。之が爲めには、成る丈け、自己の了簡を抑制せざるべからず。此の事に付きては、支

那にては、三從と曰ふことありて、父母に從ひ、夫に從ひ、亦、子にも從ふべきことゝせり。天竺にも、亦、此の三從に類似せることもあり。亦、西洋にては、婦人を尊重するの風、太だ盛なるにも拘はらず、有夫の婦人を無能力者として、獨立して、人と契約することを許さず。他人に贈遺をなし、亦、他人の贈遺を受くることを得ず。此等の點より考ふるときは、自立と云ふことは、男子に在りても、範圍狹隘なる者なるに、女子に在りては、殆ど、自立すべからざる者の如しと雖も、未だ、必しも、然る者にもあらず。前にも言ふ通り、人たる者は、已に、個々の身体を有する以上は、其の身体を、自己の心に任せて活動せざるべからず。其の家に在ると、外に在るとを問はず、一人は、一人前の仕事をなさざるべからず、固より、其の人の地位と職業とに由りて、自己の範圍内に屬する區域の廣狹はあることあれども、其の範圍内に屬する事柄に付きては、自己の心を用ゐ、自己の力を用ゐて、自己の職分を全くせざるべからず。此、即、謂はゆる自立心の効用にして、他人に倚頼すべき者に非ず。男子、固より、宜く此の如くなるべし。女子も亦然り。事に由りては、尊長の指圖を受け、後、處置すべき者あれども、其の指圖の範圍内に於て、自己の心力を用ゐる余地は、十分に之れあるべし。況や、一定の仕事、若くば、自己の嗜などの如き、必しも、尊長の指圖を要せざるに於てをや。且、亦、尊長は、常に已の終身を監督する者にあらず。或は、不幸にして尊長の亡ふこともあらん。然らざるも、尊長の旅行することも、大病に罹ることもあらん。此等は、さまで、珍らしき事にも非ず。然るを、平生自立心なくしては、徒に、倚頼心にのみ一任する

あらば、此の如き場合に際しては、驚愕狼狽、瞽者の杖を失ひたるが如く、復、如何ともすること能はざるべし。是故に、人は群居の動物たるに拘はらず、世界中に、我獨生存せる者の如く、他人の倚頼すべき者なきときの覺悟なかるべからず。此の事に至りては、日本支那の修身の事に關したる書籍には見當らざる所にして、西洋にては、却て、喋々辯論する所なり。假加へば、童蒙教草に譯したる麥畑の雲雀の話の如き、種々の譯本ある魯敏遜漂流紀事の如き、其の他いくらもあるべし。此等は寓言にして、實に、其の事あるに非ず。只、其の事を借りて、自立心養成の材料となしたるものなり。西洋の諺に、相助自助に若かずと曰へることあり。自助は、即、自立に外ならず。「スマイル」氏其の著書を名けて自助論と曰へるも、亦、此の意を取れる者なるべし。一体、西洋にては、各人各個に家をなす慣習にして、我が東洋の族制即、古來の戸籍法の如き、一家の團結をなせる者と、迥に同じからず。人生れて、苟も、成年に達するときは、各自獨立の生活をなさゞるべからず、此の故に、自立心を養成するの必要ありて、其の例證となるべき嘉言善行も少からずと雖も、我が東洋に於ては、族制之れと異なるを以て、男子たりと雖、嚴格なる秩序の中に生息し、自己の意に任せて運動することを得ず。殊に、女子に在りては、多くは、深窓の中に生長し、他人と交通するの必要なきを以て、自立心を養成する必要もなく却て、柔順の道に背反する者として、自立心あるを戒むる程のことなりき。然れども、此れは、明治中興前の事にして、其の後は、封建の制度を廢し、門閥の弊を除き、四民、漸を以て平均せんとするに當り、外國との交通も、日を逐うて盛にな

り、自然に、自由の空氣を吸收したるに出り、從來の族制は、依然として在りながら、一般の風習に許多の、變更を來し、女子と雖も、時と場合に出り、男子同樣に、社會の事務を辨ずる時節となれり。是に於て、男子の自立心は言ふに及ばず、女子の自立心も、必要を感ずるに至れり。故に、余は、女子に向て、自立心なかるべからずと訓誡することを憚らず。然りと雖も、此の自立を誤解して、自心自儘あることゝする勿れ。亦、此の自立を誤解して、社會を離れて單獨に生活することとする勿れ。自助論の原序に、「セルフヘルプ」を「セルフィシネム」と混淆する勿れと曰へるが如く、若し、之れを誤解するときは、余が訓誡の旨趣と正に、相反する者ありとす。

（未完）

婦人の早衰（六）

三輪田眞佐子

されば、婦人は、幼より、滋養物を嫌ふ習慣を脫せざるべからず。わきて、牛乳のごとき、營養品は、是非好みて飮み得る習慣を養ふべし。然らざれば、大病などのとき、養生法に困難すべし。おのれ、家塾の少女等が、かゝる習慣なきため、その病める際に、憂ふること少なからず。これと同じく、肪脂質に富めるものも、體養に必用あれば全然、これを廢すべきにあらず。大底、子孫多き婦人は、身體油こくしてつやよきものに多し。故に、早衰を好まざるものは、飮食にも注意せざるべからず。

次に、婦人は、身體の早衰著しきのみならず、精神の早衰に至りては、比較上、なほ、甚しきを覺

ゆ。まことや、人は、身體を養ふに足る飲食は、一日も怠るべからず。これを怠るときは、忽ち、血液の補給に乏しく、遂には、生命を保存する能はざるが如く、精神も、亦、時々刻々、修養せんことを要す。若し、一秒時間たりとも、精神の修養を放棄せんか。道理暗く、時勢に迂く、なか〳〵世の先驅者となりて、後進者を導くこと能はざるべし。

現に、世の實際を見よ。婦人は、あへて、迷心强く、妄想を巧しくして、公明正大なる判斷に乏しきがごとし。偶、比較上、最高度の敎育を受けし婦人といへども、事理に通せず、僅に我が聞見せし智識を以て、萬能の道と思ふめり。おのれはつねに、集會などのことにつき、或は、敎育などのことにつきて、男子と事を相議するを以て快と感ずるも、女子と、物を共にせば、女子は、必ず言ふべき時に語を交へず、而かも、退きて、怨み罵るごときもの多きを目擊せり。甚しきは、陽に甘言を弄して陰に讒言するなど、所謂、嫉妬猜忌の惡僻は、殆ど、女子の特色なるがごとし。おのれ、身婦人なれば、婦人の缺點を暴露するに忍びずといへども、今、女界をして、肝膽相照し胸襟相開きて、女德圓滿の域に達せしめんとならば、女性の疾根ある、嫉妬猜忌などの惡僻を除かざるべからず。固より、男子にも、かゝる病根なきにあらざれども、比較上少きのみならず、男子につきていふは、別問題なりとす。

凡て、迷信妄想嫉妬邪權などは、眞理を見る明なき結果なれば、一切、女僻の病根を絕つ法方は、他なし。道德心の養成と、新知識の啓發にあり。おもふに、婦人は、事物の見聞挾く、他人との交り少く、且つ、心育の機關完然ならざるを以て、

日々、父母より受けし訓戒も、屢々、學校にて受けし敎訓も、唯、一時的の効のみにて、更に、培養温習する道に缺きため、身体は、いまだ青年期ながら、精神は、早衰しそむるがごとし。

或は、事實につきて一言すれば、幼稚園にある小兒中、男兒よりも、女兒が記臆も能く、判断も良きが如し。これ、早熟の證あり。されど、進みて、小學校に行くや。男兒は、女兒より優等の傾向あり。更に、これより後は、女子は、精神上著しく早衰に傾く兆あり。遂に、老人となれば、いよいよ女子は理解力に乏しきが如し。果して然らば早衰を豫防する道を研究するは、今日、女界の急務にあらずや。

川崎先生に呈して婦道の一端を論ずる書（承前）

永潜生

第二　婦人をして信仰の心を養成せしむる事

四顧瞑々咫尺を辨せず、驚瀾怒濤船を覆さんとするの時、舟子の、依つて以て進路を定むべきものは、只だ、一點燦々たる永久の北斗星に御座候。信仰の光は、渺漫たる浮世の海を航するに際し、缺くべからざる北斗星にては無之かと存候。渇せる者に甘露を與へ、苦しめる者に慰樂を與へ、人生を潤ほし、人生を活かし、人をして、百年の希望を懷かしむるものは、只だ、一片信仰の力による事と存候。殊に、熱き情の、冷ある智に優れる婦人にありては、信仰の舵に一身を委ね候事は、

尤も、安全なる道と存候。信仰なきの人、信仰なきの社會ほど、危險なる者無之かるべく、嘗て、某學者が歐洲に留學せし時、彼地の人々より、貴下の宗門は何なるかとの問を受けしに、其の人はさも學者らしき樣子にて、余は、一つの宗教を信ぜずと答へて、得意顏しけるに、豈計らんや。「然らば君は野蠻人なり」との冷語の下に、非常なる擯斥を受けしとか聞き申候、之、其の信念の缺欠せるを嘲けりしものならんと存候。又、嘗て、ある海軍々人より聞けることあり。往ぬる黃海の大戰に、最も、苦鬪奮戰を極めしは、旗艦松島なり。之をこそとねらひ放てる敵彈は雨霰よりもしげく、甲板と云はず、船室といはず、肉飛び血溢れ、其の慘狀、目も當てられず。流石、忠勇鐵石の乘組員のことにしあれば、一同、殊死して事に從へるがなかに、取りわけて、擧止悠然、毫も、平日に異ならず、除ろに、唱名を稱へつゝ、山を劈く砲彈の響きも、照る日を覆ふ焇烟の色も、かつて、其の耳目に關せざる者の如く振舞ひしは、あはれ、年老ひたる庖厨の小使なりし由に候。戰克つて後ち、艦長以下各員、悉く、彼をめぐりて、推して當日の英雄の第一に置き、『あの時は、己れも、南無阿彌陀佛が唱へたくなつた。』とて賞讃止まざりりしと申すことにて候。一匹夫をして、尙は、且つ、如斯くならしむるに、信仰の力程恐ろしきものは御座なく、あはれ、『花の山鐘は上野か淺草か。』方今、輕薄の俗人の心、やう〳〵、花になりゆくにつけては、梵鐘徒らに鳴くも、かつて、慈悲の清音を傳ふることなく、神鼓空しく響くも、嘗て、敬虔の心を起す者なし。偶々、信仰のことを口にする者あれば、天保時代の迷信にあらざれば、偏屈なる愚戇と嘲らる。誠に、嘆息の至に候。

小生は、固より、迷信を惡むことは、蛇蝎の如く存候へ共、去りとて、健全なる信仰を造ることは風敎の上殊に、目下の女子德育の上に於て、最大なる急務にては無之やと存候。勿論、小生の所謂信仰なるものは、狹義に於て、各宗派を意味し候ものにては無之、耶蘇にあれ、佛にあれ、儒にあれ、死せる先哲の遺訓にあれ、生ける嚴師の躬行にあれ、何にても、己れが、斯くと信じたるものを深く心に印し、此の信仰の舵によりて、浮世の風波を凌がむことの意に御座候。是、亦た、御高見を垂れ玉はり度候。

心だにまことの道にかなひなば
いのらずとても神や守らん



陰德

貝原益軒

家に居ては、陰德を行ふべし。心に仁をたもち、身に善を行ひて、其の善を人のしらむことをもとめざるを、陰德といふ。まどしき人も、其の力に應じて、善を行ふべし。うゑたる者に食をあたへ、こゞえたる者をあたゝかにし、かわける者に湯水をあたへ、老いたる者をたすけ、幼をいつくしみ病人をいたはり、人の子弟に孝弟をすゝめて行はしめ、人の善と才能をほめすゝめ、人のあやまちをそしらず、人の惡をかくしてあらはさず、人の過

悪をいさめ、道にあるいばらからたちくひなど、人を害する物を去り、道におちたるをひろひて、其のぬしをたづねてかへし、いける物を少しありとも故なくして、みだりに殺さず、つねに、かくの如くにして、陰徳を行ふべし。年をへて久しく行へば、其の善、つもりて大なり。樂しむべし。貧しき人すら、かくの如くなるべし。況や、富める人をや。富みて、財あまりある人は、天道みてるをかく理なれば、人にほどこさずして、財を多くあつめたけるは、後に、必、わざはひ出來て財をうしなひ、子孫にその財をのこしがたし。財多き人は、尤、父母にあつくし、親戚朋友の乏しきをにぎはし、貧しき人をたすけ、飢寒をすくひて、廣く人を愛し、善を行ふべし。夫、人をすくひたすくるは、天の好み給ふ所、天道は、善にさいはひし給ふ理なれば、かくの如く、ひろく人を愛すること久しくば、天のよろこび給ふことふかくして、福をうくること、うたがひなかるべし。天道は、還すことをこのむといへり。善を行へば天よりさいはひを下し、悪を行へば、天よりわざはひを下し給ふ。善悪につきてむくいあるを、かへすことをこのむといへり、此の理、かならず、たがはず、是、天道のまことなり。是を以て、善を行ひて久しければ彼の、道なくして神佛にへつらひ祈り、其のさいはひをうけ、わざはひをのがれんとするよりも、百倍のしるしあるべし。愚なる人は、天道の、善にさいはひしたまふ理をしらざるゆゑ、天道をおそれずして、天道をうたがふ。天道の、善にさいはひし、悪にわざはひし給ふ理、古今からやまと、其のためし多し、その理あきらけし。即時にそのしるしなけれど、後、必むくいあり。うたがふべからず。悪を行ふと、財多くし

て人にはどこしすくはざるとは、天のにくみ給ふことわり、のがれがたし。天道おそるべし

孝女ふさ

田山とり子

播磨國加東郡上三草村に、幼より老にいたるまで、孝女の譽たかく、世の人に推重せられ、死去りて後も、幾百十年、永く世のかゞみとせらるゝ、美しき女ありけり。其の名をふさといひて、同郡社村の十兵衛の子なるが、六歳の時に、上三草村の茂兵衛といふに養はれて、其の子となりぬ。

茂兵衛は、田畠とても持たぬ、いとわびしき百姓ありければ、ふさは、八歳の時より、人の子守となり、或は、小使などして、父の世わたりの艱難をすくひけり。九歳十歳ばかりの頃よりは、幼心にも、老いたる父の、終日、草履草鞋など作るにいそがしきを、憂きことに思ひて、間隙ある毎に、其の側に來りて、藁をうちあたへ、または、旅人にうりなどして、其の勞をわかてり。十一歳の時にいたりては、もはや、其の勞に堪ふべければとて、強ひて、父母に乞ひて、他の家に往きつかへ、其の給金をたくはへて家計をたすけ、一厘一毫も、わが用にとて費すことなかりき。

これより、二十餘年、主家には、いと忠實に仕へ、人に倍するばかり勤めはげみ、さて、少しの暇をうかゞひては、家にかへりて、親の介抱に心を盡せり。

父母死去りて後、夫を迎へしが、また、よく之に仕へ、かつて、こゝかしこに奉公せし折、おのづから見習ひし禮儀を、貧しき中にも紊すことなく、幾十年の久しき間、あたりに住ひし人も、一度も、

荒々しき言ぶりをだに聞きしことなしとて、今にいたりて、なほ、かたりぐさにせらるゝとぞ。其の家庭の、いかに美しく樂しかりしかは、養父母に仕へし眞心にても、おしはかり知られぬべし。彼の仙人とかや、人々の神とも崇敬するある人も然る美しき家庭の世にありと知らば、強ひて、山にも入らざりけむと、おろかしき心には、このふさ女の行狀を聞きて、今更、いとほしうもなりぬるぞかし。

なほ、ふさ女が、養父母の世にありし頃の、心づくしの一つ二つを言はむか。母と頼みし人は、いと孱弱きひとにて、綿を績まで生活の助とせしかど、夫の茂兵衛におくれし後は、ひときは衰へて、たゞ、ふさが給米をのみ頼みて世をすごしゝに、天明七年の飢饉によりて、思ふまゝにも仕送りかぬるやうにありしが、己が些少ばかりの衣類を賣りて、母には、世の憂をば知らせざりきと。また、母のます〳〵老いゆきて、みづから、米を臼ぐることかなはずなりしよりは、主人の用暇をはかりて臼き白げて、夜ごとに母の許にゆき、そのついでに、いろ〳〵母のために仕置きて、一夜も怠ざりき。しかしながら、主人の用をかくごときことは、いさゝか爲ざりきとぞ。心ある主人は、そのことはさておきても、母の許にゆき來よなど、いたはりくるゝもありしかど、さては、母も、却つて快からず思ふべけれぱと、決して、その恩になるゝがごときことなかりけりと、これも、ながく、世のかたりぐさにのこりけり。

あやまりのあらば中々さもあらば
こゝろづくしに何いのるらむ



仕付方

赤堀又次郎寄贈

十七

晝つ方、供御などすぎて、いかに、いたづらに物せさせたまふとも、おほとのごもる事などあるまじく候。いかに、身の程たかう思上りぬる人も、其の家々に、ことわざはしげきものにて、あるかぎり言ひあはること候ふべし。もとより、かひ〴〵しき御すまひにて、よろづ、おほしめすまゝの御身とて、上臈中臈かず〳〵召仕はるゝ御身なりとも、かまへて、いたづらある御わざあるまじく候。

いかにも、如何にも、古の書どもを、よく〳〵御覽じ候へ。また、その事とならんをりは、おかしやかなるわが人にも、老人にも、なさけありぬべきふしにて、ゑものがたりさうしなど、つねには、よませられ候うて、人々の心をもなぐさめ候へ。われこそしうありけれと、つねは、ほんなどのやうにいんつくりふさはしからず、さふらふ人々、いたうわびしめ、なにごとも、あしきことを見いだして、たゞ、ふかうかんだうせんの御心は、いとうたてしきわざにて候。たゞ女房は、なさけなさけしく、さすがに、かどあるなん、よきわざにはすゝみ、こと〳〵しげに、さふらひにくげになどあるまじく候。

＊　＊　＊

身のかざりに、心を用ひすごすべからず。ひまつひにて、益なし。（大和俗訓）

婚禮御色直し式

有住常子

御待上﨟御案内にて、御緣女樣御祝の間へ御出座、御聟樣同樣御次の間にて御一禮前の如く、御祝の間へ御着座。通ひ女中、御長熨斗三方持出づる。御緣女樣介添下座へ立ち、次の間にて受取下座にて中座致し、御双方の中程へ差上げ、中座せし所に參り、御祝禮申上ぐる。其の時、御待上﨟初、御双方御一禮の事、御熨斗三方引次にて通に渡し、本座につく。通御勝手に入る。次に、通兩人にて御色の餅持出で、御前に差上ぐる。立居共前の如し。時分見斗ひ、御色の餅引次に御本膳持出、下座致し、御双方正面へ差上る。次に、二ノ膳差上ぐる、次に、三ノ膳差上ぐる、次に、向詰差上ぐる。但し、是は、燒物あり。次に、飯鉢御蓋受二人、御次に扣居る、御双方介添御そばへ參り、御飯より、夫々蓋をとり、下座に參り扣へをる。御双方樣、御箸御取あげめしあがる御樣子見斗ひ、一二度御さふじなす。御本汁二の汁等御替り差上げ、終りて、飯鉢蓋受次へ引き、向詰引き其のあとへ盃三方出す。酌人銚子持出し、御中酒一獻づゝ差上け、扣吸物膳持出し、三ノ膳と引替へ差上げ、又、御中酒一獻づゝ差上げ、次へ扣へ、御中皿肴臺にすゑ持出し、吸物膳の程よき所へ付込差上げ、又、中酒一獻づゝ差上げ、御銚子次へ引くあり。通出で、盃三方引き、其のあとへ御島臺持出で、御聟樣御本膳向へすゑる、御押臺島臺の上座へ差上げ、次に御酒御双方の下座に差上げ、本酌加 立出加は前の如く、次に扣、本酌は御聟樣の前に進み參り、二獻差上げ、少しく下り、銚子を前に置き扣へ樣子見斗ひ、銚子をわきへよせ

置、進み出島臺を引出で、銚子組付け御嫁女樣御前へ持參り一獻差上げ、加に立ち、其の節、御聟樣御名代として、介添、御緣女樣へ御肴差上げ、少しく下り、御禮なし、以前の所へ着座す。本酌加へて參り、二獻差上げ扣へ樣子見斗ひ進み出、島臺を引出し、銚子組付け、御聟樣の御前に持參り一獻差上げ、加に立ち、其の節、御緣女樣御名代として、介添、御聟樣へ御肴差上げ、少しく下り、御禮なし、以前の所へ參り着座す。本酌加て參り二獻差上げ、本酌 加 大結にて御次へ引く。通 女 中御押臺引き、次に、島臺引き、次に酒引き、次に、吸物膳引き、次に、二の膳引き、御湯を差上げ、介添蓋をなす。通、御菓子持參り、御本膳と引替へて下る。御茶差上げ、終りて、御茶わん引き、御菓子引き、御双方介添、下座に立ち、次の間にて合互の禮有りて上座に向へ、恐悅 申上ぐる。此の時、御一同に御一禮遊ばされ、介添重ねて御ひらき申上げ、下座に控へ、待上臈御先立にて、御双方共、一先、御休息所へ御引なされ候也。但し、御湯は、其の時の御都合により、御中酒前後に差上げても宜し。

上卷結び

石井泰次郎

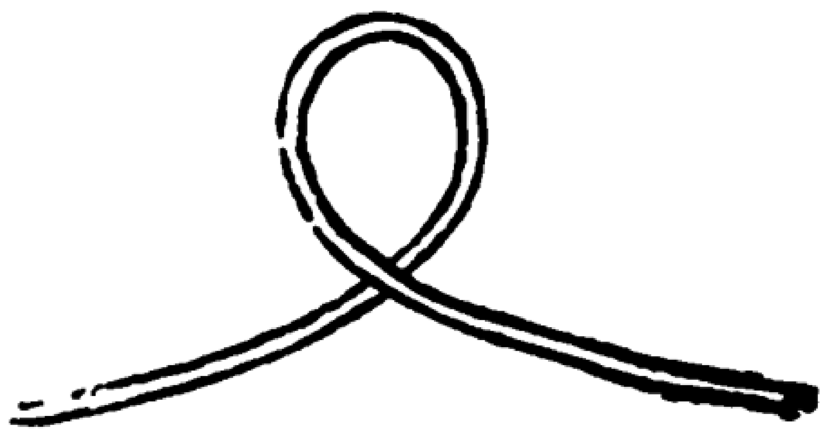
（三） 同一種

是も、結びさまの誤れる近き世の新作ものなり。又、正しき方に合せ見るべき料に記しつるなり。

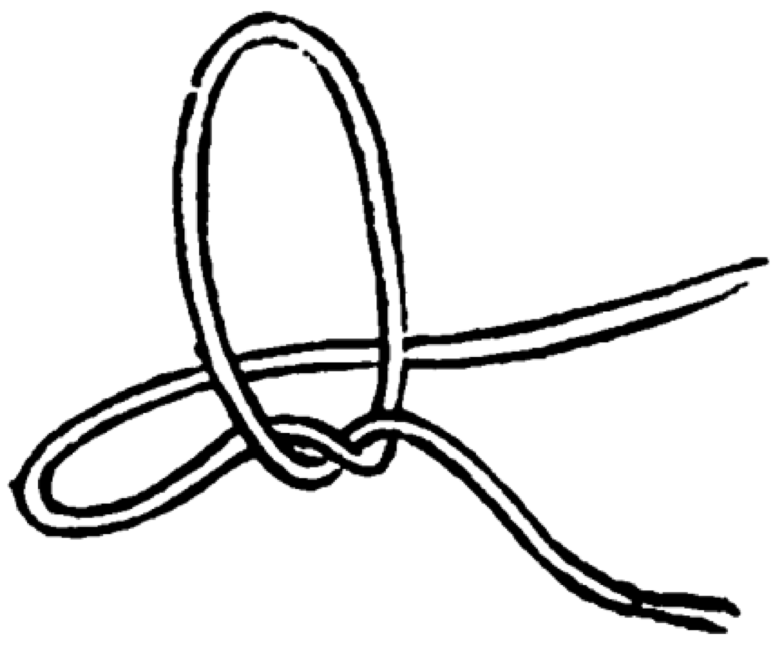
結樣は、先、紐を右より左よりと逆に掛けて、左に左の方の紐先を輪形の内へと一ッ通して、左ののむし、次に、其の紐先を左の方より上の輪形の下へと折まげて、紐先を右の方へと出し、又、

右の方の紐先を、上の輪の上の方を左へとのせかけてのばし、次に、其の紐先を左の輪形の下をすくひて、組合せたる下の結目の左の間へ下より上へと通し、又、右の紐先をも右の輪形の上に掛て、下の結目の右の間へ、上より下へと通して、右の輪形の上の方、左の輪形の下の方と引きて、上の輪形の左、下の紐先の右と引きてしむるなり。

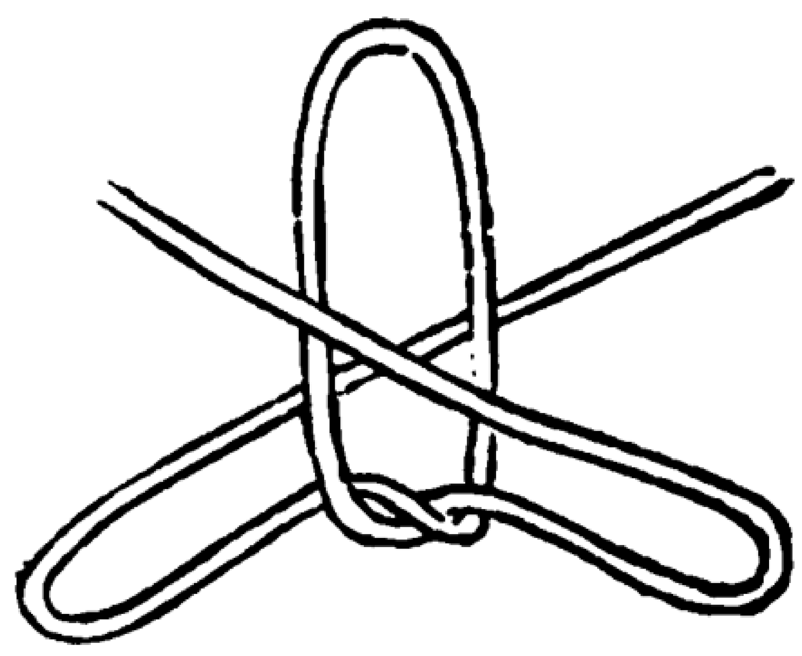
第一圖



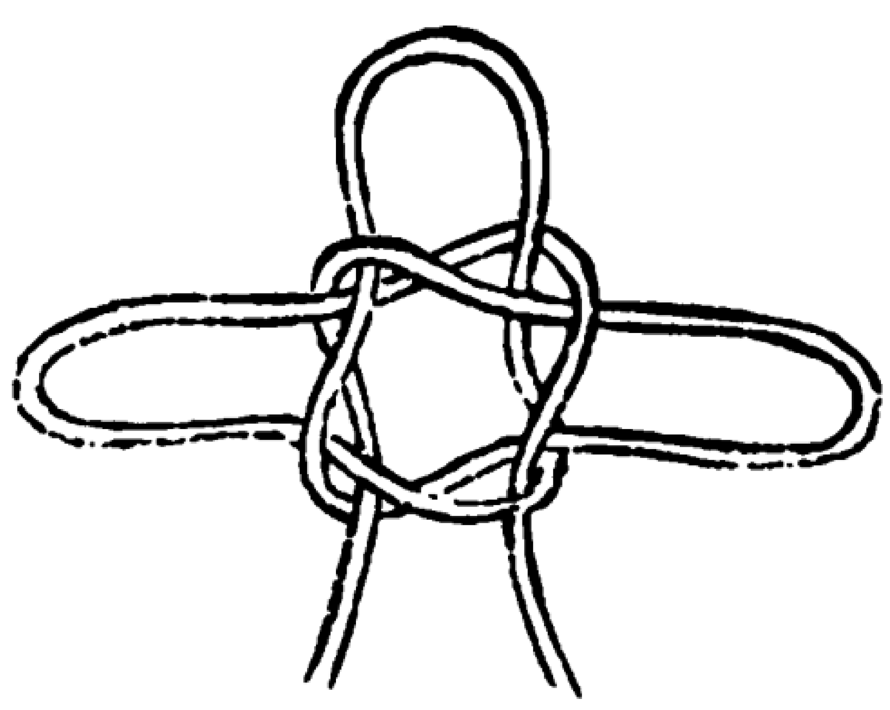
第二圖



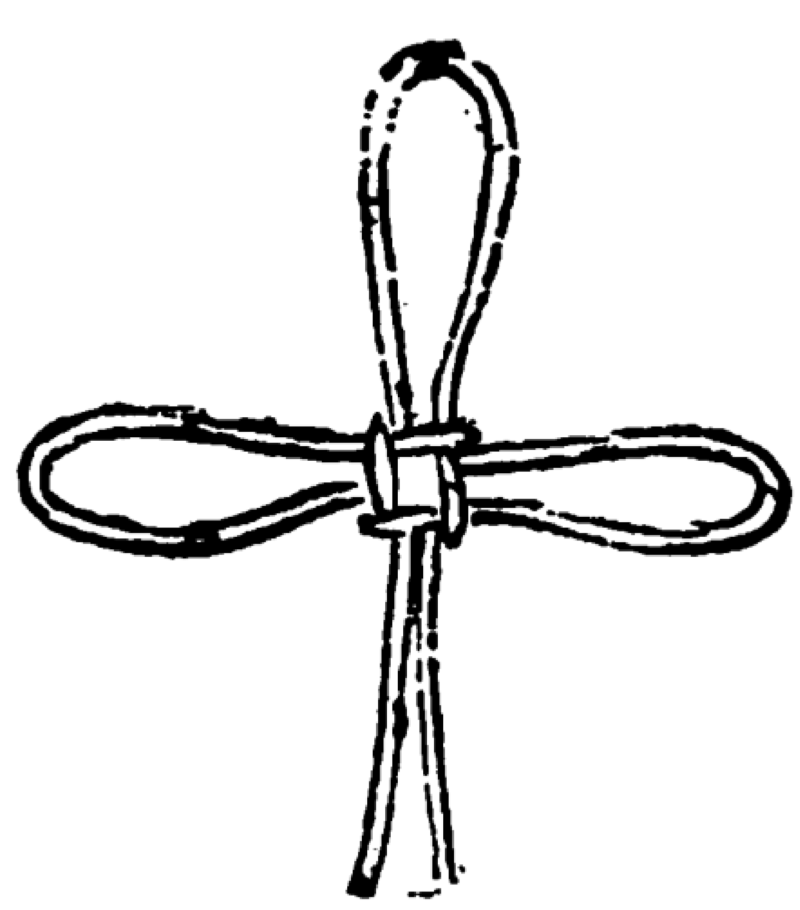
第三圖



第四圖



第五圖



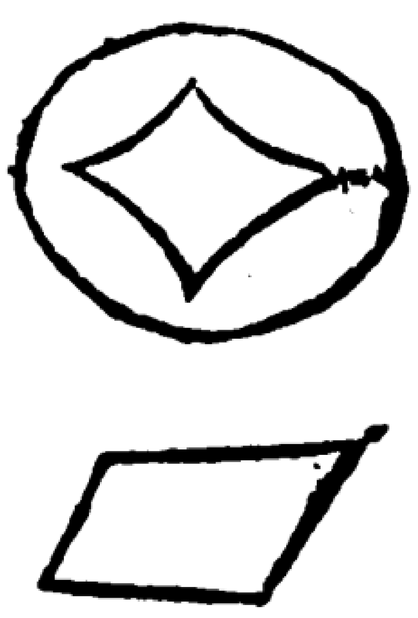
たちぬひ

羽子板をしゑ

西山たい子

寶船(つゞき)

花輪違ひ



上の形は眞中をゑぐりとりて、からとく、そのふちに綿少許を入れ、ちりめんやうの切れをは

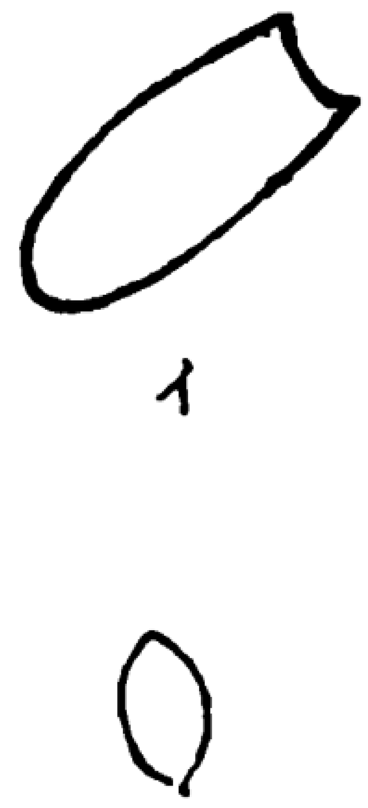
りつけ、下の形には綿を入れず、緋縮緬をはりつけ、その眞中に、金絲を十文字にひきわたり、のりにてつけおき、花輪のわきをる所へ、下の形をすかす如く組み合すべし。

その圖



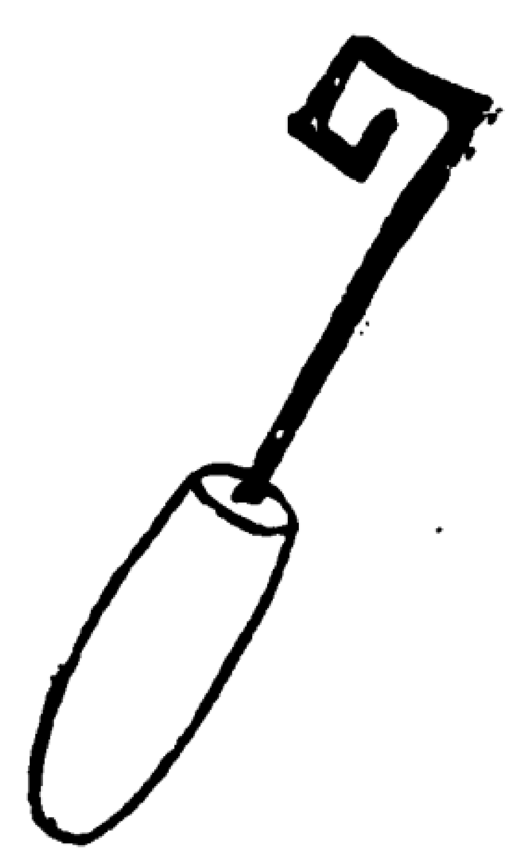
大きさも大方之によるべし。

寶鍵



例の如く厚紙を上圖の如く切り、そのイ印の方には綿小許を入れ、ロの方には綿を入れず、緋縮緬やうの切をすぐにはりつけ、イの下にくみ合せ、左圖の如く、はがねにて、何にてもかぎの形に切りて、はさむべし。厚紙に、銀紙をはりつけたるにてもよし。

その圖



大いさも又これによれ。

だいどころ

筍の鐵砲燒

新鮮き、筍をえらみ、皮付のまゝ根をきり、先の二三節をのこして、節をぬき、切口より、醬油に、味淋を加へ、鹽梅したる汁をつぎこみ、大根にて、汁の漏れぬ様に口をなし、竈にてわら火を焚き、其の灰の中に埋め、蒸燒にして、燒けたる頃取出し、皮をむき、小口より、能程にきり、食すべし。

同丸焼

是は、極めて、若きみじかき筍を皮共に、わら火にて蒸焼になし、焼たる頃取出し、皮を去り、よく洗ひ、能程にきり、山葵醤油、又は、木の芽味噌抔つけて、食すべし。

素麺烏賊

烏賊の、大きなるものを、よく洗ひ、指身庖丁にて、薄くへぎ、これをまきて小口よりきりて、熱湯を、くゞらし、水へいれ、冷して、指身、吸物、茶椀、和物抔に見合すべし。

よめ菜に土筆胡麻あへ

よめなを能く洗ひ、ゆでゝ後、水に浸し、あくをぬき、土筆の皮を去り、同じくゆでゝ水に浸し、あくを去り、二品を、水よりあげ、よくしぼり、鰹節の煮汁に、醤油を、加へ、鹽梅したる汁に、暫くつけおき、別に、黒胡麻をいり、摺鉢にて能くすり、前の二品を、さつと絞りて、胡麻あへになし、器に盛り、出すべし。

煎蠣

蠣を能く洗ひ、まないたの上にのせ、庖丁にて、こまかにたゝき、鍋にとり、食鹽を、能程にいれ、箸にて、かきまはしながら、いるなり、能くいれたるとき、器に、盛りて出すべし。

富みては、まづしき者をわすれず。貧くしては、いやしき者をあなどらず。（初學訓）

貧賤なる人も、もし、よく書をよむで、古の道をしり、古の事に通ぜば、はるかに、富貴にまさるべし。

家人をつかふには、人の心をおしはかり、うれひくるしみ知りて、人のくるしみなき様に、ほどこすべし。（家道訓）



國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義(十三)

うへよりおるゝ道に、辨宰相の君の、戸口を、さしのぞきたれば、ひるねしたるほどなりけり。はぎ、しをん、いろ／＼のきぬに、こきが、うちめ心ことなるを、うへに着て、かほは、ひきいれて、すゞりのはこにまくらして、ふし給へるひたひつき、いとらうたげに、なまめかし。繪にかきたる、ものゝ姫ぎみのこゝちすれば、くちおほひを、ひきやりて、

ものがたりの女の、こゝちもし給へるかな

と、いふに、見あげて、

ものくるほしの、御さまや、ねたる人を、心なくおどろかすものか

とて、すこしおきあがり給へるかほの、うちあかみ給へるなど、こまかに、をかしきこそ侍りしか。おほかたも、よき人の、をりからに、また、こよなくまさるわざなりけり。

釋義

○はぎ　萩とは、襲の名なり。表は、蘇芳にて、裏は、青色なり。

○しをん　紫苑色の下着なり。表は、薄色にて、裏は、青色なり。

○こきが　色の濃きが、と、いふ意なるべし。釋には、濃き香にて、たきしめたる香なるべし

となれど、前後の文のつゞきによれば、いかゞならん。村井本には、こきが、うちめを、こきかうしめに作れり。

〇うちめ　擣目にて、絹を、よく打て、光澤をいだしたるをいへり。

〇らうたげ　﨟たげにて、優美に愛すべき狀をいふ。

〇なまめかし　こゝは、優美の意なり。今、艷冶なる嬌態を、なまめかしき風情など云へるは轉れるなり。傍本、なまめかしを、なよめかしにつくれるは、あやまりなり。

〇くちおほひ　口覆なり。寢顏を、あらはに見せぬため、袖などにて、口を覆ひかくすことをいへり。

〇おどろかすものか　驚かすは、目を覺さしむることをいふ。ものか、は、ものかはの意にて反語なり。

〇こまかに　其の容子の、すべてがなり。

〇をかしう　こゝは、勝れて、よろしき意なり。

〇おほかたも　こゝは、平常にてもの意なり。

譯解

また、ある日、式部が、中宮の御前より、自分の部屋へ、下る道にて、辨の宰相の君といふ女房の居る、部屋の戸口を、ふと、のぞきて見たれば、をりから、宰相の君は、晝寢をして居たる最中なりけり。

その、着たる衣服は、萩のかさねに、紫苑色の、したぎに、又、種々の色の衣服を、下に着たるが、その色の、きはめて、濃くて、うつくしきが、つやのある絹の、擣目の、ひときは、目にたつ衣服を、上着に着て、顏は、襟の中へひき入て、硯の箱を枕として、寢たる、その容貌が、

甚だ、可愛らしく、優美なり。
チヤウド、繪卷物などの繪にかきたる美人か、または、物語などに書きてある、姫君のやうに思はるれば、式部は、その部屋にたちよりて、宰相のきみが、寢顔をかくしたる袖をひき除けて、

さても、むかしの、物語に見えたる、うつくしき女の、きもちがせらるゝことよ、

と、いふに、

辨の宰相の君は、式部を、見あげて、

氣ちがひじみたるなさりかたよ、かやうに、こゝろもちよく、ひる寢して居る人を、こゝろなしに、おこすべきものにはべるか、いな、ムヤミに、おこすべきものにははべらず。

と、いひつゝ、すこし起きあがり給へる、その顔つきの、はづかしげに、ポツト、赤みをおびたる、やうすなど、ドコカラ、ドコマデ、うつくしく、すぐれて、よろしく見えたことでわッた。

實に、フダンカラ、キリヤウノよき人の、今日のやうに、うたゝねしたるをりには、その、ねすがたが、また、一段と、美しく、見勝のするものであるわい。

漢文學講義

佐々木天游

別春居記

林鶴梁

袋井驛。賈人孤瑟。窶甚。平居困レ於二生業一。今茲之春。就二其宅隙地一。植レ梅。搆二小屋於樹間一。鬻二茶酒一。而地極狹矣。梅極少矣。然孤瑟素喜二樹藝一。故栽培

位置。自然得レ宜。而水洒レ之。箒掃レ之。入レ門則覺下清楚之氣。自有二韻趣一。亦足三以一適一也。然孤瑟之意。則不丙レ過以レ此留二過客一。鬻下茶酒上以作乙生業甲而已。頃乞レ予。名二其居一。且爲二之記一。予乃名以二別春一。且記曰。夫東海五十三驛。行旅之衆。最レ於二諸道一。酒樓妓館。駢屋相望。諂言媚色。百方留レ客。甚者至下把二人臂一而引上レ之。是可レ厭也。故行客欲下求二一清境一借乙一雅榻甲。以駐レ笻脫レ笠。逍遙自適。爲中頃刻之憩上者。苦二其無一レ境。幸而有レ之。所レ謂天到二梅邊一別有レ梅者。非耶。亦奚暇レ問二其梅之多少一。與二地之廣狹一乎。然則孤瑟此擧。非二徒然一也。此余之所三以名二其居一也。

袋井驛の、賈人孤瑟、窶甚し。平居生業に困しむ。今茲の春、其の宅。隙地に就て、梅を植、小屋を樹間に搆へて、茶酒を鬻ぐ、而地極めて狹し、梅極めて少し、然ども孤瑟素より樹藝を

喜ぶ、故に栽培の位置自然に宜きを得。而水之を洒ぎ、箒之を掃ふ。門に入ば則ち清楚の氣、自ら韻趣あるを覺ゆ。亦、以て一適するに足るなり。然ども、孤瑟の意は、則ち此を以て過客を留め、茶酒を鬻ぎ、以て生業をなすに過ざるのみ。頃は、予に乞うて、其の居に名け、且之が記をつくらしむ。予乃、名くるに別春を以てす。且、記して曰く夫、東海五十三驛は、行旅の衆、諸道に最たり。酒樓妓館、駢屋相望み、諂言媚色、客を留む、甚しきものは、人の臂を把りて、而之を引くに至る、是、厭ふべきあり故に、行客一清境を求め、一雅榻を借り、以て、笻を留め、笠を脫し、逍遙自適、頃刻の憩をなさんと欲するもの、其の境なきを苦む。幸にして而之あり。所謂、天は梅邊に到りて、別に春あるもの、非耶。亦、奚ぞ、其の梅の多少と、

地の廣狹とを問ふに暇あらんや。然らば、則ち孤悲が此の擧、徒然に非るなり。此れ余の其の居に名くる所以あり。

別春居記、記は紀なり。事を紀しシルスの義にして矢張、文體中の一ッでありますが、單に事柄のみを叙べしものもあり。又は、純ら、議論を用た者もあり、又は、半叙事半議論のものもありますが、單に、事を紀しますものが、記文の本體で、其の餘は、皆、別體であります。

遠江の國の、袋井の宿の、一驛は傳舍の義にして和名鈔に驛和名無末夜とあり。袋井の宿と云ふに同じ。)賈人あは、びとに、(行云レ商、處云レ賈と申しまして、内に居て、商内をする者を、賈と云ひ、外に行きて、商内をするものを、商と云ふ。)名は孤悲と申す者がありますが、貧乏人でありまして、窶甚ヒドク貧乏をして居ます。(窶は貧陋の義なり。)平居平生ツネニ、産業に困みコマリて居ます。(生業は産業に同じく、ナリハヒ渡世のことなり)が今歳の春、其の自分の宅舍の空地に、隙地は、空隙の地と云ふこと。)即いで梅樹を植ゑまして、小屋さゝやかなる家を、梅の樹の間に搆へ建てまして、茶とか酒とかを鬻ぎ商うて居ます。サウシテ、其の梅を植ゑて居ます所の土地は、極めて至つて、狹ふ御坐りまして、ホンノ僅計の地所デアツタ。梅の樹も極めて少くして、タッタ二本か三本でアッタ。(矣はカクアルヅ。又は、カウアッタと云ふ氣味の文字にて、狹し矣少し矣は、狹くアッタ、少なくアッタと云ふに同じ。)されども、(然は轉語あり。地は狹く、梅は少なくあつた。然れどもと、上文を轉ずるなり。)孤悲は、もとより、(素は平素あり。)草木などを、種うることを、喜びスキでありますから、上手に梅の樹も栽ゑてをりま

心に、適し叶うて樂しみ、暫時の間、(頃刻は、シバラクノアヒダと云ふことなり。)杖を留め、足を休めて　休息をなさんと欲し思ふ者、(憩は息なり。)其の清雅の場所がないのに、苦み困りて、休息すべき、瀟洒とした所がないのに閉口する。ドウモ、酒樓妓館、厭ふべきの所計ヂヤ。ソコデ、若、幸に仕合にして、箇樣な清境雅榻、杖を止め、笠を脫ぎて、自適すべきの場所があつたならば、乃五十三驛中の別天地で所謂昔の詩人が申しました天は梅花の邊に到りて、世間の塵俗を離れて、瀟洒清楚として、別に清淨の春があると云ふもので五十三次の塵俗厭ふべき驛路の外に、別に、清雅の春があると云ふものであらう。非耶。サウデハアルマイカで、別に春ありと云ふものであらう。サウシテミルトキハ、亦、何なんとして、(奚は何に同じ。)其の梅の樹の多い少いを、問ひたづねて、

此茲は、梅樹が少ないからイカヌとか、今少し多くなければイカヌとか、云ふことを詮索し、地所の廣い狹いを論じて、アマリ狹い土地だからイカヌとか、モスコシ廣くなければ仕方がないとかと、詮義立をするの暇遑アラウヅヤ。そんなひまはない、梅は少くても、地所は狹くても、瀟洒とした、所でさへあれば、それでよい。廣狹多少を、論ずるの遑はないでアラウヅ。(乎はデアラウヅ、と云ふ氣味の助字なり。)然則ちサウデアッテミルトキニハ、(然則ち、上文の意を承けて、直に轉ずるの辭なり。左樣デアッテミルトキニハと、上意を承けて、轉折するなり。)孤瑟が、此の風景清楚の小屋を、梅樹の花間に築いた仕事は、非ニ徒然一デ、五十三次を往來通行する旅客をして、逍遙自適するの一情境一雅榻を得せしむので、いたづらな、つまらぬ事ではないのヂヤ、此れが、即ち、余れ自

分が、孤琴の居宅に名を付けて、別春と云ふ譯合で、孤琴の此の擧が、徒然でないから、其の請に應じ孤琴の家屋、宿驛の塵俗を離れて、別に梅樹瀟洒の春があるから、別春と云ふ名を付けたのぢや。（此れ余以下一句は此の文の結語なり。）

和文をつくるに、文をあやまり、字をあやまり、かなづかいをあやまり、てにはをあやまる。まづ、この四の誤をさるべし。

今日は、明日の計をなし、今月は、來月の計をなし、今年は、來年の計をなし、平生は、一生の計をなし、生前に、早く死後の計をなすべし。

人われに無禮なりとて、わが恥辱にならざることは、とがむべからず。

我よりは、善をほどこすべし。彼よりも、亦、善を以て、むくゆることを望むべからず。

人の善惡は、多くは、ならひなるゝによれり。

家を保つの道は、勤と儉との二にあり。

和畫通信講義（第十回）

山崎彩峨

第壹回に於て、紅色椿の畫法は、概述せり。墨畫にては、白色の花は、淡墨にて、輪廓をとるのみなれど、もし、花瓣に紅色の斑點散見する花なれば、濃墨にて、これを畫き入るべし。彩色なれば白色は、胡粉にて畫き、黄がち青色の隈を入るのみなれど、色あるものは、種類多し。されど、一一説くの要なし。大別すれば、紅白の二種にして、まづ、常通紅色の花なれば、胭脂をその實物の色に適へる樣に、濃淡をはかりて溶き置き、胡粉を含めし筆につけて畫くなり。もし、白色にして、紅色の斑點あるもの、または、紅色にして、白色の點体を顯はせるものゝ如きは、最初、胡粉にて畫き、乾きて後、紅色にて點体を畫き入るゝか、胭

勾勒



脂にて全瓣を塗りつゝ、白色斑點の形狀を塗り殘すかの二法に從ふべきなり。（餘は第壹回を參照すべし。）

言語をつゝしみて、一言を出すにも、よく思案して、物をいへば、言語はおのづからすくなし。無理に口をさぢて、いはざるにはあらず。言と行と、心と言と、表裏なかるべし。世は海なり。身は舟なり。志はかぢなり。人の心は、時によりかはりやすし。人の心も、わが心も、皆たのむべからず。是後悔なき道なり。一言のあやまちにて、莫大の禍となり。一事のあやまちにて、一生の憂となる。人のあしきことは、わが心の中にしりわきまへて、口には、いだすべからず。人をそしれば、人またわれをそしる。人をそしるは、即ち、我をそしるなり。よろこぶ時の言は、誠すくなし。いかる時の言は、敬すくなし。善も惡も、かならず、小をつみて大にいたる。人のあしきをば、ゆるすべし。わがあしきを、人にゆるさるべからず。

（大和俗訓）

文林



夕落花　東久世通禧

夕まぐれこずゑの花はわかねども
そてにかゝるかおもしろき哉

殘花薰風　佐々木高行

吹渡るかせにかをりてちりのこる
はなもきのふの春しのふらん

岸上藤　高崎正風

舟よせてをらまほしきをみなれ棹
さゝれぬ岸にかゝるふちなみ

若葉に雨ふる　久我建通

降るあめを楢の廣葉にうけとめて
こほれる露もすゝしかりけり

池杜若　津輕承昭

咲にほふ池のみきはのかきつはた
はしよりみるか面しろきかな

荀　水野忠敬

花に酔ひし春はいつしか暮はてゝ
たけの子の世にありにける哉

故郷山吹　宮地嚴夫

むかしわか植ししるしの今もなほ
垣根にのこるやまふきのはな

垣根の卯の花　北郷久政

卯の花のさき初しよりやまさとの
しつか垣根はやみなかりけり

殘鶯　鎌田正夫

藤もみなうつろひはてしなつ山の
まつのこすゑにうくひすの鳴

田うゑうた　千葉胤明

賤の女かうたそきこゆる若葉さす
もりのあなたに田植すらしも

朝雲雀　松浦辰男

つとめても雲雀は床を離れけり
朝いかちなる子等に見せはや

芍藥　蜂須賀隨子

くらへなはいつれか色の深みくさ
ちりて咲つくはなのあわれを

雨後新樹　近衞貞子

村雨のはれたるにはのわかかゑて
みつのしたゝる心ちこそすれ

早蕨　鍋島榮子

こゝろあての花はいつしか散たれと
をりめつらしき初わらひかな

庭卯花　前田朗子

卯花のさきみたれたるわかにはは

日くれゆくもたそくそ有ける

若葉の露　　南郷柳子

白妙のころもてすゝしあさかせに
かしの若葉のつゆもこはれて

山吹散　　常盤井文子

山吹のはなちりそめしゆふくれは
かはつの聲もさひしかりけり

渡船　　大谷籌子

渡りまつ旅ひとあまたつとふらん
ふねよふ聲のかしましきかな

暮山嵐　　小川直子

夕日影かたふくみねにかせたちて
ねくらもとむる鳥さわくなり

雨中山吹　　中島歌子

誘はるゝ花のこゝろはつらからて
にくきはけさのあらしなり見

谷山吹　　宮地　小東洋子

かはつなく細谷かはにかけみえて
春もふかむるやまふきのはな

社頭新樹　　海上壽子

朝風にみしめなひきてしけりあふ
若葉すゝしき神のひろまへ

心の錦

原雉子　　諏訪忠元

とかりするひとはかへりて夕霞
たち野の原にきゝすなくなり

折山吹

里の子にをられ〳〵ていまははや
のこりすくなき山ふきの花

文林

蝶

菜の花の咲つゝきたる春の野に
むれて胡蝶のまひめぐるらむ

夕蛙

夕月夜霞ながらにくれそめて
雨よふかはつこゑしきるなり

春朝

寐くらいつる鳥の聲もなにとなく
のとけかりけり春のあしたは

雨中藤

むらさきのいろもあせんとおもふまで
雨にぬれたる藤なみのはな



心の花

松浦辰男

苗代蛙

苗代みつにすみなれし
蛙は小田の主かも
そこにやどれる月影を
もてなし顔に歌ふ也

某の君の新婚を祝ひて

この高砂のまつかげに
千歳をちぎる君と君
やがてわか松ひめ松の
榮ゆる色を見ます蘭

其の二

あひにあひあふ萬代を
歌ひ交せる君なれば
なかとりもちて松風も
千代の調を合すらむ

うき事は世をふる程のならひぞと
思ひも知らで何なげくらむ
ならひぞと思ひなしてや慰まむ
我が身ひとつの浮世ならねば



竹の御園生

山岡螢雪

異國の代々はうつれどしきしまや
　やまとしま根は久しかりけり

伏て惟みるに、神代の昔、皇祖天神、此の秀靈ある國土を開肇し玉ひて、統を垂れ、極を建て玉ひしより以來、寶祚は、天壤と共に窮り無く、皇統一系連綿として、とこしへに、天下に照臨し給へり。今上陛下、德、日月の如く、仁大洋の如くおはします。大統をうけ給ひしより、常に、皇祖皇宗の大御心を以て、御心とし給ひ、ひたすら、天業を恢弘して、祖宗の神意に副せ給はんことを、圖らせ給へり。是を以て、天地の神たち、天翔り國翔りて、夜の守り、日の守りに守り幸ひ給ひ、稜威、これあがり、國光、これ輝き、日嗣の皇子、彌繼々にあれ出でまして、竹の御園生、年々に繁りまさりつゝ、大御代は、彌榮えに榮えまし〳〵て、天賚、一も欠くる處御坐しまさぬ御事は、更に申し奉るもかしこし。

東宮殿下、畏くも、去にし三十三年五月十日の吉辰に、御大婚の盛典を擧げさせ玉ひし時、臣民の歡びは、例ふるにものなく、萬歲の聲は、天下にみち、心なき草木まで、壽ぎまつるが如くにて、瑞雲禁闕を罩めたりき。

かくて、兩殿下には、二週日の後、即ち、五月廿三日に、茜さす赤阪の御所を出まして、伊勢の神宮、畝傍山の御陵、及、御祖父、孝明天皇の後月

輪東山陵、御祖母英照皇太后の後月輪東北陵を始め奉りて、御近親の陵にも御參拜あらせ玉ひ、妃殿下には、御里方九條家の祖月輪禪閤兼實公、及近親の墓所に御參拜ありて、同じ月三十一日、京都を御發程遊ばして、御睦しく東還まし〳〵き。

さて、幾程もおはしまさず、御慶びの御兆あらせられてより、國民歡呼の聲は、彌が上にも、彌高く、只、御分娩の御日取をのみ、待ちに待ち上げ奉りしに、其の後、妃殿下には、殊の外、御健勝に渡らせ玉ひ、紫の雲、春の御山に棚引き、千年ふる鶴の諸聲は、青山の御空に聞え、御堀の水温にして、遊べる鴎の羽輕く、愈々、御産の紐を解かせ玉ひしは、去ぬる四月廿九日午後十時十分におはしまして、いとたひらかに、彦皇子御降誕まし〳〵けり。天つ日つぎの、彌榮えに榮えまし〳〵て、日の御子のいや嗣ぎつぎにあれませるこそ、實に、天つ神國つ神の、御幸にて、いとも、例少き御慶事には侍るなれ。

かゝるめでたき大御代に、生れ遭ひたる我等臣民の喜びは、如何なる詞を以てのべまつるべき。ここに硯を洗ひ、筆を淨め、つゝしみて、竹の御園生の御繁榮の一端と、且は、歷代の帝の、嘗て、東宮にまし〳〵て、皇子を擧げさせ給ひし、古の例どもたづねまつりて、喜びのことばにかへ、限なき御代の御榮を、壽ぎまつるべし。

千代に八千代に

今上天皇　御名　睦仁

人皇第百廿一代孝明天皇第二皇子
嘉永五年十一月三日御降誕

皇后宮　御名　美子

故從一位一條忠香第三女
嘉永三年五月二十八日御誕生

皇太子　御名　嘉仁
人皇第廿二代今上皇帝第三皇子
明治十二年八月三十一日御降誕

皇太子妃　御名　節子
從一位大勳位公爵九條道孝第四女
明治十七年六月廿五日御誕生

昌子内親王　御稱號　常宮
今上天皇第六皇女
明治廿一年九月三十日御誕生

房子内親王　御稱號　周宮
今上天皇第七皇女
明治二十三年一月廿八日御誕生

允子内親王　御稱號　富美宮
今上天皇第八皇女
明治廿四年八月七日御誕生

聰子内親王　御稱號　泰宮
今上天皇第九皇女
明治廿九年五月十一日御誕生

裕仁親王　御稱號　廸宮
皇太子嘉仁親王第一皇子
明治三十四年四月廿九日御降生

金枝玉葉（きんしぎよくえふ）

有栖川宮

御母勳一等董子　故溝口直博第七女
安政二年六月廿五日御生誕

大勳位威仁親王　故幟仁親王第四子
文久二年二月十一日御生誕

御息所勳一等慰子　故前田慶寧第四女
元治元年三月十五日御生誕

載仁王　第一子
明治廿年九月廿三日御生誕

實枝子女王　第二女
明治廿四年二月十四日御生誕

小松宮

大勳位彰仁親王　故邦家親王第八子
弘化三年二月十一日御生誕

御息所勳一等頼子　故有馬頼成第一女
嘉永五年八月三日御生誕

御繼嗣依仁親王　故邦家親王第十七子
慶應三年十月十六日御生誕

御息所勳一等周子　公爵岩倉具定長女
明治九年八月廿九日御生誕

伏見宮
大勳位貞愛親王　故邦家親王第十四子　安政五年六月九日御生誕
御息所勳一等利子女王　故幟仁親王第四女　安政五年七月一日御生誕
邦芳王　第二子　明治十三年三月十八日御生誕
文秀女王　御姉　弘化元年三月十七日御生誕

北白川宮
成久王　故能久親王第三子　明治廿年四月十八日御生誕
御母勳一等富子　島津久光　妾女　文久二年十月一日御生誕
恒久王　故能久親王第一子　明治十五年九月廿三日御生誕
輝久王　故能久親王第四子　明治廿一年八月十五日御生誕
滿子女王　故能久親王第一女　明治十八年十月十九日御生誕

貞子女王　故能久親王第二女　明治二十年八月六日御生誕
武子女王　故能久親王第三女　明治廿三年三月廿八日御生誕
擴子女王　故能久親王第五女　明治廿八年五月廿八日御生誕

山階宮
勳一等菊麿王　故晃親王第一子　明治六年七月三日御生誕
御息所勳二等範子　公爵九條道孝第二女　明治十一年十二月四日御生誕
武彥王　第一子　明治廿一年二月十三日御生誕
芳麿王　第二子　明治廿三年七月五日御生誕

閑院宮
大勳位載仁親王　故邦家親王第十六子　慶應元年九月廿三日御生誕
御息所勳一等知惠子　故三條實美第四女　明治五年五月廿五日御生誕

賀陽宮

勳一等邦憲王 故朝彦親王第二子 慶應三年七月二日御生誕

御息所勳二等好子 故醍醐忠順第一女 慶應元年十月二十日御生誕

恒憲王 第一子 明治卅三年一月廿七日御生誕

由紀子女王 第一子 明治卅八年十一月廿三日御生誕

久邇宮

勳一等邦彦王 故朝彦親王第三子 明治六年七月廿三日御生誕

御息所勳二等俔子 故島津忠義第七女 明治十二年十月十九日御生誕

多嘉王 故朝彦親王第五子 明治八年八月十七日御生誕

稔彦王 故朝彦親王第九子 明治廿年十二月三日御生誕

鳩子女王 故朝彦親王第八女 明治十一年十月十六日御生誕

純子女王 故朝彦親王第九女 明治十七年三月九日御生誕

朝融王 邦彦王第一子 明治卅四年二月二日御生誕

梨本宮

勳一等守正王 故朝彦親王第四子 明治七年三月九日御生誕

御息所勳二等伊都子 侯爵鍋島直大第二女 明治十五年二月二日御生誕

華頂宮

故博經親王

御息所勳一等郁子 南部利剛第一女 嘉永六年九月七日御生誕

勳一等博恭王 貞愛親王第一子 明治八年十月十六日御生誕

御息所勳二等經子 德川慶喜第九女 明治十五年九月廿三日御生誕

博義王 第一子 明治卅年十二月八日御生誕

恭子女王 第一女 明治卅一年十一月十四日御生誕

御降誕の御先例

謹み案ずるに、神武天皇より、今上陛下に至りまつる、殆三千年、御代を重ね給ふこと、げに百二十二、されど、東宮にましましゝ時、皇子を擧げさせ給ふ御例、いと稀にして、僅に、こゝに記しまつるより外には、只、此の度の御慶事のみにて、ましまさず。しかし、立太子以前、或は、聖徳太子の如き、御位に即かせ給はざりし御方は、のせまゐらせず。

御父母　皇子

第三代安寧天皇……息石耳命
妃　渟名底仲媛命……第四代懿德天皇

第卅八代天智天皇……第四十一代持統天皇
嬪　蘇我遠智娘
采女　宅子娘……第卅九代弘文天皇

第四十五代聖武天皇……第四十六代孝謙天皇
第四十八代稱德天皇
妃　光明子

第五十代桓武天皇……第五十一代平城天皇
妃　藤原乙牟漏

第五十一代平城天皇……阿保親王
妃　葛井藤子

第五十四代仁明天皇
女御　藤原須子……第五十五代文德天皇
女御　藤原澤子……實康親王
女御　滋野繩子……皇子(御名不詳)

第五十五代文德天皇……惟喬親王
惟條親王
更衣　紀靜子
伴氏……源能有

第六十七代三條天皇……敦明親王
敦儀親王
敦平親王
女御　藤原城子

第六十九代後朱雀天皇
妃　藤原嬉子……第七十代後冷泉天皇
妃　禎子內親王……第七十一代後三條天皇

第七十一代後三條天皇……第七十二代白河天皇
妃　藤原茂子

第九十六代　後醍醐天皇

従三位　民部卿局……………………護良親王

曲侍　藤原爲子……………………尊良親王　宗良親王

藤原氏……………………世良親王

御降誕の御例

謹み承はるに、御入内より滿一ヶ年にて、御分娩の御事わりしは、近世御歴代にもおはしまさず。されど、東宮妃殿下には、御入内より滿十二ヶ月を以て、親王を擧げさせ給ふ御慶びこそ、なかなかにめでたけれ。

されば、近世御歴代の皇后御入内より、御分娩に至らせ玉ふまでの歳月など、嘗て、先輩の調べまつりたる一班をかゝげ奉り、明治の皇孫を始めて頂き奉りたる御慶びを、ことほぎまつるになん。

人皇第百廿一代　孝明天皇　英照皇太后藤原夙子御方
嘉永元年十二月十五日入内　前關白左大臣九條尚忠公女　同三年十一月四日順子内親王御生誕　入内より一年十一ヶ月御相當

人皇第百二十代　仁孝天皇　皇后新皇嘉門院藤原繁子
文化十四年十一月十一日入内　准三后鷹司政煕公女　文政三年五月十六日安仁親王御生誕　入内より三年六ヶ月御相當

人皇百十九代　光格天皇　皇后欣子内親王御方
寬政六年三月一日入内　後桃園天皇皇女　同十二年正月廿二日　溫仁親王御生誕　入内より五年十ヶ月御相當

人皇第百十八代　後桃園天皇　皇后盛化門院藤原維子御方
安永元年十二月四日入内　准三后近衛内前公女　同八年正月二十四日　欣子内親王御生誕　入内より六年一ヶ月御相當

人皇第百十六代　桃園天皇　皇后恭禮門院藤原富子御方
寶曆五年十一月廿六日入内　太閤一條兼香公女　同八年七月二日　後桃園天皇御降誕　入内より二年八ヶ月御相當

人皇第百十五代　櫻町天皇　皇后青綺門院藤原舍子御方
元文元年十一月廿五日入内　前關白左大臣二條吉忠公女　同二年閏十一月十一日盛子内親王御生誕　入内より一年一ヶ月御相當

人皇第百十四代　中御門天皇　皇后親中和門院藤原尚子御方
享保元年十一月十三日入内　攝政近衛家煕公女　同五年正月元日櫻町天皇御降誕　入内より三年二ヶ月御相當

人皇第百十三代　東山天皇　皇后承秋門院幸子女王御方
元祿十年二月廿五日入内　有栖川幸仁親王女　同十三年正月

五日秋子内親王御生誕　入内より二年十一月御相當

人皇第百十二代　靈元天皇　皇后新上西門院藤原房子御方
寛文九年十一月廿一日入内　前關白左大臣鷹司教平公女　同
十二年八月二十三日榮子内親王御生誕　入内より二年七ヶ月
御相當

人皇第百八代　後水尾天皇　皇后東福門院源和子御方
元和六年六月十八日入内　太政大臣徳川秀忠公女　同九年十
二月十九日　明正天皇御降誕　入内より三年六ヶ月御相當

近世御歴代の御命名

御命名は、今も昔も七夜の御當日に行なはせ玉ふ、御定あれど、親王宣下は、御降誕、直に、御下し玉ふ。しかし維新前は、數月の後ならでは、御稱へあらせられぬ由承はりぬ。

されば、七夜の御當日を以て、御授からせ玉ひし、御命名を拜記しまつれば、次の如くに侍るなり。

第百八代　後水尾天皇
御名　政仁　御稱號　三　宮

第百十代　後光明天皇
御名　紹仁　御稱號　素鵞宮

第百十一代　後西院天皇
御名　良仁　御稱號　秀　宮

第百十二代　靈元天皇
御名　識仁　御稱號　高貴宮

第百十三代　東山天皇
御名　朝仁　御稱號　五　宮

第百十四代　中御門天皇
御名　慶仁　御稱號　長　宮

第百十五代　櫻町天皇
御名　昭仁　御稱號　若　宮

第百十六代　桃園天皇
御名　遐仁　御稱號　八穂宮

第百十八代　後桃園天皇
御名　英仁　御稱號　若　宮

第百十九代　光格天皇
御名　兼仁　御稱號　祐　宮

第百二十代　仁孝天皇
御名　惠仁　御稱號　寛　宮

第百廿一代　孝明天皇
御名　統仁　御稱號　熙　宮

第百廿二代　今上　天皇
御名　睦仁　御稱號　祐宮

尤も、人皇第百九代明正天皇は、御名を興子、御稱號を女一宮、又、第百十七代後櫻町天皇は、御名を智子、御稱號を以茶宮と稱へ奉れども、女帝にましませば、右の表中には、戴せ奉らず。

あはれ、天地の神の守ります神州の、いや嗣ぎつぎに竹の御園生の御末の、いや末廣に、萬代や八百萬代の窮まりなく榮え玉ふこそ、かしこくも、めでたき極みなれ。(五月五日拜記)

女訓綾廼雛形（承前）

揖取素彦

一、吸物參らす樣菓子を進むる樣躰に同じ。木具は尺を用ゆべし。

一、盃は、八寸の木具に居ゑ出すべし。吸もの一献の時は、一つ盃を用ゐるべし。二つ盃、又、盃をふせて置事は禁忌なり。三盃にせぬ時は、必ず、一盃たるべし。吸もの丶右脇に置くべし。進むる樣躰は、吸物の時に同じ。但し、客の右方によりて進め、開く時には、我が右へひらくべし。

一、銚子は、吸物につゞきて參り、次の間に中座し、さて、樣子を見斗らひ、起ちて客の右より進み、(本來は、左りより參るべきなれども、右より參るかた、都合よきものなり。故に、便宜に從ふなり。)一ひざ、くりつめてつぐべし。初は、つよく、末は細々と盛るべし。婦人少人へは、かるく盛るべし。客盃を下げて辭したらば、强ひて盛るべからず。一度參らせて元の座へ扣ふべし。

一、銚子持樣、口長のものは、蔓を右掌を伏せて持ち、左手をあふのけて、右手の下へそとそへて持つべし。燗鍋ならば、左手を口の下へそへて

持つべし。

一、肴物は、中皿などに、小串を盛りたるを初度参りたる後に、参らすべし。中足の八寸か、略しては、丸盆に居ゑて、持参し、客の前にて、二ひざばかり進みて下に置、皿を両手にとり、盃の臺に置き、八寸を持て、開き立つべし。酌立て一度もる様始のごとし。又、肴参る。醋びて實を盛り進むる様初に同じ。酌又参り、一度もる。夫より、數盃進め、盃納らば、銚子勝手へ入れ、盃臺の八寸を上ぐべし。（上ると云ふは、すべて、膳を下ぐ事を云ふなり。）

女子要書解題（加之部）

三浦千畝

堪忍記　八巻

淺井了意の著にして、寛文四甲辰年の刊行なり。了意の傳は、本朝女鑑の解題にいへり。此の書、全篇堪忍の二字を骨子にして、種々敎訓の事を記せり。自跋に、

堪忍記八巻二十五ヶ條は、耕作の隙々に筆を染てしるしあつむ。もし見ん人、片腹いたく、故人のよだれをねぶる事を、おかしがるやからも有べし。かしこき人のためにするにあらず、たゞ、をろかなる我が妻子にをしへんと也。（下略）

さて巻之六以下三巻は特に女鑑と題して専ら女子の敎訓をかきあつめたり。六巻以下の目錄は左の如し。

第二十、婦人の評
第廿一、姑につかふる堪忍
第廿二、悋姫のおもひある堪忍
第廿三、繼子をそだつる堪忍

第廿四、婦になりたる堪忍
第廿五、陰徳をおこなふべき事

鑑草　（六卷）

中江藤樹の著なり。寛文九年の刊行なり。藤樹名は原、與右衛門と號す。近江の人なり。學德兼備にして、當時近江聖人の稱なり。慶安元年歿す。年四十一。

此の書は、國字を以て記す。文は平易を旨とし、意亦俗情に悖らざるをつとめ、更に儒者の口吻なし。畸人傳の中江藤樹傳に『翁問答といふものを筆せられしを、書估盜て印行せるを聞つけて、後の意に愜はねぞ破らしむ。書價其の費を歎くにより、是を償んとて、女誡のため著されしものを、鑑草と題して授く』と見えたり。

からにしき　（十三卷）

著者は大高坂芝山の妻、成瀬氏なり（芝山は土佐の人、名は季明、字は清介。廣才博覽、程朱を信じ、最も性理を究む。氣宇豪宕、好んで時輩を排斥す。初め小田原侯稻葉正通に游事し、貞享二年稻葉侯の介により、伊豫松山侯に仕ふ）成瀬氏名は壹、字は維佐。阿波の藩士成瀬忠重の女なり。朝夕芝山の側に侍して、其の說を聞き、頗る經籍に通曉せり。又國典に精しく、文墨に嫻る。初め稻葉侯の命に應じ、女則五卷を著す、五旬にして成る。侯其の敏に驚く。松山侯の夫人は、稻葉侯の女なり。夫人衣服の制を問ふ。是に於て裝束抄一卷を撰ぶ。夫人卒去の後、畏慕の余り、寫繪一卷を著して、夫人及聞見する所の賢妃の事を述ぶ。又漢土烈女の傳を譯して姿見一卷を爲り、夫の命に因りて古敎訓一卷を作り、稻葉侯及松山侯夫人の問に對へて、詩文和歌を評論し、これを柳櫻集と名づく。

凡て六部十三巻あり。これを合して唐錦と曰ふ。此の書即ちこれなり。

唐錦と題せしは『思ふどちまどゐせる夜はからにしきたゝまくをしきものにぞありける』といふ古歌によりたる由あり。さて此の書後に自ら増補訂正して女則五巻續女則十巻に作れり。

鐵漿訓（一巻）

三浦安貞の著あり。安貞名は晋といひ、梅園と號す。豐後杵築の人あり。恒に天地造化の理を究めんと欲し寢食を忘るゝに至る。年三十始めて天地に條理あるを知り、於是て玄語、贅語、敢語の三書を作れり。之を梅園三語といふ。天明三年、杵築侯梅園を召して國政を諮ひ、待つに家老の禮を以てせりといふ。寛政元年三月十四日歿す。年六十七。

この書は、女子夫の家に歸し、一度鐵漿をもて齒くろめしては、復夫の家を出でずとの訓なり。天明元年の作。

詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

文屋康秀

あか〳〵に身におはざりしことのはのにしきや人の目にとまりけむ

古今の序に、詞たくみにしてこゝろざま身におはず。いはゞ、商人のよききぬきたらむが如しとある。これによられたりや。一首のうへ、ことばいやしくて、にしきもよしなし。初句、中にも叶はず。身におはざりしことの、人の目にとまりたらむには、やさしかるべきを。作者のごとくいひては、一首の趣意とほらず。

崇德院

つれなくもせきかへしたる水くきの
　　あとの恨にしづむ君かな

前にいへる、法の水せきとめかねて云々といへる如くにて、此の歌、水くきとあるからに、せきかへしたるなどいへるにや。ことばたらはぬなり。水莖のあとゝある、こは、御經なれば、たゞ水莖とのみにては心ゆかず。はた、あとの恨といへるは、語をなさず。跡とは、いはゆる筆のあと墨のあとにて、むかしの跡なれば、こゝに叶ふべからず。

源賴義朝臣

みなもとのさかえしられておのづから
　　わきいでにけるいはしみづかな

三句、おのづからといふ詞叶はず。賴義朝臣が、弓もてつきたるに、淸水のわき出でぬをよめるなるべし。されば、そのさまなくては、詞たらはで、きこえがたし。

源義家朝臣

とゞめおく言葉の花にみちのくの
　　せきのなこそは高くなりけれ

結句、俗調なり。高くしられとこそいふべけれ。さてしも、關の歌になりて題にかなはず。

安倍貞任

ほころびむころものたてをしばらくは
　　ぬひとゞめたりいとのみだれに

ほころびむは、いまだ、しからざるほどの詞なり。此の時は、既に破れたるなれば、ほころびしといふべきなり。はた、糸のみだれは、其の時の詞ながら、亂れに、ぬひとゞめたりとはいひがたし。一首の意、此の歌にては、暫く、衣の舘をとりとめたるが如くいへれど、たゞ、一

身をのがれしまでにて、衣のたてをふせぎとめたるとはことなれば、さてえがたし。

曲亭馬琴の眼中に映ずる女性を論ず（其の廿六）

白松園主人

三勝は、實に針の蓆に座するが如くにて、敷波が答を聞かんとせり。敷波は、さすがに、年長けたれば、老練ある口調をもて、自分の來りし所以を、說きぬ。

喃三勝どの、大家の老臣を笠に被て、不義淫奔を責め罵り、恥かゝせんとて來もせしかど、推量り給ふかも知られど、絶ゑてさる筋にはあらず、色情は、思案の外とやらん、引手あまたの其の中にて、誠を見する……かくそひさげて居給ふこと、大和へもほの聞ぬ、うち腹だつかと思の外、なほこりずまに園花が、夫の無事を歡びて、此の頃は、顔の色もちとは見なほす母がうれしさ、我が子を譽むるにはあられど、妬心は露ばかりもなければこそ、此の七年、泣き去りに去られながら、親の諫も聞き入れず………聞けば、女子さへまうけ給ひぬとやらん、何事も世過身過、たとひ商人になり下りても、半七は恙なく、御身も無事におはするを見れば、恨もなには潟、あしかれとては訪はぬものを、………

よく云へば、薔薇の花に刺尖あるが如く、わろく云へば、笑の中に刄を隱す、ともいふべき挨拶あらずや。是に於て、三勝は、若氣の惑にて、色にめでもし、めでられもしたるに非ず。半七の迹を晦ませしも、元來、忠義の爲あから、あらはには云ひがたきよしを辨じ、さていはく、

さてもかくても世の中に、賴む蔭なき三勝が、たはて恨もなき人に、恨みられなん、罪障は、重きがうへの小夜衣、いたづら婦といはろとも、ふたゝび夫が世に出でば、尼とも奈良に

歸參の事、神や佛へ合す掌も、只これのみに侍りし……
敷波は之を聞きて、その三勝がゆひなづけの女なる事の、豫想に違はざりしを知りぬ。依て、彼は、その持論たる法理的口調を以て、私緣と公緣とを區別し、進んで其の輕重に說き及ぼし、わが女園花は、主君の許可を得て婚せし、所謂公緣なれば、正妻なり。さればとて、子まである御身を、なさけなく離隔せしめて、快しとするが如き、我が女兒には非ず。かゝれば、御身を舊の如く半七にかしづけて、妾とし、又、女兒園花は、奈良と浪華を隔つとも、芳契昔に異ならぬよし、半七が、只一簡の消息を通ずるに於ては、耆婆遍鵲の良藥にもまして、女兒が病の癒えん事、疑ひなからん。但し、こは母たるわらはの願にして、わが夫典膳の志はさにあらず。と論法一轉して、巧みに、三勝の胸裏を翻弄し、我田引水的に、三勝をして無理往生に、我說に服せしめんとせり。
乃ち、彼は、夫の名を借りて、說いて曰く、夫典膳は、半六に欺かれて、最愛の女兒を、うつけき半七に妻あはして、面目を失ふのみならず、得がたき愛兒を見殺しにするよ。既に、半七の在處を知るに於ては、猶豫なく捕縛して、年來の鬱憤をはらさでやは、と息卷きぬ。思ふに、こは親たるものゝ心にて、いと無理ならぬ事ながら、之また、却りて、園花が病をます一因なりと、恐嚇し、更に、百尺竿頭一歩を進めて曰く、
思ふ事叶はねばこそ、うき世なれ。いひがたき事なれど、夫の爲めと思ひあきらめ、己れから飽かれて、半七と離別して給はらば、夫典膳が憤りも忽地にはれ、半六どのゝ蟄居もゆるされ、品によりては半七が、歸來の願ひも稱ふなる。半七を罪なはし、半六殿に日の目も見せぬも、又見するも、そなたの心にあるべきなり。痛ましや、半六殿は、老のくり言世をはかなみ、舞々の古狐に、魅られたるしれもの、わが子

憎しさ罵るは、人前ばかり、この七年が程閉ぢこめられて、いさゞしく老いさらばひ、慾に惑ひし身のあやまちを、泣きくらし給ふさぞ。思ひ死する園花や、子ゆゑに惑ふ半六殿を助くる上に、半七もなり出でゝ、忠孝の道にしも立ちかへられば、誰がそなたを譽めざるべき。退がれぬ契りを思ひたゞて別るゝ操は今の世に、稀なる女子といはれ玉はゞ、三方四方の身の絡り、………

情に似て無情ある言を發し、理非所をかへて陰險手段を行はんとするに至る。元、敷波は惡人に非ず、しかも、子の爲めには、良心を驅つて此の惑に至らしむ。噫、人の性は惡ありといひし、荀卿が説も以あるかあ。

涙の泉堰きかねし三勝は、屹と思案を定め、夫と舅とを世に出すも、我身ひとつの故あらば、斷念せんと答へぬ。張りさく如き胸の中、名狀すべからざるにひきかへて、獨りほく〳〵とよろこばしきは、敷浪ありき。

そなたなり、園花なり、揃ひもそろひし心ばせ、容止のみか心まで、美しすぎて痛ましさも、ひさしほなり、………

彼は遂に轉じて、半七が忠義の爲めに、京都を遁れし所以を、詰りとひぬ。三勝、遂に、その始終を語りぬ。敷浪、はじめて之を聞きて、半七等の忠義を知りぬ。されども、猶、三勝をして關係を絶たしむる事を、止まらず。その哀別離苦に代ふるに、第一の慰藉物ありと稱し、乘り來りたる轎のうちより、お通を出して見せぬ。之れ、曾太郎が救ひたる者あり。されど、三勝は悦ばざりき。片親にはあるゝ、この子の薄命、貧しき母が手に育てんより、之れをも大和へ伴ひ給ひて、せめて孫とも思召せと、決心の固きを示し、さて、

たさひ、夫は何さもいへ、思ひ絶ねにし妹脊の契り、互みがはりのまもり添を、睕の中へ投げ入れて、ねぎ事かへすうぶすなの、庭燎さも見給へかし、さ誓ひたはり、白やかなる項に掛けたる護身嚢の、紐がいはづせば、はらりさ落つる、

三味線の撥の片われ、………

此の撥こそ、敷浪が心を劈く曲者なりき。三勝に貿して、初めて三勝が父の紀念の片割は、たしかに、敷浪がもちたるなりき。是に於て、三勝は、亦、敷浪が實子なる事を、知るを得たり。愕然、また愕然、夢か、あらず。現か、夢の如きを如何せん。

敷浪は、忽地に、面目を失ひぬ。我子の前にて、面目を失ひたる敷浪は、更に、生きたる心地はせざりき。

……三勝は、一五一十を物語れば、數波は已が子に羞つるの幸福、綾や錦に裝ひたていも、心のつゞれは窶々しき、そなたには遙に劣りて、おぞくも缺げたる婦の道、………

彼は、三勝の父に別れて、大和に至り、典膳の婢となりて、遂に妻になり上りし始終を語り。さて大にその身の不貞を歎きて曰く、

姉の夫を妹に、そはせんさする盞しらず、穢き母が心に似よさて、閨花にも操を破り、半七が事を思ひ絕ねよさ、いく度か勸めても、承引ざれば、せんすべなく、又おめ〱ここに來て、道理めかしてわりくどき、忠臣烈女の中をさく、おもへばわれは淫婦、愛に溺れて、又愛を失ふ。因果は忽地に、親子三すぢのいさせめて、天道のいましめは、割符を合す。撥さ撥、面目なや。………

遂に、仇敵が、互に、或は親子となり、同胞となり。或は、夫婦となれり。之、馬琴が、例の因果應報のよる所を示し、勸善懲惡の微意を寓する、唯一の手段なれども、余輩の頗る欠點とする所なり。之、八犬傳に堂々たる家の令孃を以て、犬に配せしが如く、自然に背くのみならず、何となく、人をして忌々しき感を抱かしめ、餘りに怪異を語るに過ぎたればなり。

之に依りて、敷浪半六は、その身を羞ぢて浪華なる千日寺に自殺し、半七も三勝と共に死を決した

りしに、圖らずも、厚倉等に留められて、再び奈良に歸參をゆるされ、續井家第一の忠臣として、三勝を正妻とし、園花を側室とし、その家永く傳はり、又、平三も士家に取り立てられたり、といふに終れり。

○以上掲げ來りし如く、余は、只、馬琴が女性を紹介するに留まりて甚だしく論評を加へざりしは、題言に背くに似たれど、一は多忙なると、一は杜撰なるとを恐れて、主として、婦人の龜鑑的性行の記事を、系統的に約述し、又、なるべく、そのうるはしき文章を掲げて、孃たちが、朝夕の文の資料ともなさばやとての、老婆心なりき。看る人、ゆるし給ひね。

（以下次號）

一夕話（承前）

大宮兵馬

果敢なく月日過ぎゆきて、次の年（安政六年）の十月となりぬ。其の月の初つ方、或る方より文おこせたり。封おしきりたるに、今年九月十四日になん、叔父君は江戸にて遂に牢死せられぬると、書いつけて有り、見るより目も打ちくれ、吾にもわらで、涙に臥し沈みたりき。其の折りの悲しさは、今思ひ出づるも、袖ぬるゝ程なり。されど、若狹には、幕府方の人のみなれば、誰かは憐れと思ひしらん。只だ、藤井の伯母上、矢部の叔父君こそは、忍び音にも泣かれけめ。顧みがたきは、世のさまなりけり。

其の頃、矢部の家にて、叔父君（源次郎）の元服の時に下し給へる前髮のあるを見出でたれば、其を

ば、せめて、京に持ち上り、御墓をだにも作らばやと思ひわたれども、其も、女の乏しき身にて心にもえ任せずて、たゞ、歎きになげき、憂へに沈みてぞ過しける。

さて、月日立つほどに、折節、京都より、下岡源祐といふ人の、夫婦づれにて若狹に下りしかば、其の人によりて、上京後の事どもを頼み、又、母方の叔父君なる、竹岡某の詞を添へられしかば、やう〳〵、矢部の叔父君の許も出でゝ、供人一人召連れて、再び京へ上りけり。(この折りの心には己れ世に出でゝ、御國の爲に盡さずは、重ねてこの家の門をば踰ゆることのあるべしやと思ひぬ。)京都に着きしは、己れ二十一の歳(文久元年)の七月某の日なりけり。其の時は、夜深なりけるに、いたく雨降りて、あたりの闇きに、行く先も見え分かず。殊に、世を憚れる身にしあれば、尋ぬべき人も尋ねあへず、すべきやうなくて、たゞずみけるに、やう〳〵、彼方に、蕎麥屋の火影ほの見えぬ。立ち寄りて、暫し休らひ、さて、此のわたりに宿屋もぞあると尋ぬるに、其の主人は、如何に思ひけん。漸く、夜も深きに、今夜は、兎も角も我等が方にて明かし給へといふ。其の懇ある詞の嬉しくて、此處にて明くるを待ちぬ。次の日は早く起きて、二條の城の傍なる龜山屋敷の長屋に彼の下岡を音なふに、下岡、いと懇ろにて、今よりは此處に宿られよとて、何くれといたはるまゝに、やがて、其處にぞ留まりける。

さて、故の叔父君の弟子に、北村屋太助といふ者あり。いと情深き者なれば、己れ尋ねゆきて思へることども包む所なう、仔細に語り出でゝ、晴の着物髮飾など有る限りをば、其れが手にて賣代にして、三兩二分の金子を得、これにて、叔父君の

墓石を誂へてよといふに、北村屋打ち泣きて、斯かるためしは、昔物語にのみこそ聞きもしつれ。今どきの若き御婦人のおん身にしてをとてあはれがりて、いと懇に、己れをばいたはりたり。

かくて、墓石も整ひぬと告げ來しかば、彼の鳥部山の安祥院なる、日限地藏の傍なりし叔母上（叔父君の先妻）の墓を尋ぬるに、元より、標石もあらざりければ、今は、人に蹈み荒らされて、何處とも見え分かぬを、からうじて尋ねわたりて、其處に叔父君の御墓を作り立てぬ。即ち、彼の元服の折の前髪をば、亡き御骸に擬らへて、葬のわざをも、形ばかりに營みつ。

世に憚る所多ければ、かねては、誰にも告げやらざりしを、ゆくりなくも、やう〳〵聞きつけて、忍び〳〵に集ひ來しは、巽太郎、松本爲造、北村屋太助、山口薫次郎、松坂屋清兵衞、同じき妻、

大高忠兵衞、古高某、鳴尾某など始めにて、十三人の人々なりき。其の折り、前髪を納めたる壺と其の箱とは、山口薫次郎より贈り、墓石の文字は巽太郎之を書きたり。其は、表には、唯だ、雲濱先生墓と記し、裏には其の建立のあらましを述べまた、姪女富門人中と記しつ。（梅田の姓を書かざりしは、殊更に、世を憚り恐るゝ所あればなり。）

また、此の日、松坂屋清兵衞よりは、齋の物にもせよとて、重詰を贈られぬ。其れをば墓前に手向け歸るさに、人々、六波羅の邊なる貸席に立ち寄りて、齋の式をも終りたり。（後に、長州の宍戸玄兵衞、福原與曾兵衞、入江九一、久坂義助、播州の秋元正一郎等の人々、墓所建立の喜びにとて、金子ども己れに送りおこせしをば、皆な、北村屋太助にあづけ置きて、香花の料どもにものしたり。）

此の集へる人々は、後に、召捕られて、獄中に病

み、或は、切られなどして、皆な、果敢なくなりしぞ悲しかりける。

謎うた

超舟漁史

秋風のはらへば露のあともなし
はぎの上葉もみだれてぞ散る

とは、翁艸に、勅製謎の御歌といへど、何れの帝の詠せ玉ひしや。知らんすべなけれども、如何に高妙なる此の歌よ。解に曰く、月、心は、つゆの跡もなしといひ、はぎの上葉の散るといへば、殘るは、つとぎの二文字となる。されど歌には元濁點をつけねば、即ち月なり。已、先頃ふと拙き謎うた一首を得たり。諸媛、幸に其の解を試みてよ。

はがねにも鐵にもわらぬ麻糸を
四國刀となどかいふらん



谷子爵夫人

田島生

夫人の令名

西南戰爭に於ける決勝點は、熊本城の防衛なりしなり。谷子爵の、この際に於ける功勳は、千載に傳へて赫々たらむ。今は、賢婦人として誰知らぬものなき子爵夫人の令名も、この秋より、洽く、世に聞えわたりけり。

籠城中の夫人

彈丸霰と飛び來る間にありて、同性に濺ぎし慈悲の涙、勝敗の大機を隻手に握れる夫の負傷に、

手づから介抱もなからぬ、その間の痛心さては、將校士卒に對しての美談など、詳細に之を記さば、わが女鑑すべてを費すも、なほ、つくす能はざるべし。

家庭に於ける夫人

しかしながら、わが子爵夫人について讀者に告げまほしきは、如何に、其の舅君に仕へて孝養を盡されしか。如何に、其の夫君に貞節なるか。如何に、また、其の兒孫をして、美しき家庭の中に、平和と溫愛とにつゝまれて、成長することを得せしめたるか等なり。

嘗つて之を聞けり

今こそあれ。夫人の歸かれしころの谷子爵は、高知藩にて、五人扶持といふ卑き身分にて。夫人の生家は、其の藩にても歷々の内に數へらるゝ家筋なり。而かも、夫人は、よく、艱難に堪へ、辛苦を忍びて其の内政を理め、夫君をして、毫も、内顧の憂なからしめざりき。子爵、今日の成効も夫人に負ふところ尠からずといふ。

御國自慢の一節

拾餘年のいにしへ、生が、九段中坂に下宿せし時、度々、宿主を訪るゝ土州の老婦ありき。來る度びとに出づる御國自慢の中には、必ず、左の一節を洩さゞりき。

老人を、安樂に長壽させやうといふ希望は、どなたも、持たぬ人とても無いことだらうが、さて、壽命ばかりは、いかな、耆婆遍鵲でも自由にはならぬ。山の樣にある黃金は、この點においては殆ど、塵芥の樣なものです。まして、かよはき人を、よく安樂に長壽させやうといふことは、全く、神樣の御力でも出來なからうかと思はれますが、いかがです。

ところが、わが土佐には、その神樣よりもえらいかと思はれる方が御座います。即ち、谷樣の夫人です。

谷樣の父君は、お若いからの御病身で、到底、四十の坂を上ることは出來なさるまいといふのが、彼の方を御知り申した人のたれも、皆、内内の心痛であつたのです。

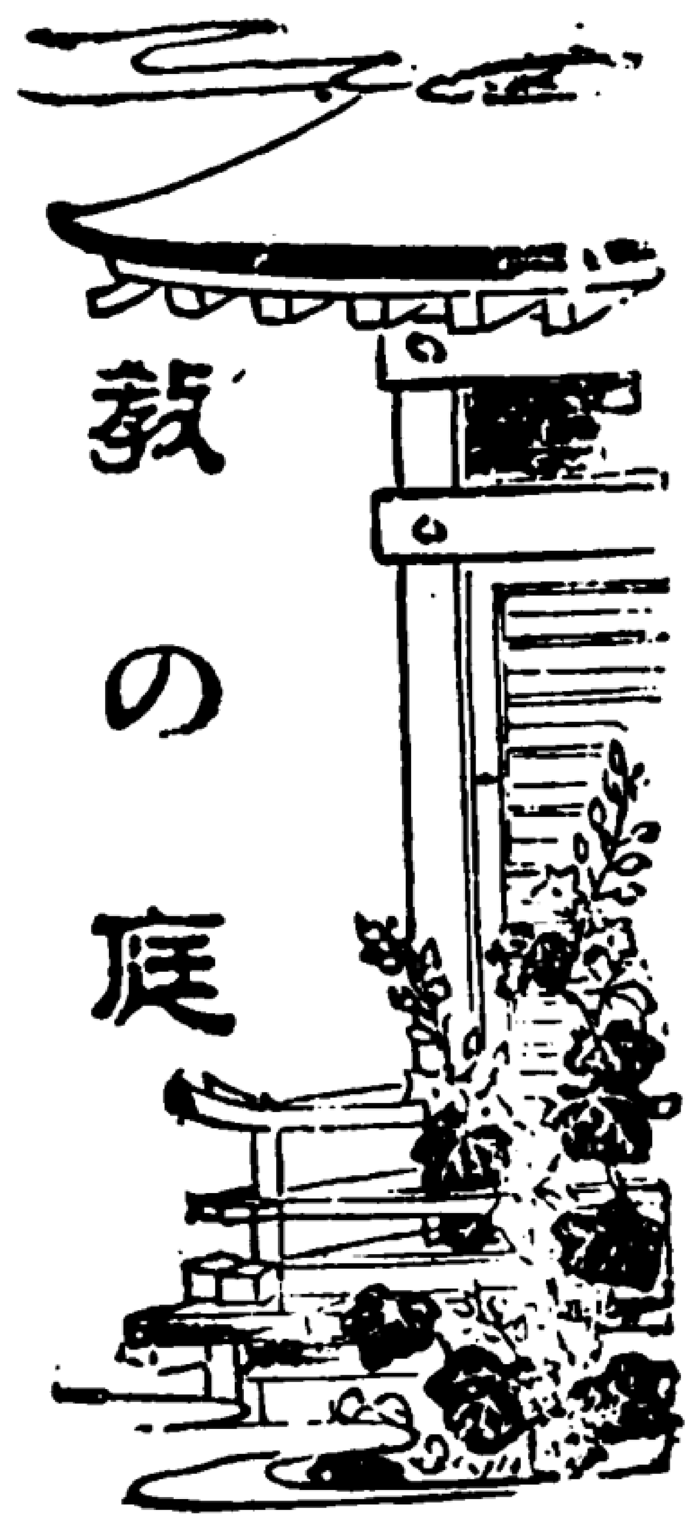
然るに、この夫人が御出になつてからといふものは、それは〱、其の御孝養、なみ〱のことでは御座いませぬ。日に三度、毎日の食事も、身體の營養になるもので、不嫌ものをばかり擇び、野山への運動、家内に靜養の時、その時その折に從うて、世の憂事をわすれて、たゞ、氣樂に消光させ申しました、勿論、谷樣へ仕へることも粗忽はござらぬ。機も織る、畠もする、御不自由がちの中で、些とも、心配らしい樣子さへ遂に見なかつたといふ位。

何と、この夫人の御孝養で、父君は、七十餘歲といふ長壽をなさいました。

男の方の國自慢、そりや澤山でございませう。けれども、妾は、婦人の溫順にして慈情厚き實心は、人の壽命をも長うすることが出來るといふ實例を、世に示された、この夫人のわが土州の方で御座るのが、何より嬉しう御座います。

すべて、御國自慢のなにかには、しば〱といはず、大方は、二度三度にいたるをだに、不快に感ぜざるもの少し。たゞ、このものがたりのみは、聞くごとに、景慕の念を深うせしめ、遂には、彼の樹靜ならむとすれど風やまずといへる句をよみて、涙をおとしきといふ、古の人の心さへ思出されて、われも涙にくれぬべうなりぬ。いでや、いでや、斯る御方の平素の御心がけを聞きて、讀者の敎ぐさにせばや。

（未完）



皇孫の御降誕をいはひ奉りて

日本女學校講師　下田義天類

大木小木、瑞枝さしそひ、青山のさかゆく時に。安みせす吾が大君。高光る日嗣の御子の。大御妃の御子うましつと。おほやけゆのらせ給へば。天がした國のことぐ〜。我が君の御代萬代と。諸聲にうたひまひつゝ。物澤におほみたからは。門ごとに御旗つらなべ。大御代の榮を仰ぎ。さす竹の大宮人は。九重に車ひきつれ。大前のみさちをいはひ。上下のおみのことぐ〜。あなかしゝ我が日に得たる。かぎりなき悦のこと。眞心にはざさくるほし。まめやかにほきもとほせり。これやこの御國のすがた。大君は國の大君。人草は君の人草。かしこけど臣のいづこは。大君の御祖の御すゑ。大君の遠つ御祖は。人草のおやの大もと。かゝれこそ遠き神代ゆ。君臣の中のむつびも。おなじいへのうからのごとく。上下の中のよしみも。ひとついへのやからのごとく。ことはりの外にしたしみ。大君のよろこぶふしは。御民等もそこをよろこび。御民等のたのしむはざば。大君もこゝをたのしみ。御代かさね手風となして。うつそみの今のをつゝに。まのあたり傳へ來にけれ。これやこの國の御手風。國こぞり臣等こそりて。御瑞枝山さかゆく木々の。朝風になびくがごとく。夕風に波よるごとく。かたよりになびきよりつゝ。皇御

孫の御子の命の。あれませるけふをことほぎ。あらひます御子の繼々。青山の榮えゆかして。夏樹立しみゆくことく。いやひけにしけりさかゆき。蔭廣き恵の露に。あめのしたうるほしませと。うらもあくいのるさまこそ。神あからあらし。

皇孫の御降誕を祝ひまつりて（日本女學校生徒）

皇御孫のうまれたまひしことほきに
しつかふせやもにきはひにけり
永井みつ子

さらにまた君か八千代のかすそへて
そのゝわかたけ生ひしけりつゝ
岩田よれ子

こゝの重の御苑に生ふるわかたけの
すゑかゝれさいはふ今日かな
小川つろ子

さきはなる御苑に生ひしわかたけの
みさりのいろは千代もかはらし
加藤まさ子

さきはなる御園のまつのわかみさり
いやしけりゆく今日そうれしき
杉山君代子

御園生に生ひそふまつはふた葉より
千代のれさしのいろそ見ねけり
大野よし子

ゆたかなる御代祝ふなりひなつるも
千代田のみやにたかくまひつゝ
高柳むめ子

千代八千代かはらぬ松をやさゝして
きみか代いはふひなつるのこゑ
國府田春子

こゝのへのみそのゝまつの若みさり
ちさせをふさもかはらさりけり
大友はつね子

軒ことに御はたかゝけてひこ御子の
あれましゝ日をいはふ今日かな
荒木はる子

常盤なるまつにすこもるひなつるの
千代よふこゑをきくそうれしき
海野りう子

御苑生のまつのこすゑにひなつるの
こゑきく今日そうれしかりける
藤波たま子

明らけくをさまる御代に生れあひて
けふのさかねをみるそうれしき
江面かく子

茂りあふみそのゝおくにわかたけの
みさりをそふる今日のうれしさ
柴田のぶ子

さしのほる日のお旺御旗かゝけつゝ
きみか八千代のひかりをそそふ
小野はま子

みれたかくそひゆる松の千代までも
さかゆく御世そめてたかりけり
今井たい子

朝日かけにほふやまへにあしたつの
くもらぬ御代をいはふ今日かな
吉川なか子

榮ね行く御代の根さしさ千代や千代
たけのそのふのいやしけるらむ
藤本しづ子

朝日かけにほふ御そのゝふた葉まつ
八千代さかねんいろそみねける
當間すみの子

彦御子のさかねいませさなさな子も
打ちほゝゑみていはふけふかな
北島ふさ子

安らけくをさまる御世もめてたきに
鴻巣さし子

たけのその生もいやしけりつゝ

かけまくもあやにたふさき皇御孫の
うまれたまひし今日のうれしさ
關口いく子

かしこくもすめらみ孫のあれましゝ
今日ないはゝぬひさあらめやも
大野よし子

君か代をうけつきゆかむひこ御子の
うまれたまひし今日のうれしさ
加藤まさ子

あさ日さす雲井のそらにまふたつも
きみかちさせをいはふ今日かな
杉井かすゐ子

千代八千代大ほうちやまの松か枝に
きみかさかゐをいはふあしたつ
高木きさ子

あめつちの榮ゐむきはみよろつよも
たけのその生のしけるうれしさ
會田まつ子

御苑生にねさしかためてわかたけの
つきぬ御代こそめてたかりけれ
樋畑ゐつ子

をい松にすこもろたつはしられさも
きみかよはひは八千代さそ思ふ
淸水てふ子

さしのほる朝日もさもにひこ御子も
いよゝさかゐんうらやすのくに
濱口ころく子

御園生のまつのこすゑにまふたつの
さきはにゐませ千代も八千代も
秋岡れつ子

松たけの千させをこめてまふつるは
いく代かはらぬためしなるらむ
關口ませ子

さやかなる君か八千代ののさけさを
そらさふつるのこゑにこそしれ
關口きぬ子

いつしかさまちにし今日の樂しさは
はるのやよひのこゝちこそすれ
赤尾つた子

たみくさも千代に八千代さ祝ふなり
くもゐのみやの今日のめてたさ
林きみ子

さゝさはにきくもたのしな松か枝に
千代をこめたろひなつるのこゑ
菊地かれ子

かしこくもうまれたまひし彦御子を
いく千代かけていはふ今日かな
野口嘉子

千代八千代よろづ代迄もゆるきなき
御代をことふく今日ぞうれしき
竹山むつ子

たかさこの濱のまさこはさもかくも
きみか八千代のかつは知られし
草間きく子

くれ竹のみさりさこもにさかゐませ
うこきなき代をねさしさはして
金田さみ子

たかさこの尾の上の松にひなつるの
千させをよはふ御代そたのしき
宮川よし子

朝日さすたけの御そのにすゑなかく
さかゆる御代のひかりをそ見る
小島しづ子

千代までもかはらぬまつの若みさり
さかゆる御代のいろそ見ゐける
鍋島くま子

日の本のひかりはいよゝかゞやかん
あまつ日嗣きの絶ゐしなければ
桑田はるの子

すく〳〵さ千代の若たけ生ひいてゝ
かはらぬふしをかされつるかな
梅津操子

をい松のこすゑにうたふあしたつは
みこか千させのすかたなるらむ
天野みち子

たくひなき御代そ嬉しき今日よりは
きみかひかりもさしそはりつゝ
村上さもよ子

さゝさはにさかゐいませさ彦御子の
向山まき子

をさまれるこの君か代にひこ御子の
　あれましゝ日をいはふうれしさ　　中村せつ子

やすらけき君のひかりをあふきつゝ
　あれましにきときくそめてたき　　松山あや子

さし〳〵に榮えゆくらむこゝのゑの
　御代のさかえをみるそうれしき　　佐藤わき子

彦御子のあれましにきとたみくさの
　おほうちやまにすめるひなつる　　關きよか子

榮ゆへき御代のねさしさかしこくも
　天もりましけむかみのひこ御子　　森田もと子

さきはなる松にすこもるひなつるは
　千代も八千代もふりせさるらむ　　大田のぶ子

いさともにいはひ歌はむ御ひかりの
　さしてたまひし今日のよき日を　　嘉　子

こゝの重の御花に生ひしふた葉まつ
　くにのはしらのかためなるらむ　　矢島ふみ子

あまてらす神のたまひしすめみまと
　あふきことほく今日のうれしさ　　田中しづ子

こま人もからくにひともいはふらむ
　わか日のもとのさかえゆく世を　　金井ぬき子

さかえゆく竹のそのふにすむたつも
　きみか八千代をねかひてそまふ　　花岡千代子

さく花のゆかりいろこきふちかつら
　きみか千とせのかさしとそみる　　湯本せん子

たみ草のまちにまちてし今日なれは
　千代に八千代のこゑそみちぬる　　坂本さか子

ためしなきこの大御代をしろすへき
　日つきのみやをあほくうれしさ　　岡井香爾子

千代八千代よろつ代かけて若たけの
　さか行く御代そゆたけかりける　　江藤はる子

長閑なるはるのみやゐのはつのほり
　すゑのめくみをわれも受けなん　　加藤つな子

おくふかきたけの御園のわかみとり
　いく千代までもさかえゆくらむ　　濱田あさ子

さかえゆく竹のその生のいく千代を
　くもゐのたつのこゑにしるかな　　中村いそ子

さしのほる朝日とともにおほ御子の
　千代のかけそふくものうへかな　　靑木はる子

みとりなすわか葉の色ははるやまの
　はなにもまさる見はえなりけり　　や　す　子

かきりなき天つ日つきをつたふへき
　御子あれませりたけのその生に　　高地こう子

松の上にたかくかゝやくあさ日かけ
　すめら御くにをてらす今日かな　　懇山みゑ子

もゝ千とりまひて歌ふもことはりよ
　今日のいはひのそらにみつれは　　小玉つる子

あなうれし君か御すゑのかすそふは
　代々のさかえのためしなるらむ　　小野さわ子

君か代の御あとをつかむひこ御子は
　千代よろつ代もさかえますらむ　　一柳ふじの子

御園生にさかえしけれるくれ竹の
　かすさへましてめてたかりけり　　瀬田かれ子

しけりあふ靑葉かなかに生ひ立ちし　　兩角いち子

ひなつるこそは千代に八千代に

常磐なる きみのその生のくれたけは
いく千代かけてさかゑますらむ　渡邉こふ子

千代かけて君か御そののまつか枝に
さかゆく御代をいはふあしたつ　飯泉秀子

めてたさを何にたとへむうれしけに
つるかめとくもいはふきみか代　田中ひさの子

かしこくも御代の榮ゆるしるしとて
いやしけりゆくまつのひともと　松平ゑい子

御園生に生ひそふまつのわかみとり
いく千代までもかはらさらまし　瀬尾すま子

いちしるきすめら御國のみさかゑは
あめかしたにもためしあらしな　坂井てつ子

ためしなきわか大御世の御さかゑは
千代も八千代もつませさらまし　佐治瀧江子

かきりなくさかゆく松のわかみとり
千代もふりせぬきみか御代かな　永井次子

大御代にかゝる目出たきひこ御子を
あふく今日こそうれしかりけれ　今井りう子

つゝしみて祝はさらめやこれそこの
御代のうこかぬしるしなりける　清水千代子

夕日さすかたやまさとのおくまても
あほきいはゝん今日の目出たさ　荻野よし子

千世や千世榮ゑいませとひこ御子を
いやとこしへにいはふ今日かな　木村さめ子

こゝの重のくもゐに遊ふまなつるの
いく千代かけていはふきみかな　堀内ふさ子

常磐なるみとりのいろはとことはに
千代もさかゑむそののわかたけ　森田こう子

常磐なる御代にうまれしひこ御子は
まつのみとりとさかゑますらん　丸貞子

天つちとともにさかゑむふちかつら
咲きそふはるそたのしかりける　柏木はるゑ子

天つちときはみなき世のみさかゑは
きのふのさちにあらはれにけり　林みほの子

四つの海なみしつかなる今日の日は
をさまる御代のしるしなるらむ　石井いし子

朝日さすおほうちやまを見はたせは
千代のはしめのひなつるのこゑ　杉浦いさ子

日のみ子はあれましに[illegible]めてたさも
よろこはしさもこのうへはなし　佐々木まつの子

たかさこの松のめさしのめてたさは
いく千代つきぬくにのいしつゑ　杉村さき子

にきはへる市にゆきかふひとまても
みちゆつりあふ御代のゆたけさ　小川たま子

こゝの重のそらうらゝかに治まりて
御そのはるけきひなつるのこゑ　田口すみ子

こゝの重の雲ゐにすめるひなつるは
たみやすかれとうたふなるらむ　川勝しな子



五月二十日兼題

郭公をまつ

天　香川縣坂出町　鎌田光惠子

雨にまちつきにも待ちてほとゝきす
　なかねうらみに夜をかさねけり

地　東京麹町區富士見町一番地　戸賀崎治子

ともしひもかゝけ盡してほとゝきす
　まつにかひなく夜やあけぬらん

人　東京市本郷區龍岡町日本女學校　川井田草子

ほとゝきす初音まつとてよもすから
　いもねてあかすさみたれのころ

秀逸　伊豫　上原信子

なか爲に卯のはなかきもゆひかへつ
　なにゝおくるゝ山ほとゝきす

○　東京　椎野秀子

ほとゝきす初音やいまとまつかけに
　やかてふけゆくみしかよのつき

○　下野　青木たま子

こそきにし頃とおもへはほとゝきす
　まちかねやまにまちあかしつゝ

○　東京　田中和子

ほとゝきすまつ夜重ねていたつらに
　ふけゆくかねのおとをきくかな

○　甲斐　名取正代子

契り置しものあらなくにほとゝきす
　まつ夜はねこそねられさりけれ

○　三河　永井さい子

わか葉もる月のかけにもさやかなる
　はつ音またるゝほとゝきすかな

○　上野　奥村英子

すきし夜にたゝひと聲をきゝしより
　いとゝまたるゝほとゝきすかな

○　相摸　大谷津峯子

ほとゝきすこと語らはんたちはなの
　にほふ夜ころにやよや來て鳴け

○　三河　服部萬子

われもまた池のふちなみさきしより
　やまほとゝきすまつにかゝれり

（以下原稿到着順）

ほとゝぎす月にあまよにはつこゑを
まつ身はつらきものとしらすや　村上操子

ねもやらて待とも知らぬほとゝぎす
いつこのそらか鳴きわたるらむ　岡山眞子

はつこゑをいかて〳〵とよひ〳〵に
まてともなかぬほとゝぎすかな　田村多豆子

咲き匂ふうのはなかきにほとゝぎす
いつの夜半にかはつねなくらん　松尾せい子

なちかへりさみだれになくひと聲を
まつまにもらせやまほとゝぎす　山田稲子

手まくらの夢もむすはてほとゝぎす
たゝひとこゑとまたぬよもなし　山田米子

ひと聲をなきて聞かせよほとゝぎす
やとの卯のはないまさかりなり　村瀬はな子

人つてにきくもはかなしほとゝぎす
われはいく夜もつきにかこちて　竹村竹里子

夏の夜はみしかきものゝほとゝぎす
はつねまつ身はあかしかねつる　横井幸子

わかやとの卯の花さけりほとゝぎす
まつにかひあるはつねなかなむ　佐々小學子

一こゑをもらしてをゆけほとゝぎす
わかまつの戸をあけかたのそら　佐々有鄰子

ほとゝぎすみ山をいてゝたちはなの
かをれるやとにはつねなかなむ　小杉みや子

さきたわむうの花つきよさやけきを
たのみてもまつほとゝぎすかな　和田さち子

やよやとくひと聲もらせほとゝぎす　田村米子

にはのたちはなさきそめにけり

まちわびて庭のたちはなさきにけり
こゑなをしみそやまほとゝぎす　田村道子

いさやとく初音もらせよほとゝぎす
わか葉のやまにつきはいてけり　柳竹子

待ち侘るこゝろもしらてほとゝぎす
けふもはつねをよそになきけむ　田中たちい子

きのふまちけふも又まつほとゝぎす
いつまでわれにものおもへとか　木村祢子

ほとゝぎすきなけわかやの卯の花も
こそにまさりてさきのさかりに　木村妙子

わか庭にうゑしたちはなさけこなは
いつを待つらむやまほとゝぎす　桂千代子

ほとゝぎす待と來なかす夜もすから
つきのみひとりさはわたるなり　源たけ子

今宵ともちきらぬものをほとゝぎす
はつねまつとてよをふかしけり　椎野淵子

うの花もさかりになりぬしのひ音に
ひとこゑもらせやまほとゝぎす　竹越こう子

咲きにほふうの花かきにまとゐして
けふもあやなく待つほとゝぎす　關勝子

ほとゝぎすきかまほしさに幾よさも
かすわかぬまてまちあかしけり　近藤頼子

さみだれの雲間のつきの小夜ふけて
いとゝ待たるゝほとゝぎすかな　松尾くに子

よもすからまつちの山のほとゝぎす
いかなるさとにはつ音なくらん　松尾やそ子

ほとゝきす今や鳴かむとひとこゑを
　待つ間につきはかたふきにけり　中郷瑞子

ほとゝきすうのはなかなる山さとに
　おほつかなくも待ちわたるかな　長尾小ゑい子

ほとゝきすまちわひにけりうの花の
　つゆにやとかるつきをなかめて　山口すみ子

夏の夜のさやけきつきをなかめつゝ
　またるゝものはやまほとゝきす　小泉光子

山さとにいく夜へぬともほとゝきす
　なかぬかきりはかへらしと思ふ　小野三千代子

ほとゝきすなとか初音をしむらん
　うのはなつき夜いまさかりなり　前田里子

ほとゝきす初音きかんとあしひきの
　やまちたとりて夜をふかしけり　太田みつ子

ほとゝきす待つよふけゆく五月雨に
　いつまてつらきはつれなるらむ　村上友代子

照月のひかりさやけきをりにあひて
　やまほとゝきすはつれなかなむ　當間みすの子

ほとゝきす今かいまかといたつらに
　まつ夜ふかくもなりにけるかな　赤尾つた子

このゆふへかならすとしも思ひしを
　まつにかひなきやまほとゝきす　中村せつ子

ほとゝきす初音きかむといたつらに
　いくよかされてまちあかすらむ　本間ちゑ子

ほとゝきす今かいまかとまつよひの
　ふけてさみしきのきのつきかけ　近藤せつ子

ありあけの月かたふきぬほとゝきす　柴田のぶ子

　こよひもきかてすこすへきかな

いたつらに今夜もあけむほとゝきす
　たゝひとこゑをきゝかてにして　今井りう子

雨はれてくもまにつきもれいてぬ
　こよひこそなけやまほとゝきす　金田さみ子

夏も早きにけるものをまてとまてと
　やまほとゝきすおとつれもせぬ　金井ゐき子

ほとゝきすまつに久しきわかやとの
　つきあかきよをすくさゝらなむ　今井たい子

てる月のかけおもしろしほとゝきす
　こよひはあたにすくさゝらなむ　江面かく子

ほとゝきすきゝつとかたる人もなし
　いつまてしのふはつれなるらむ　阿久津たけ子

ほとゝきすきかまほしさにねもやらて
　やまのはちかきつきをみるかな　田中芳子

ほとゝきす月になくやとたちいてゝ
　おほくもうはのそらたのめなる　穂積稔子

川の邊のなひくやなきにまれかれて
　はや来なかなむやまほとゝきす　有元茂子

ほとゝきすまちはひにける此日ころ
　ひとこゑきかはうれしからまし　野中あさ子

ほとゝきすまつ間はしはしやま里に
　すみかはりてもはつ音きかまし　北島功子

ほとゝきすこの夕くれのむらさめに
　まち得てきかはうれしからまし　北島松子

あやめ艸のきにふくへきときはきぬ
　やまほとゝきすはやも鳴かなむ　北島操子

ほとゝきす一こゑなのれわかやとの
　うのはなつき夜かけしらみゆく　横山芳子

月もよしうのはなにほふわかやとの
　はやもきてなけやまほとゝきす　田中秀子

まち侘るわれをはよそにほとゝきす
　いつこのさとにはつ音なくらん　高名さよ子

あしひきの山ほとゝきすたちはなの
　かをるあたりにひとこゑもかな　伊藤田ふく子

雲間よりこゑやもらすとほとゝきす
　こゝろもそらにまちわたるかな　太田ため子

こゝろあらはひと聲なのれほとゝきす
　ことのこよひはなきつるものを　丸木靜枝子

まち侘るこゝろもしらてほとゝきす
　いつこすくらんひとこひもせぬ　竹村貞子

まち侘るこゝろもしらてほとゝきす
　いつくのくものよそになくらん　中島登美子

ほとゝきすまたしのひねの頃なれは
　ねやの戸あけてまたぬよそなき　服部正子

卯の花のさかてちるまてまちわたる
　こゝろしらすやゝまほとゝきす　河合縫子

たちはなの花さくやとはほとゝきす
　なにゆゑなしむはつれなるらむ　三宅中枝子

ほとゝきすはつねきかむと待ほとに
　こよひもいたくふけにけるかな　鍋田龍子

卯の花のさかりをみれはほとゝきす
　はつこゑをのみまたれぬるかな　徳永萬壽子

まちよわる都のそのらにあしひきの
　やまほとゝきすひとこゑもかな　徳永廣子

いくたびか松のをり戸をおしあくる
　かひなきやとのほとゝきすかな　佐々宮枝子

たちはなの花もにほへりほとゝきす
　みやこもひなもはつねをそまつ　坂本豊子

ほとゝきすなかすは月もいはぬへし
　いつこのやみにはつねなくらん　瀧口貞子

いましはし暫しとまてとほとゝきす
　なかてつきのみかたふきにけり　佐野きやう子

四月二十日兼題

海外なる友に書籍を送る文

地　越後國岩船郡村上町　安藤ひさ子

見るもの聞くものにつけて、よろづ異ならむ外つ國の春の花秋の月は、いかに、いつくしみ深き御兩親の膝に凭れて、ながめたまはむも、なか〳〵故郷の友なつかしうなりぬべきよすがともなりなむかし。あはれ、いかにかおはす。時折々の御文章、くりかへしては巻きをさむべき期もなきまでに、なつかしみ候は、あやしき風俗習慣の物めづらしう覺えられてのみにも候はず。よろづ情ふかき御言葉のうれしきのみにも候はず。いとはしき

御祖父母様なつかしき御友垣をはなれて、遠く御父母に仕へたまふ御心の思ひいだされては、いつも〳〵、かへりごとさへおくれがちに御座候。其の御方にては、故國所々よりの御文を、如何に御覽せさせたまふらむ。もし、たれ彼あつまりて、二日三日も、うち物語らばとおぼすこともなからずや。別封將來の日本婦人一冊は、かつて土曜日ごとに御講義承り候ひし某先生の、其の折の御談話を、こゝかしこ補正あそばされ、御出板なされ候ふものに御座候。しばらくは、先生の御許に集りて御教をうけし折の御心に、たちかへらせたまふらむかしと、とりあへず、御送り申上げ候。この後にも、先生の御著述は勿論、御知人のも御出板相成り候はゞ、早速御送り申すべく候。かしこ。

人

茨城縣新治郡土浦町　山口すみ子

ゆかしき花を後にして、涙のうちに、惜しき袂を別ちまゐらせしは、昨日の樣に思ひ候ひしに、花は、いつしか姿を替へ、山の端も、霞の衣ぬき捨てゝ、青葉涼しき夏と相成り、時鳥の鳴く音も繁き昨日今日、異國の空や如何ならん。いときかまほしうてなん。幸深く、御許樣には御替りもなう過させ給ふよし。濱の眞砂の數限りなう祝申上候。夕べ涼しき若葉の陰に、歌よみ睦し事、はた、數へ草つみし園の樂しかりし日を忍びては、一人淋しく、そゞろに、外國の空のみうらめしくかこたるゝに。まいて、御許樣には、棲みなれし故郷を遠くはなれて、見も知らぬ外人の中に過させ給ふ事の、如何にわびしくおはすらんと遙にすゐし奉り候。せめて、御心なぐさむる事もがなと、さる方より手に入りし、書一冊進じまゐらせ候。此の書は、世の風俗、また文苑なぞの耳あたらしう聞え候へば、つれ〳〵の折には、又なき友とこそ存じて。兎角、氣候になれさせ給はぬ御体の、一しはいたはらせ給ひてよ。やがて、業終へ、錦はえある御身と成りて、御歸國あらせられん日を、今より樂しみに待ち居申候。筆末ながら、皆の君樣へ、宜敷御傳へ下され度候。尚、きこえまほしき事、かず〳〵候へど、拙き筆のかきつくすべうも候はねば、先は、かくのみにて。あなかしく。

（以下原稿到着順）

佐々有隣子

數千里の海路をへだてたまへども、しきしまの日本心は、いよいよ、みがきたまふらん。いさ目出度き御事にぞんじ上候。此のもさ

にても、菊池神社の玉垣の櫻花をながめて、春色にうかれ侍りぬ。何事も手につき不申、御笑ひたまはるべく候。此度、熊本市に開設せられし、九州沖縄八縣聯合敎育品展覽會に陳列せし、作文、圖、書、裁縫などの等級を審判の書册、製本になり候を、某先生の手よりゆづりうけ候を、歸雁の便にはあらで、郵送いたし候。御もとに達しなば御覽の上に、何分の御評をたまはらば、幸甚幸甚。あなかしこ。

高山貞子

はなれがたなき御方に、いと惜しき別れ、し侍りてより、はや、一とせをすぎぬ。さても、其の後如何にすぐさせ給ふらんと、ひたすら、案じまゐらせしに、つゝがなき御玉章を拜し、いとゞうれしうなん。御文によれば、げに、めづらしき事共澤なる由。そを、日々見きゝせらるゝ事の、如何に、うれしくたのしき事ならんと、御うらやましくて。されど、仰の如く、如何なる所におはすとも、故鄕は忘れ難しとやらに候へば、さこそと御察し申上げ、如何にして內地のやう、御知らせまゐらせんやと打案じつるに、ふと思ひあたりしは、此書にて、姿の、みにくき筆よりも、かづ〳〵、たちまされる事なれば、これこそよからめと、かくは御贈りまゐらするにこそ。いまだ、申上たき事かぎりなく候へど、さのみはさて、惜しき筆とめ侍るになん。あなかしこ。

尙、內地とは、餘程季候にも差あるべければ、御身の程をいたはり給ひてよ。これのみ、殊さらにかくなん。

梯竹子

ひまゆく駒の足かき、いとはやく、あかぬ君と袂をわかちしは、げに、昨日の心地のせらるゝに。今は、早、二年あまりの昔とはなり侍りぬ。こゝにあらせ給ひし時は、さも〳〵に、今昔の物をひもときて、いとも、たのしくむづまじうかたらひかはしてありしを。今は、はろ〴〵と海山をへだてし西の國にものしたまひ、いかに過させ給ふにかと、いと〳〵なつかしうなむ。さて、かねて、名たかき某女史の、このたび、ものせられし書出版となり侍りぬ。婦道につきて、いとこま〴〵とかきしるされ、珍らかにおぼえ侍れば、取あへず、一卷小包郵便にて差あげ侍り。なほ、附錄みそなはして、これをとの思召のものもあらせたまはむ、さなん仰せきかされてよ。いつにても、おくりまゐらせ侍らむ。かしこ。

奧谷しん子

一筆啓上仕候。陳ば、貴女樣には、洋行被成候てより五年。今に、一度も、御歸國不被成候へば、古鄕のことを、さぞかし、御心配に御座候ならんと御察し申候。此の頃は、花見遊山に浮れさわぐ春風溫和の節、如何御暮し被遊候哉。御伺申候。降つて、わらはも、何のかはりも無之勉學致居り候間、他事ながら、御安慮被下度候。此書籍は此頃の有樣を書きける物に御座候へば、故里の大略を知るに足りなんと思ひて、御贈り申候間、御一讀被下候はゞ喜悅の至りに御座候。

岡田柳子

花咲きにほふ春山に、袂つられて、遊びたりしこその春ごもしのぶまに、早くも、青葉しげれる頃とはなり候ひぬ。過ぎしむ月、波止場にて御別れ申し候ひしより、君の御俤の忘れがたく候を。御變りはあらせられずや。氣候もいみじう異なり侍りときく。外國に、いかに暮さし玉ふにかと、いと〳〵、御有樣の承りたくてなん。さても、只今、贈りまつるは、某社の發刊になれる書籍にて、よろづの國の氣候風土より、その沿革まで、いたり深き先生の筆とり玉ひて、いと細かにかきしるされたるものにて。御つれ〴〵のみいさまにも見給へかしと、贈りまゐらす。御地の樣知らさむ御助けともなり侍らば、いと嬉しうこそ。かしこ。

小泉光子

去る者は日にうとしとかや。げに、さる者か。君と御別れ申侍りてより、早や、半年の長き月日をすごしぬ。心には、日々暫しの間とて忘るゝひまはなけれ共、筆とる業の心染まぬ故か、将、拙なきよりか、此の二ケ月あまり、たえて御けしきだも伺はず、何と、御わびの致し様もなし。幾重にも御ゆるし給ひてよ。さても、楽しき春の日もやう／＼くれ行きて、土石をも焼くてふ、夏の初とは成り侍りぬ。さるを、いとしたはしの御許様には、御心つよくも、只御一人、なつかしき故郷をあとにして、萬里の波濤をこえさせられ、外つ國遠く物學びにとておもむき給ひぬ。其の御心根の武げく勇ましさよ。實は、妾も、兩親のゆるし給はゞよろこび勇んで御同行願はまほしう思ひ居りしが、何分にも、御ゆるし出ざりしまゝ、心ならずも、志半ばにして止みぬ。其のかはり、君が、幾年月かんなん辛苦をなめ、博學智識の御方となり給ひて故郷へ錦を飾り給ふ時は、妾も、又君の學力の三分の一位を得て、御面會致さんと、家に在りて、一心にはげみ居り侍り候。尚、此品は、我國の婦女として、大に必要なる品と心得、求め來りし品なれば、今日、早速御送り申上侍れば、御笑覽給はり度、習はしたがふ外つ國にて、さぞ／＼御心さびしき御事ならんと存じ、此後は、拙なき筆ながら、時々御機嫌御伺ひ申上べければ、何卒、之までの御無音の段は、平に御ゆるし給はれかし。かしこ。

野中朝子

去年の秋立わかれてよりは、いと遠々しう侍りしが、其の後は、如何渡らせ給ふらん。あはれ、同じ國にだに、とほくへだつるはいとかなしきを、幾千里の海山をへだてたる外國に渡りたまひて學の道のおくを極めんと、御親ばらから。したしき友垣をよそに見らるゝ御心づよさよ。ますらをにもまさり給ひて、雄々しうこそおもひやり侍れ。さて、この新刊のしのぶ草一册は、いふもかなしき事ながら、かたみにをしへをうけし師岡の先師の君の御遺稿にて、こたび、御娘子より、かれてのしたしきかた、其の他のおしへ子なりしものに送り給はりしものなり。其時のうれしさ、實に玉を拾へる心地して、直に拜しつゝ披き見れば、初めには、先師の君の諫志の御歌、次に御寫眞、猶、次には、幽中のすさびと題して、持寺院の事にて信濃の獄屋に下らるゝ時の有様、見るもの、一として涙の種ならぬはなく、過し昔のおもひ出られて、いとかなしくなむ。わらは、かれて此の御遺稿のある事をきゝおよび、後々のかたみにうつしとりおかんとおもひし折柄とて、返す／＼も、いとうれしく、いくたびとなくくりかへされてなむ。されど、わらは一人見るもとおもひ、故師の君の御さくをおもひいづるまゝに、御目にかけ申になむ。猶、御覽しすみなば、御かへしたまはりれかし。いざ共に涙の袖をしぼりつゝありし昔の君をしのばむ。又、ひとつには、打絶ねし日比のおこたりをわび奉らんとて。かしこ。

横山芳子

洋の西と東のけじめこそあれ。時候の推移、暇行く駒の足早きは御同様ならん乎。實に、思ひ返せば、去歳の秋、故山の紅葉の錦を後にして、出で立ち給ひしとき、妾は、海邊に暫したゝづみて船の行くてを打眺め、熱き涙を袖にして、御名殘惜しと思ひしはまだ、昨日けふのやうにのみ打過ぎしに、早くも、百花爛熳の好時節さへ行き越して、翠色濃く綠葉の繁りあふ今日此頃、をりふし、降りすさむ五月雨に、窓うち明けて海面打眺むるにつけては思ひ起され、あはれ、御身には、いま何をかすさびたまふらんと、

御なつかしさも一入にて、同じ學の窓に語らひつゝありし昔のしのばれて、轉た懷舊の念もだし難く、心は、海波萬里の御身の傍に馳せ參じたる折しも、郵便着しさの一聲さ共に、入り來られし母の手に齎らせるは、おん身さ離れし以來、唯一の師友さして、いさも敬愛せる雜誌女鑑到着せしにてありき。茲に、夢覺めたらんが如き心地にて、帶封外すももどかしく、直樣讀下せば、第一曉に映ずるものは米國に於ける女鑑主義の十字の下に沓列られられたる偉文字、再讀、深思、うたゝ感慨の情に堪へず。嗚呼、御身は文物粲然たる米國に螢雪の功を積まるゝ、しかも、又、我女鑑主義さ一般の傾向を顯したるの時に於て、研鑽の實を遂げさせたまへるこそ、羨しさの限りなれ。さりながら、亦、鄕國文壇の一端、特に、女子教育の一般を、拙さ筆の通信に代ふるに、いでや循發讀過し、到着後四時間にして、直に、又、帶封遙に御身の膝下に侍らしめんさの微衷、幸に、御徐然のたりふし御覽はせ賜ひてよ。交る友を見て其の人を知るさの格言、妾はあへて之を呈するもの。亦、御意にも叶ひあそばさば、續々郵呈可致、何卒、御ぎ御便希ふになむ。あなかしこ。

太田ため子

久しく音づれもいたさず候ほごに、はや、衣更の頃に相成り、日中は、寒暖計幾度ばかり昇り申候。御地は、兼れて、氣候もよろしき樣承りおよび候へば、格別の御障りもなく、御機嫌麗しう御滯在遊ばし候哉、御伺ひ申上候。當地の御兩親樣始め、妹子樣ども、よほど、御機嫌宜敷御暮し遊はし候樣、御見受け申候まゝ、御安心遊はさるべく候。次に、妾方、一同無事に相暮し居り候まま、憚樣ながら、御安心被下度候。偖て、さいつ頃、某校にて共に敎をうけし某師の君の、此の頃、某書發刊遊はし候處、誠に、日本婦人の特性をあらはし、終始よくさゝのひ候やう見られ候につき、僅に、片田舍に住める姿らまでも、いさうれしく思ひ候へば、はやく、御もさ樣に見せまゐらせたく存じ、今日、郵便に托し咄き候まゝ、着の上は、御勉學の餘暇に、御一讀被下候はゞ、姿のよろこびこの上なき事に存じ候。當地にて、かはりし事數々侍れご、餘は、後の便りにゆづり申すべく候。あなかしこ。

大谷津峰子

四海波靜に、曇りなき御代の、此の卯月の末つ方、九重の大內山にては、かけまくも綾にかしこきすへらきの日嗣のみこのひこみこ、あれ出まし給ひぬさか。竹の園生の、千い任代に、いや榮ゆに榮ゐますらんさ、民草の喜の聲、八洲にみち侍りぬ。先づ〳〵君にも事なう渡らせられ、御目出度存候。此方、一同、恙なく暮し居り候まゝ、御心安う思召させ給へや。思出せば、去年の春、藤波の花の盛りに咲き匂ふ頃、なつかしき故鄕を後に、はろけくも、八重の汐路を分け行きて、外國へ渡らせられ給ひしより、月面白き秋の夕、花香はしき春の朝、君まさば、共に歌よみかはしかたみに手を携へて、なさなはましものをさ、折にふれ、そゞろに、昔の忍ばれて、袖のぬるゝを。哀、おこなるくり言さな笑給ひそ。さて、大日本女學會發行のたんな、兼て御望の赴、近き頃出版致候へば、進出し候。又、初春よりの日記添へ侍り。御つれづれの折の御慰に、御らんぜさせ給へかし。申上度事さはに侍れご、餘は、後のたよりさ、筆さめ侍りぬ。あなかしこ。

家なくて、かなはざる物の外、無用の物をもさめたくはへざれば、心のわづらひなく、財のつひゐなし。已が身の私慾をすくなくすれば、身をやしなひ、自樂しむに、多くの財をつひやさずして、事たりぬべし。財祿は、かぎりあり。私欲は、かぎりなし。かぎりなき欲にまかせては、必、財つきて困窮す。



芳野記行

下田義天類

ハナチルスグタテとの電報京都より來たり。廿日頃にと思ひをりしを此の知らせに驚かされて十七日に門出すべく思ひ定めたり。山のごとくに積れる用事の内にことに急ぐかぎりをとりいだしてこれはかくせよかれをしかせよなど所理するほどに早くも二日をすごしたり。豫定したる十七日は來りぬ。されど急ぐべき用事ども猶あまた殘れり。ことに人にゆだねがたきは歌文章の直しものなり。いそぐかぎりこのふつ日がほどに夜ひるかけて直したれども殘れるものなほいと多かり。花見にと取りておくひはなかりけり。よしさはれとて強ひてやどりを離れたり。時は明治卅四年四月十七日十時すぐる頃なりけり、春興旅つゝみを荷ひて四ッ谷の停車場までおくりす。ふり續きたる春雨なごりなく晴れわたりてけふしも、空のけはひみはたすかぎりいとのどかになりぬ

　とめてゆく花やちらむと靜なる
　　雨にもよへばねられさりしを

など思ふ思ふ信濃町をすぎて新宿の停車場にいたりつきぬ。汽車窓より見ゆるかぎりの花の梢どもは皆ちりかたなり。

　都路ははやちりにけりさしてゆく
　　よし野の花はいまやいかなる

八重ざくら今見ごろなり。

　八重櫻さくるを見てもいかにかと

ひとへに花の上をしぞおもふ

新宿にて乗替へして品川のかたへむかふ。ふじの山いと清く青雲の上にあふがれたり。

青雲にそびゆるふじはいつみても
かはらぬものゝめづらしきかな

などおもひつゞくるほどに滊車は早や品川につきにけり。海づらのみわたしいと晴やかなれど此のわたりの事は常に見なれたることのみなればことさらびてかきたてむもわざとびたるこゝちすれば皆省きつ。こゝにて京都までの切符をあがなひて東海道に乗り込たり。切符はあかき色のなれば道づれいと多くて室の内賑やかなり。道のほどこそにうかび來しことをもこゝにしるさむ

楢かしは若芽かをりて山かたの
ひかげのどかに春風のふく

見わたせば麥生波よる千町田を
かすみになして春風のふく

濃き淡きしろきくれなゐ春山も
めざしは千々のにしきなりけり

いくさきをいそぐものから小車の
早きをかこつ花の中みち

世はよそになりてこそわたれこゆるぎの
いそもとゆする沖つしら波

咲きはてぬ梢も多き山ざとは
いつをまつたのさくらなるらむ

消え殘る雪と見るまであしがらの
かり畑しろし蕎麥や花さく

あしがらやをやまわたりの山櫻
今さかりなり春たちぬらし

薄雪の積れるごとくくぬきはら
みねにも尾にもこの芽かをれり

なごりなくあふくもあやなふじの山

ふもとにかゝれ天の八重雲
いづこより海のさかひぞ清見がた
松ばらこしに見ゆるつりぶね
西山に夕日は落ちて清見がた
かすみに沈む沖つしら波
ふるさとのそらとおもへば清見がた
かへりみらるゝいつの遠山
えのころの波にふすかとおもふまで
夕かげ清しくら澤のはま

靜岡にいたれる頃はなごりなく暮れはてゝあやめも分かずありにけり。夕げとゝのへて後は瓢やゝ輕きを覺えてその外のことは何ごとをも覺えずごろ〳〵ととゞろき渡る滊車のおとに安倍川をすぎしを知るのみ。

幼き人々のために
（おさなばなし）

香谷女史

若殿樣の旅行（下）

間もなく、三郎樣の船は、また、一つの島を發見いたしました。サア、如何な寶があるだらうと、喜びよろこび、船をつけて見ますと、驚きましたのは、今まで、海岸の立巖などだらうと思ふて居ました、高い大きなものが、生きた人間なので御坐います。何か手に棒を持つて、凝視と船の方を眺めて居ましたのが、今度は、手招を初めました。船中の臆病者は、彼が、人を食ふ鬼といふのだらうなど怖がつて居るのも御坐いますが、三郎樣は、少しも怖れませぬ。直に、岸に上つて、大岩、イヤ其の大男の前にまゐりました。ところが、大男は、身体の不似合な小い聲で、

何をかくさう、私は、この二三ヶ月何にも食ふものがなくつて、何とも斯とも、詮方がない。この棒を上げるから、船にあるものを、何か食はせてくれまへか。

三何ッ。そんな棒が何になる。

といはせも果てず、大男は、

コレ〜。今の若者は、其だから困る。ものといふものは、よく聞きとめて、よく考へてから、爲なければならぬものだ。この棒が何になるッて。まてよ。

と棒を上の方へ振上げて、

百五十の騎兵來れ

といひますと何所から來たともなく百五十の立派な騎兵が、大男の前にあらはれて、其の命令を待つて居ます。

大如何ぢや。この棒をふりあげさへすれば、歩兵でも、砲兵でも、注文通に、百萬でも千萬でも出て來るぞ。それ、この棒を下げると、如何ぢや誰も居まい。何と重寶な棒だらう。

いかにも、珍しい重寶で御座います。三郎様も大に喜ばれまして、

左様いふことゝは知らず。甚、失敬なことを申しました。然らば、早速、御馳走をあげませう。

と、彼のハンケチを擴げまして、百人前の御馳走を命じ、十分、大男に満足させて、其の棒を貰ひまして、この島を出帆しました。

國を出てから、最早四五年になります。御父様は、さぞ、御待兼だらうといふことは、片時でも、三郎様の胸から去らぬが。目的を遂げぬうちは、堅く決心して御出のことで御座いますから、少しも顔色に出すやうなことは、御座いませんでした。

彼のハンケチといひ、この棒といひ、非常な珍し

い寶が手に入りましたから、急いで歸國の途につきましたが、一日のこと、めづらしい小島の側を通りました。

江島の景色も、隨分よろしうございますが、この島の景色の美しいことゝ云ふたら、とても、比類にならぬ。松島は、これも、到底かなはぬ。島は小いが、たとへ様もない景色のよいところで御座いました。いくら至急でも見捨てるわけにはまゐりませぬ。船員一同上陸して、その景色を賞美して居りました。

ところへ、樹かげから出てまゐりましたのが、二十歳ばかりの御姫様で御座います。人なつかしげに、三郎様の前に立ちとまりまして、何か言ひたそうな様子で御座います。船員の一人は、戯談に、

お前さんも、空腹ので御座いませぬか。

と申しますと、御姫様は、耻しさうに、

お天氣都合で、二三日、食物が御座いませぬので

....

三郎様は、氣の毒に思ひまして、ハンケチを擴げて御馳走を出させましたから、お姫様も喜んで食べて居られます。

このお姫様の着て居られた裲襠は、蓮の糸などばかりで、織つたので御座いませうか。鶴の毛の様なもので製作つたのでせうか。その奇麗なことは、大さうなもので御座います。三郎様は、最前から、珍しさうに其の裲襠をながめて居られますので、お姫様は、

貴方には、御馳走して頂いた御恩が御座りますから、御話をいたしませう、この裲襠は、たゞ、美しいばかりでは御座りませぬ。これを擴げて、山なり、河なり、庭なり、湖なり、家など、望のことを言うて頼みますと、直に出てまゐりま

す。こゝの斯様に景色のよいのも、遂この間なくなりました母が、その裲襠にたのむで、斯様にしたので御座います。こんな寶は、母のと私のと、たゞ二つ限で御坐いますが、母のものは、その遺言で、この景色を紀念として、このまゝ永く世にのこしたいと言ふので、擴げたまゝになつて居ります。

三郎様は、この談話を聞いて、この寶も貰いたいと思ひましたが、さすがに、言出しかねて居りました、お姫様も、その様子をさとつたか、更に、言をついで、

私も、一人の母に別れて、たよりない身で御座います。如何か、貴方がたの御國へつれて、往て下さい。左様すれば、この裲襠を上げますから。

三郎様は、大に喜ばれました。實は、寶を探ねに出て來てかへりであるから、今は、若いお姫様や何かを連れて行くわけには往かぬ。歸國した上は、早速に迎を遣すからといふ約束で、この裲襠をも貰ひました。

段々、故國へ近くなつてまゐりましたが、ある日、非常に面白い音樂の音が聞えました。辨才天女や、布袋様たちが集つて爲さる音樂でゞもなければ、斯様な面白い美妙な音色は聞かれまい。とにかく、不思議なものである。ついでに其も詮索して往かうと、其の音の聞える方へ船を進めました。

さがしあてゝ見ると、少年が、巖崖に腰うちかけて一本の線を持つて居て、其を彈奏て居るので御座います。琴でも、胡弓でも、オルガンでも、ピアノでも、何の音でも、思ふまゝに出るといふ寶物で御座います。三郎様は、また、御馳走を與へ

まして、この寶物を貰ひ、いよ〳〵故郷へ歸りました。

故國の御父上は、海の殿様ともいはれて、威勢を振はれた方で御座いましたが、近年しきりに隣國から攻寄せられまして、御家來、御領分の人民は殺される、田畠は荒される、家屋など、燬拂はれる、太郎様次郎様が持つて皈られた金銀も、今は費ひきつて仕舞ひまして、殘念ながら、今は、敵の爲るまゝに委せなければならぬといふ、あはれなことになりました、斯様いふ時にも、御父上の一の希望は、如何か、三郎が、澤山の寶を持つて皈つて來てくれたらといふ果敢ないことで御座います。

左様いふ場合に、三郎様歸國の報知が御座いましたから、父御上は、非常な御喜で、玄關まで出て御覽になりましたが、三郎様は、金も銀も持つては歸りませぬので見れば見そぼらしい風采で御門を入つて來られたから、御父上は、あまりの失望で、遂には、御小言も出ました。

お前は、全体今まで何をして居たのだ、長兄は船一ぱい金を持つて皈つたし、次兄は、銀を持つて皈つた、お前は、さだめし、ダイヤモンドでも澤山持つて皈るだらうと樂しんで居たのに……………。

それはマア如何でも善いが、國では、二三年前から隣國と戰爭が始つて、金銀は費る、土地は荒される、頼にして居た御前が、今の体裁では、と、いろ〳〵御話の最中へ、斥候のものが、飛んでまゐりまして、

申上げます。たゞ今、敵軍が、左右と前面の三方から、雲霞の如き大軍で攻寄せてまゐります。はやく御用意を………

これを聞いた御父上は勿論、御兄様御家來の衆も、最早、この度で、この國も亡ぶことかと、中には涙をおとして殘念がつて居る人も御座います。

三郎樣は、一向、平氣なもので、

御父上、御心配あそばしますな。私が、瞬間に、敵を追斥けますから

と、御父上の御返答もなさらぬ中に、はや、門前に出まして、例の棒をふりわげ、

二十萬の騎兵來れ。つゞいて歩兵十萬。

すると、三十萬の歩騎兵が、たちまちの間に、御門前の廣野にあらはれました。三郎樣は、命令を下しました。

騎兵は、左右の敵兵を擊退けて、正面の敵の背後の出でよ。歩兵は徐々に進軍して、騎兵が、敵の背面に出づるを待ちて挾擊せよ。用意。進め。

三十萬の大軍は、三郎樣の指揮に從つて、各方面に進みましたが、皆よく、其の任務をつくして、またゝく間に、さしもの敵兵を、悉く國外へ追退けまして、前の御門前へ、整々堂々、隊伍を亂さず、もどつてまゐりました。

そこで、三郎樣は、かの裲襠を擴げて、若干の池若干の山、若干の阿屋をつくれと命じますと、その廣野一面、立派な庭園になりました。澤山のテイブルを其地へ据ゑさせ、彼のハンケチを擴げて

三十萬人前の御馳走を出せ。

次に、かの線に、

軍樂を奏せよ。

たちまちにして、戰勝祝賀會の大懽喜、其の會場の立派なこと、その御馳走の山海の珍味を盡したこと、その音樂の面白いこと、實に、前代未聞で御座います。

御父上をはじめ御兄樣など、まるで夢に夢見る心地で御座います。そこで、三郎樣は、皆樣の前へ出まして、自分の持つて歸つた珍寶の次第を逐一に御話になりましたので、一同、驚き喜びまして、御兄樣達は、到底、私どもは、三郎樣に何事でもかなひませぬから、御父上の後繼は三郎樣にと願出る、御父上も、年老つたからといふので、三郎樣をすぐ殿樣になはして、御自分は御隱居をなさいました。

三郎樣は、早速、裲襠に命じて田や畑や池や、庭や神社佛閣などを、國中適當なところ所へチャンと旨く配りあてさせ、棒には、それ〳〵の人間をわりあてさせ、ハンケチには日々の御馳走をつくらせましたから、三日とたゝぬ間に、國内は、もとにもまして繁盛いたしました。

老婆も、大男も、御姫樣も、少年も、間もなく之の國に迎へられて、皆、安樂に世を送られました。

しかし、この時から、裲襠は、擴げたなりでなければ、國中の町や村が無くなりますし、ハンケチも、たゝんで終うては、人民の御馳走が無くなりますし、棒を下げやうものならば、それこそ、國民の大方は居なく成つて終ふのです。また、絲も、張つた限にして置いて、人々に樂を與へなければならぬといふので、皆、そのまゝにして、下げたり、たゝんだりしませぬので、その後は、この御話の樣な、不思議なことは、世の中に、全く無くなつてまゐりましたとさ。めでたし、めでたし。

養生の要は、肉慾をすくなくし。外物をよせず、身を時々勞働し、ねぶりをすくなくす。

食は、身をやしなふものなり。身を養ふものを以つて、かへつて、身をそこなふべからず。



雜報

○歡天喜地

天日嗣は天壤と與に窮みなし。東宮殿下御成婚、妃殿下御懷姙、我等國民は、中心の誠を以て欣抃し居たるに、去にし二十九日午後十時、皇長孫の御降誕あらせられたる、覺えず萬歳の聲を發せり。皇室典範第一條は、祖宗の皇統にして、男系の男子皇位を繼承し玉ふことを定む。されば我等の子孫が仰ぎて仕へ奉るは、此の皇長孫にておはしまさめ、而して我等の子孫も、亦、我等と同じく皇化に浴することを得るは、吾人の期する所なり。謹んで按ずるに、光格天皇は、東山天皇の皇曾孫を以て、後桃園天皇の後を繼ぎ玉ひしが、其後は仁孝天皇、孝明天皇、今上天皇父子相承け玉ひ、今の皇太子殿下は、亦、皇長子を以て東宮に備はり玉ひ、猶今度は、皇長孫の御降誕あり、皇胤の繁榮此くの如くましますは、古來多からざるが如し。寶祚の窮りなき此の大御代こそ樂しけれ。されば、謹みて、今度の御慶事に關するあらましを、記し奉り、聊か、吾人の至情を表しまつるになん。（五月十三日拜記）

●親王御降誕

皇太子妃殿下には、愈々四月廿九日午後十時十分を以て、御慶事御滯りなく、親王御降誕あらせられたり。右に付き、九條公爵家より、即時夫れ夫れへ向け、御通告ありたる由、尙、妃殿下、及び、殿下には、孰れも御肥立宜敷、頗る御健勝に渉らせらるゝ趣は既に拜承する處なり。國家の爲

め、誠に慶賀の至りに堪へず。

●御降誕の御模樣

皇太子妃殿下御安產、親王降誕の御摸樣を承はるに、妃殿下には、廿九日午後七時、御產氣附かせ給ひ、九時に御產氣を催ふされしが、十時十分に、最と御輕く御安產あらせられたり。通常產氣附きてより、分娩迄は、十時間位を要するに、拘らず、僅かに、二三時間にて、御分娩あらせられしは、稀有の御事とや申すべき。而して有栖川宮殿下には、御產氣付かせられたる旨、電話に接せられ、直ちに、東宮御所に參向ありて、御出產まで詰切せられ、翌朝は、早々に參內して、兩陛下に御摸樣を言上遊ばされしが、午後零時廿分に、新橋發の滊車にて、葉山ある　東宮殿下の御許に赴かせられたり。

●葉山御用邸の御祝賀

皇太子妃殿下御分娩の御慶電、葉山御用邸に達するや、高辻侍從長は、直に皇太子殿下に、御披露申上げたるに、殿下には一方ならず御滿足の御樣子ありしが、三十日午後、有栖川宮威仁親王殿下、態々御報告の爲め、同御用邸に成らせられ、親しく詳細の御摸樣御談話ありたるより、御滿悅斜ならず、右に付、同夜は、御內宴を開かせられ、一同に御陪食仰付られたりと。尙、周布神奈川縣知事外、官民數百名は、三十日より一日に掛け、同御用邸に參賀し、賀表を捧呈する者陸續踵を接したりと。

●親王殿下の御體量

親王殿下御降誕の御摸樣はこゝに、記し奉りし如く、至極御丈夫に涉らせられ、御體量は、八百目にまし〱て、普通の嬰兒よりは、五十目程重

やかに、御身長は、五十一册知米突即ち一尺六寸八分五厘程におはします由、漏れ承はるも愛度き極みにこそ。

●御命名式

●・・・東宮還啓　皇太子殿下には、親王御命名式に付、五日午前八時新橋着列車にて、還啓直ちに、東宮御所に入らせられたり。

●・・・勅使參向　德大寺侍從長は、皇孫御命名式勅使として、御命名書、及御劍一口を奉じ、五日午前十時、警視警部等に前後を警衞されて、東宮御所に向て、表御門より參入、中山大夫御玄關に出迎へ、直ちに、表御殿に誘引すれば、皇太子殿下には、陸軍少佐の御正裝にて、御對面の上、勅使より御名命書、幷に、御劍を拜受し、之を中山大夫に授け、直ちに、親王の御前に於て、御披露あり畢つて、之を上段に奉じ、殿下の御挨拶あり、勅使は、別殿に於て、茶菓の饗應を受け、同五十分退出せられたり。

●・・・宮中御祭典　親王御命名式御當日は、午前九時より賢所、皇靈殿、神殿に於て嚴かなる御祭典を行はせられたり。御儀式次第は、至極御略式にて、御定刻より御殿の御裝飾を奉仕し、同十時伊藤、松平、松井、西鄉各式部官、岩倉掌典長、藏田、宮地、園池各掌典及宮內省勅任官總代岩佐純、同奏任官總代織田一等順次着席、奏樂の間に、各殿御開扉、藏田、宮地兩掌典神饌を供し、岩倉掌典長祝詞を奏す。次に　天皇陛下御代拜日根野侍從、皇后陛下御代拜小池權掌侍、皇太子殿下御代拜、大迫侍從、皇太子妃殿下御代拜中田東宮主事、順次御代拜を奉仕して、何れも御玉串を奉り、畢つて、着床の諸員幷に掛、判任官等の拜禮あり。

再び、奏樂の間に撤饌閉扉、十時三十分を以て全く御式を終はらせられたりとうけ玉はりぬ。

●豐明殿の御祝酒　御命名式の御祝酒は、東宮御所に於て賜はる筈ありしも、同御所御手狹の故を以て、宮城豐明殿に於て、御賜宴相成りたり。當日の御模樣を伺ひ奉るに、南溜、西溜等を以て、休憩所に充て、茶菓煙草等何呉れとなく、御備わりて、式部職員、其他宮内官、來會者に應接し、正午とあるや、宮内官は一同を豐明殿に誘引し、席定るや、瀏喨たる奏樂の間に、御開宴、田中宮相は多くの宮内官を率ゐて、熱心に斡旋し、午後一時過ぎ御散會相成りたる由、參列の方々は、久邇宮邦彦王、同妃兩殿下を始め奉り、總て、三百餘名、其の重なる人左の如し。

西園寺首相代理、山縣、大山、西郷各元帥、山本海軍、兒玉陸軍、加藤外務、金子司法、末松内務、松田文相、林農商務、原遞信各大臣、松方、大隈、井上、板垣各伯爵、榎本子、佐久間、桂兩陸軍大將、伊東海軍大將、南部大審院長、奥東部都督、内海會計檢査院長、西全權公使、井上横須賀鎭守府司令長官、鷹司、二條、一條、三條、徳川、島津、各公爵、徳川、淺野、長谷從一位、曾我、三浦、芳川、野村、安保、鍋島、田尻各勳一等、池田、津輕、徳川麝香間祗候、東久世副議長、川村、佐野、福岡、佐々木、尾崎、田中、海江田、細川、河瀬、中牟田、大鳥、鳥尾、九鬼、高崎、杉、高島、蜂須賀、伊東、黒田、岩倉、野村各樞密院顧問官、眞木、稅所、林、尾崎、鍋島、加藤、船越、三浦、橋本、長與、堤、楫取、佐藤各宮中顧問官、侯、伯、子、男總代として久我侯爵、柳澤伯爵、松平(直徳)子爵、中川男爵、京都華族總代西五辻男爵、宮内省勅任官總代岩佐宮中顧問官、奏任總代織田學習院教授、川口宮内次官、三宮式部長、戸田式部次長、渡邊内藏頭、岩村御料局長、岡侍醫局長、長崎調度局長、齋藤内事課長、廣橋調査課長、山口主殿頭、岩倉爵位局長、桂爵位局主事、伊藤式部職主事其他宮内奏任官一同。

因に、此の人々は、六日午前八時三十分より、何れも、宮城及び東宮御所に出頭し、御禮申し上たりとぞ。

●御祝品　廸宮裕仁親王殿下、御命名式御祝ひとして、天皇皇后兩陛下を始め奉り、各皇族殿下、御近親の方々より、東宮御所へ御增進の御品、及

東宮、妃、並に迪宮三殿下より、御增進の御品々は、實に山なす許りにて、其主なるを伺ひまつるに、左の如し。

兩陛下より
　東宮へ　清酒一樽
　　　　　生陸一荷
東宮殿下より
　東宮妃殿下へ　五種交魚一折
東宮妃殿下より
　東宮殿下へ　五種交魚一折
迪宮殿下より
　東宮殿下へ　生鯛一折
迪宮殿下より
　東宮妃殿下へ　生鯛一折
東宮殿下より
聖上陛下へ　生鯛一折
東宮殿下より
皇后陛下へ　生鯛一折
東宮妃殿下より
聖上陛下へ　生鯛一折
東宮妃殿下より
皇后陛下へ　生鯛一折
迪宮殿下より
賢所へ　生鯛一折
　　　　御鈴料添
東宮、妃兩殿下より
有栖川宮へ　五種交魚一折
兩殿下より
　中山一位局へ　三種交魚一折
兩殿下より
　九條公へ　五種交魚一折
兩殿下より
　一條公へ　三種交魚一折
兩殿下より
　二條公へ　三種交魚一折
兩殿下より
　鷹司公へ　三種交魚一折

●●●●●●

●御學問所拜謁　御命名式御祝ひの爲め、午前十時三十分より宮中に參賀したる、各皇族殿下を始め奉り、九條大勳位、各大臣、親任官、公爵、從一位、勳一等、麝香間祇候、錦鷄間祇候、宮內省勅奏任官、侯、伯、子、男爵總代、京都華族總代等には、御祝酒を賜はる前、御學問所に於て拜謁仰付られたりと。

●●●●●●

●東宮御所參賀　御命名式參賀の爲め、青山なる東宮御所へ伺候したるは、伏見宮、同妃、閑院宮、同妃、山階宮、同妃、華頂宮、同妃、久邇宮、

同妃、梨本宮、同妃、北白川宮、同御母各殿下を始め奉り、無慮數百名、其の重なるは。

西園寺首相臨時代理、田中、渡邊、兒玉、山本、末松、金子、加藤、原松田、林の各大臣、東久世樞密院副議長、河村、濱江田、尾崎、蜂須賀、佐々木、九鬼、大島等各樞密顧問官、土方、榎本、井上各大臣待遇、山縣、大山、西鄉三元帥、野津、伊東兩大將、九條、近衛、二條、德川、島津、毛利、岩倉、三條諸公、鍋島、淺野等諸侯、從一位、麝香間祗候、錦鷄間祗候、宮內高等官侯、伯、子、男等總代、京都華族總代等

にて、一時は非常の混雜ありし由あるが、右の人々に對しては、別殿に於て、御祝酒を賜はりたりと承はる。

●中山大夫の御禮參內　中山東宮大夫は、五日午前十時三十分御命名式を終りて、直ちに、青山御所より參內し、御命名の御禮を奏上したりと。

●宮內省に酒饌下賜　御命名式當日には、宮內官一同に酒饌を賜はりたり。

●東宮御所御祝宴　皇太子殿下には、五日午後五時より、青山御所に於て、御祝宴を催させられたり。同夕の參列者は、有栖川宮同妃兩殿下、德大寺內大臣、田中宮內大臣、同夫人、香川皇后宮大夫、同夫人、九條公爵、一條公爵、二條公爵、鷹司公爵、中山東宮大夫高辻侍從長其他、東宮御附文武官等、數十名の諸氏なりと云ふ。

●一位局の御參賀　中山從一位局には、五日午前十時二十五分東宮御所に伺候、親しく東宮、同妃兩殿下へ拜謁、御祝詞を申上げられたり。

●外國帝室の御祝電　獨逸、白耳義、澳太利、韓、諸國帝室より、親王御降誕の御祝電到着し、五日夫々執奏に及びたりと、又、御命名式當日には、外臣の宮城、及青山御所に參賀したる者も、數十名ありたる由。

●詞祝　伊藤侯を始め、諸官人より祝詞祝電を奉りたること、夥たゞしと。

●御健勝

●迪宮殿下　五日をもて、御命名式を行はせられたる、迪宮裕仁親王殿下には、日夜御健勝に渡らせられ、御体量の如き、御降誕の時に比し、幾んど二百目近くを增させられたる、御模樣ありと、又、御乳は、目下御母殿下の御乳を召させらるゝ由、漏れ承はる。

●東宮妃殿下　皇太子妃殿下にも、御分娩後何等の御障もなく、日夜御健勝に在しまし、迪宮殿下の日增しに、御生育あらせらるゝをみそなはして、此上なく、御滿悅に渡らせらるゝ由にて、世俗に言ふ、御枕直しの如きも、侍醫の言上次第、餘程速かに行はせらるゝやにて拜聞せる處に依れば、十九日ごろには、多分御沐浴の御事もあるなるべしとぞ。

●東宮御參內　皇太子殿下には六日午前十時三十分參內、兩陛下に御對面、種々御物語りあらせられたりと、承はる。

●奉祝賀表

●東京府會の奉祝　東京府會は、先日臨時開會し、皇孫御降誕に付。左の奉祝文を奉つることを議決し五日芳野議長出頭。奉呈つかまつりたり。

謹奉賀皇孫御降誕

謹みて按ふに去年の此月の十日
皇太子の妃定りて大禮を行はせたまひしを賀き奉ると都鄙の差無く上下の別なく或は松竹をひきて千世と歌ひ或は鶴龜にかけて萬代と唱へ天下に滿ち轟きし歡の聲は今なほ耳にのこり心に忘れず在るを一ト年の月日もいまだ滿ち竟へさるに既に親王は生れませりそも久堅の天の河水たゝ一すぢに流れて濁らず九重の大內山の嶺の岩が根高く動かず天壤と與に窮無き皇統の繼承は今更に申すも畏き御事ながら皇孫親王の生れませるを以ていよ〳〵其御隆のいちじるきを仰ぎます〳〵皇統の常久なるべきを思ふ吾國千萬の臣民等の喜悅は去年の歡にまた一しほの深さをそへたりさや申さむ況て大宮の下近く御光を仰ぎ此東京府の人民等このうれしさに得たへず諸聲に

萬歳を唱へて恐み賀き奉る意を代り表し謹み敬ひて壽詞を捧げ奉る

明治三十四年五月五日

東京府會議長芳野世經

誠恐誠惶頓首拜上

●東京市會●●●● にては、臨時開會して、皇孫御降誕に付き、協議の上、起草委員を舉げず、議長の手許に於て、起草し、以て、奉呈つかまつりたり。即ち、

奉賀

皇孫降誕表

天降眞瑞、神表靈貺、龍準日角、出震承乾、景命滋至、嘉祥無疆、古人祝聖、斯願多男、伏惟螽斯詵々、麟趾振振、皇室之隆、邦家之祚、遠徵前古、多所未聞、臣 秀雄等誠歡誠喜、稽首百拜、恭上此表、

明治卅四年五月五日

東京市參事會

東京市長 松田秀雄

奉賀

親王降誕牋

五雲發彩、列宿揚輝、時是清和、方値良辰、伏惟維嶽降神、祥光充庭、天日之輝、龍鳳之姿、胥胥連綿、竝繩祖武、三辰合慶、萬姓抃舞、臣 秀雄等誠歡誠喜頓首頓首謹上此牋

明治三十四年五月五日 東京市參事會

東京市長 松田秀雄

●帝國教育會の賀表●●●●●●● 去にし土曜日の臨時評議員會に於て決定し、五日會長辻新次氏、宮内省、及東宮御所に出頭して、捧呈したり。

賀表（宮内省へ捧呈の分）

天祖天に在して 瓊々杵尊三器を拜受し、豐葦原の主と爲り給ひ、 仁和の御宇に 延喜の帝旣に 維城の御名を以て宗子たるべき瑞兆を示し給へり。皇統の繼承は、瓜瓞の綿々たるが如く、宗室の繁盛は、螽斯の振々たるに似たり、恭しく惟るに、 天皇 皇后兩陛下 皇天の祐を保ち給ひて、萬壽疆り無く、 皇太子 皇太子妃兩殿下、慶を襲ね輝を重ね熊羆夢に入り給ひ休兆仰ぎて世嫡皇孫の降誕を祝し奉るの榮に遇へり。人天歡を共にし、日月輝を增し、實に九重の至慶四海の大幸なり。是皆 皇天の擁護に成り、臣民の懇祈に應じたる者にして、爾後かゝる幸慶の繼續せんこと豈際限あらんや。國本是に由りて益々堅く、寶祚是に由りて愈々隆ならん。臣新次帝國教育會を代表して、謹みて賀表を獻じ奉る。

明治三十四年五月五日

帝國教育會長正三位勳二等臣辻新次謹撰

賀辭（東宮御所に捧呈したる分）

天忍穗耳尊は　天祖の命を奉じて　瓊々杵尊を豐葦原に降し給ひ、宇多天皇は、仁和の御宇に當りて、既に　延喜の帝の御父と爲り給へり。皇統の繼承は、瓜瓞の綿々たるが如く、宗室の繁盛は、螽斯の振々たるに似たり。恭しく惟るに　皇太子皇太子妃兩殿下、天資孝敬にして　二聖の歡を承け給ひ、慶を襲れ輝を重れ、熊羆夢に入り給ひ、億兆仰ぎて　世嫡皇孫の降誕を祝し奉るの榮に遇へり。人天歡を共にし、日月耀を增し、寶に九重の至慶、四海の大幸なり。是皆　皇天の擁護に成り、臣民の懇祈に應じたる者にして、爾後かゝる幸慶の繼續せんこと豈際限あらんや。國本是に由りて益々堅く、寶祚是に由りて愈々隆ならん。臣新次　帝國教育會を代表して、謹みて賀辭を獻し奉る。

明治三十四年五月五日

帝國教育會長正三位勳二等臣辻新次謹撰

●●●●●●●●各女學校の祝賀　御降誕の祝意を表せんため、各官公立女學校は、何れも休校し、中には、總代を擇びて、賀表を捧呈せしめたるものありしが、華族女學校に於ては、午前八時職員生徒一同講堂に參集し、君が代の唱歌を奏し、細川校長病氣引籠中故、其代理として、下田學監祝詞を演べ、生徒總代として、徳川公爵令孃いと子祝詞を朗讀し、八時四十分式を終り、大隈伯爵令孃、こう子、南部男爵令孃とし子に、下田學監、淺岡幹事附添ひ、東宮御所へ伺候して、左の賀表を奉呈したり。

日嗣のみこの御妃のきみ御產の事いと安らかにてひこみこさへあれいでませしとうけたまはりかしこかれともうれしさもよろこばしくちあきいほ秋の長き代までにいやさかはに榮はさせたまへとあふぎのぞみまつる眞心もたしかたくて祝の言葉をきこゑたてまつるあなかしこ

尙は、學習院に於ても、休校し生徒二名に、工藤幹事附添ひ、東宮御所に伺候して、賀表を奉りたるが、同院にては、又五日の御命名當日祝賀式を擧行したり。

●京都市の賀表●●●●●　一日午前十時臨時市會を開

き、皇孫御降誕に付、市民を代表して、市長市會議長より、賀表を奉呈する事、右賀表は、市長若しくは、市會議長之を携帯東上する事等を議決したり。而して、田中宮相に提出し、執奏を乞ひたる文は、左の如し。

臣等

皇孫御降誕あらせ給ひ熊羆の夢祥を兆し天日の表維れ新たなることを恭しく惟ふ　天皇陛下天顔喜有り　皇后陛下懿徽窮無く日月輝を増し萬物皆春　天胤是れより倍々榮ゆ邦運此れより愈隆ならん洵に是れ　朝家隆昌の吉祥にして億兆黎元の同しく慶祝する所なり爰に市會の決議を以て京都市民を代表し表を上り謹て慶賀し奉る臣等誠惶誠恐頓首頓首

明治三十四年五月一日

京都市長　内貴甚三郎

京都市會議長　雨森菊太郎

又、中山東宮大夫に左の賀表を提出し、執奏を乞ひたるは、即ち、

謹て承はる天地祥を呈し熊羆の兆夢に入り山岳靈を鍾めて龍鳳の瑞慶を啓く洵に是れ天潢悠久の吉兆にして邦家昌隆の休徵也億兆臣民誰か抃蹈歡祝せさらんや爰に市會の決議を以て京都市民を代表し謹て慶賀の誠を上る臣等誠惶誠恐頓首頓首

明治三十四年五月一日

京都市長　内貴甚三郎

京都市會議長　雨森菊太郎

右に付き、雨森市會議長は、賀表を携へ一日午後八時七分發の列車にて、東上し、夫々捧げ奉れり。又、高崎知事以下、府廳各高等官より、式部職に差出したる賀表は。

皇孫御降誕を恐賀す

東宮大夫に差出す賀表は。

謹而親王の御降誕を祝す

●御命名式當日

嘗て銀婚の御式行ばせられたる時、春雨しめやかに降りて、大内山の緑深く、萬世の御契濃やかに拜し奉り、此度皇孫の御命名の日、又た雨降りて、青山の緑麗はしく、桐の二葉に露そふも、共に目出度き例になん覺ゆる。

九重の邊には、朝の程より、御儀式を行はせられ午前十時と申すに、徳大寺侍從長、御命名の勅使として、青山御所に參向せられ、車の音しづかに、駟馬塵を擧げず、軈て御所に着しぬれば、奉仕の官人勅使を迎へられ、勅使は、陛下の御命名書を東宮殿下に授けられ、殿下御開披ありて、親王に御命名あらせ給ふ。

此時陸軍の砲禮は、雨雲に響きて勇ましく、奉祝の烟花中空に轟きて、壯快を極め、雨さへ少しく晴れて日の光りをもらしつゝ、誠に天長く、地久しく、盡せぬ御代のしるし見えて、目出度くぞ覺えける。

親勅任の文武百官、並に奏任の輩は、朝のほどより宮城に參り、又た東宮御所に參りて、祝賀を申上げしかば、其道筋には、馬車、人力車絡繹として織るが如くなりき。午後よりは、宮中にて午餐會を催され、參列の文武官は、夫々大禮服をつけて、春の花より美しく、胸間の勳章は、秋の夜の星の如くに輝く、音樂は洋々として雲井に響き渡り、御園生の若葉は、一入其色を加へぬ。

陛下出御ありて、龍顔美しく御杯を賜ひければ、參列の官人等感極りて、盛世に生れかゝる目出度き、御宴に列なる有難さと、涙を催はすの老臣もありたりとぞ。御宴終りて、何れも退出しぬ。

此日市中は、國旗軒燈を揚げたるが、雨にうるほひてしめやかに見え渡り、中には、金屛風等引廻して、業を休み、謹んで奉祝の意を表せし家もあり、又た男子を設けたる家々には、今日の御命名式を祝ひ奉るかたはら、我子の爲めにも、祝宴を催はすものあり。歡天喜地の情到る處にあふれて、降る雨の物靜かなる内にも賑やかなる氣色のほの見えけるも嬉けれ。

此夜、二重橋の電燈は、悉く點ぜられ、滴る如き新緑に映じて美しく、又た八重洲町の郵船會社三菱銀行、商業會議所、明治生命保險會社等は各入口に花瓦斯にて「奉祝」の二字を映出せしめ、又た高等學校の炬火運動等ありて、一段の盛況を添へ、家々には祝宴を張り、笑ひさゞめく聲は、門口にあふれて盡せぬ喜びを現はしけり。

●東宮御所前の光景●●●●● 新宮殿下御命名式當日には、青山南北六ヶ町の人民は、奉祝の爲め、特に紅白二流の大旗を東宮御所御門外に飜へし、西御通用門外には、大國旗を交叉し、各戸は何れも奉祝と記したる提灯、及國旗を掲げたり。

●神宮奉齋會の奉拜式●●●●● 神宮奉齋會本院にては、五日午前九時より會長理事を始め、職員、其他會員等、參集し、神饌を供へ、嚴肅に祝賀奉拜式を執行し、尚各地支部にても、同樣に奉拜式を執行せし由。

●囚徒休役●●●● 府下の各監獄在囚は、一日休役せしめ、特別の食事を與へたるに、彼等は、皇德の無量なるに感泣して、新宮御命名式を奉祝したりと。

●九條家へ祝賀●●●●● 御命名式御祝ひの爲め、宮中及東宮御所へ參賀したる各皇族殿下、幷に文武百官は、其の前後に赤坂福吉町なる、九條公爵邸に赴き、當日の祝詞を述べたり。尚各地より、電報を以て、祝詞を送る者多かりしとぞ。

●妃殿下御血族●●●●● 皇太子妃殿下の姉君に當る、本願寺新門主裏方籌子、妹君に當る、佛光寺裏方範子の二方は、直筆の文を奉りて、御慶を、ことほぎまつりたりと。

●華族會館●●●● にては六日奉賀會を開き、各爵三百廿一名出席、德川公爵の發聲にて萬歲を三唱し、

立食の後散會したりといふ。

●東宮行啓

殿下には、去にし六日御參内御歸殿の後、英國公使マクドナルド氏、及、佛國公使チユバユ氏を御引見あらせられ、而して、午后一時四十分の汽車にて、有栖川宮御同乘、小田原御用邸に行啓あらせられたるが、目下は、葉山御用邸に、移らせ給ひたるやに、拜承せり。

●新宮御移轉期

迪宮裕仁親王殿下には、侍醫の言上に依り、御養育主任川村伯邸に、御移轉の御日取りを定めさせらるゝ由、右に付、川村伯は、空氣流通よき樓上の廣間、外三間を、迪宮御下の御座所に充て、目下頻りに消毒掃除等の最中にて、爲めに家族は、他に移轉したりと云ふ。侍醫の直話に依れば、多分初殿參内後、若しくは、六十日位御經過の上、御移轉相成る事と爲るべしと。

●御養育主任　樞密顧問官川村純義伯は、舊鹿兒島藩の士、天保七年の生なり。嘗、勤王の大義を唱へ、大に力を國事に盡し、維新後諸官を歷仕して、海軍中將に昇る、西南の役、同藩の情誼を以て、書を南州に贈歸順を勸む、肯せず。十八年樞府に入り今日に至る、今度更に、御養育主任の命下る、こよなき、名譽と云ふべし

●萬歲のひゞき

去にし、宮中にて、御命名式を擧げ行はせられし際、いとも奇しきある靈鳩の、瑞祥ありしと承はるが、當日御饗宴の席上にても、亦目出たき事こそありたれ。此度の御慶事については、親王に坐すや、はた內親王に坐すやなど、東宮御所にて夙くより種々の御取沙汰あり、そが中に、今年一月の元旦、東宮御所へ第一着に參賀したるもの、

男子ならば、親王、女子ならば、内親王御降誕あるべしと噂せられしが、軈て元旦となり、第一着に參賀したるは、今年八十八歳なる、富美宮、泰宮御養育主任林友幸子なりしかば、さては、親王こそ御降誕あるなれと、上下喜びあへりしに、御降誕ありしは、果して、裕仁親王殿下なりしぞ、不思議なる。扨、豐明殿にて、御祝宴を御催しありし砌、林子も參列の榮を得て、其席へ侍り人々に向ひて、元旦のことなど語らひ居られしが、餘りの恐悦に堪えざりけん、宮中にては、昔しより嚴粛を保つために、萬歳を唱ふる事を禁じあるを忘れ、八十八歳の老軀をもて、覺えず萬歳と一聲叫びしより、參列せし人々も、識らず〳〵是を音頭として、和唱したりとなむ。實に、目出度とと云べし。

○奉祝の歌

奉祝皇孫御降誕　　東久世通禧

もゝしきの大内山の松風も
空に千年の聲たてるなり

○　　久我建通

昔よりためしまれなるをとこやま
松ふくかぜをうぶこゑにして

はるの宮のわかたけの子のおひそめて
千代のさかえとなりにけるかな

奉賀御命名　　久我建通

あまつかせ雲井にたかきこひのぼり
けふをことぶくしるしなりけり

參賀のみちにて　　高崎正風

こゝろなき木さへ草さへ何となく
うれしき色の見ゆるけさかな

皇孫御降誕あらせたまひけるまたのあさ世に日本晴ととなふるいとよきそらなりけれはよめる　阪正臣

はれ渡るあさげの空に知られけり
　榮えん千代のあまつひつぎは

皇孫御降誕を承りて　宮地厳夫

あれませる御子彦みことと聞まゝに
　こをどりせざる者なかりけり

○　荻原厳雄

よろづ世の緣も添ひていはがねに
　今日こそ松は生ひそめにけれ

○　千葉胤明

彦皇子のよろづ世うたふもろ聲に
　やまと島根もゆるぐべきかな

思はずも嬉しなみだをこぼしけり
　大御こゝろのおもひやられて

○　鎌田正夫

かぎりなき大みちそえのみゆる哉
　はるのみやまのまつの二葉に

○　長谷場純孝

数ならぬみもよろこびにたへぬ哉
　このみちそえに逢りと思へば

鶴の年亀の齢ひのかずよりも
　なが〻れかしとほぎまつりける

寄泉奉祝

さゞれ石の苔むすまでも君が代の
　つきせぬ泉わきいでにけり

○　佐々豊水

大宮に生れ出まして皇孫の
　松の八千とせ竹のよろづよ

鶴はまひ亀は踊りてすめみまの
　八千代の榮えいはひかなづる

○　　　　　　　　鈴木榮

親竹のまだらわかきふしに似て
いく代さかえむ園の竹の子

○　　　　　　　　山岡良旗

窮みなく榮えますらん八百萬
天つ日嗣のいやつぎ〲に

○　　　　　　　　鈴木玉子

しのたてる大内山の松が枝に
たかくきこゆるひなづるの聲

○　　　　　　　　横井勝子

たぐひなき皇御國のつぎ〲に
皇子あれまし丶今日ぞめでたき

○　　　　　　　　鈴木廣子

内外の國のはてまで皇孫の
あれまし丶日はいはひとよもす

○表彰録

●無上の光榮●　此度、東宮御所の御慶事につき妃殿下御産の御介抱申上げ奉りしは、我日本赤十字社の看護婦にて、其人は田中のぶ子、加藤まさ子、高田やを子の三女なりしとぞ漏れ承る、庶人の身を以て高貴の御方に近づき奉りし三女の光榮は、固より赤十字社にとりて、亦洵に無上の譽れなりといふべし。こ丶に三女の身上を記すに、方りて今回は先づ田中のぶ子の事より陳べ初めん。

のぶ子は、芝區田村町二十二番地田中直次郎の次女にて、明治二年十二月の生なり。父と母との外に、姉一人、弟一人あり。父は、今年六十五、母は同六十二にて現に矍鑠として存へ、姉は未だ夫を迎へず、父母に仕へて家事を整へ、弟は幼少の時より他家へ養子に遣はされしが、のぶ子は早

くより同所南櫻小學校へ入りて、十八の時、同校を卒業し、其翌年、親戚なる、銀座二丁目の岸田吟香氏の許へ至りて、同家へ居住し、女教師とならん目的にて、女子師範學校へ入學したるが、二十四才の春、同校豫備科を卒業し、尚も進んで本科へ入らんため、其準備として吟香氏に就き漢籍を學びぬ。然るに、之を修むるにつけて、次第に人の盡すべき道をさとり、婦人ながらも、國家に盡さんと思ひ居たる折柄、二十七年に至り、清國との戰起りたれば、のぶ子も此時をこそと、窃に機會を窺ひ居りしに、二十八年の四月に至り我赤十字社にて、定期の如く、第十四の看護婦志願者を募集したりしかば、のぶ子は進で之に應じ、同年四月十六日入學試驗に合格したれば、吟香氏の許を去りて、同社病院に入り、精を竭して研究したる末、三十一年四月に至りて、首尾よく卒業したれば、同社の外勤部勤務となりて、一級乙俸にまで昇進したり。斯くて三十一年十一月に至り、小松若宮妃殿下御不例あらせられしに、のぶ子は召されて、御看護を申上ること丶なりたれば。直ちに同邸へ至りて、御介抱申上げたる甲斐ありて殿下には御本復遊ばされたり。其後昨年の春に至りて、北清事件の起るや、のぶ子は、亦戰地派遣を命ぜられ、博愛丸に乘りて、太沽へ赴き、同地にて負傷軍人の看護に力め、やがて歸朝して後、毎日同社病院へ出勤して、患者を取扱ひ居りたり。然るに先月二十日に至り、東宮妃殿下には、御分娩の期近づかせられしより、のぶ子は拔擢せられて、其御抱介を申上げ奉ること丶なりしより、いと忝けなきこと丶思ひて、東宮御所へ參り、前記まご子、やを子と共に妃殿下に侍き奉りて、遂に恙なく、親王御降誕あらせらる丶に至れり。尚

聞く所によれば、のぶ子等は、親王殿下へ附添ひ奉りて、河村伯邸へ赴くべき筈なりといふ。のぶ子は、性質怜悧にして、淑徳人に勝れ、技術も亦頗る巧なれば、今回の光榮を蒙るに至りしものなりとぞ。（富士子）

●●●●學事熱心家　府下西多摩郡氷川村、高等小學校にては、本年校舍を改築せんとせしに、同村の豪商木村源兵衛は、一人にて數千圓の金額を寄附するに決し、是がために同校は改築することを得て、目下工事中なりといふ。氏の如きは、眞に敎育に熱心なるものといふべし。

●●●●解近美談　今は昔、大和國宇智郡、北宇智村に内原庄八郎といふ者ありけり、維新の初つ方、天誅組の騷ありし頃、同家は其襲撃を蒙りて、夫婦の生命いと危くありしかば、夫婦は其頃漸く三歳にありし二男の十郎といふを心ならずも打ち棄て、他の二子とともに、何方へか遁れにけり。然るに十郎は、程經て姉のたまゑといふに助けられ、たまゑの夫なる山邊郡二階堂村大字柴崎の、柴崎清孝といふに養はれて、人となりぬ。去程に十郎は、姉より兩親の事を聞て、一度廻り合はんものと、樣々に手を盡して探したるも、其の所在知れざるより、其の後志を立て、東京に上り芝區七軒町一番地、製藥業者濱名某へ養子となり、名を常光と改め、家業を勵み、又、故鄕の人々を賴み、兩親の行方を探らしめ居たりしが、去十四年の十月頃に至り、父は南葛城郡葛村大字井戸の正願寺といふに居れる由、故鄕の人より知らせありたれば、大に喜びて取るものも取敢ず、同地へ赴き、直に父母を尋ねたるに　母は往年此世を去て、父のみ未だ殘り、後妻の某といふを迎へて、同寺の一室に詫しく暮し居りしにぞ、常光は嬉しさと、悲

しさの交々込み上げて、暫時は言葉さへ出でざりしが、父も我子が思ひの外なる成人に、昔打棄てゝ己れのみ遁れし過ちを思ひ出し、今更の如く繰返へして、涙と共に詫びければ、常光は今迄探り當てざりし不幸を謝し、親子共々手を取りて、暫時は涙にくるゝ斗りありしと。かくて、夫より常光は、父母を伴ひて東京へ歸り孝養を盡し居たりしも、父は住み馴れし故郷の戀しくてといふにぞ、一年ばかり經ちて、歸國せしめ、其後毎月十圓宛送りて、其生活を助け居たり。かくすること、凡そ二十年、父が八十八の祝ひには、態々歸國して盛んなる酒宴を催したりしが、昨年四月遂に、九十五才にして亡き人の數に入りしかば、常光は、又歸國して懇ろに其後を弔ひて、繼母へは、東京へ迎へんと言ひしも、妾は髮を落して、亡夫の安樂を祈らん心ありとて、聽かざりしかば、常光は其言葉にもどかずして、己れ東京へ歸りしが、其後も毎月の送金は、一回も欠かせし事なく、五日ごとに一回宛安否を伺ひ居るといふ。誠に感ずべき稀代の孝子といふべし。

●●●●●●●●●

●百歳の老女手織を献ず　鳥取縣東伯郡西志村大字服部、小谷タネは、今年百歳の高齢に達せるが、到つて強健にして、先頃自ら糸を績いて、織りたる白木綿一反を、宮内省へ献納に及びたるが此程奇特なる旨、同省より沙汰ありたりと。目出度ことかな。

○教の栞

●●●●●●●●●

●教員撿定規定の改正　昨三十三年、文部省令第十號教員撿定に關する規程は、左の如く改正され、去にし九日の官報で、發表されました。即ち

第二條　檢定を爲すべき學科目左の如し

修身、敎育、國語及漢文、英語、佛語、獨語、歷史、地理、數學、物理及化學、博物、法制及經濟、習字、圖畫、家事及裁縫、體操、音樂、簿記、農業、商業、手工、手藝

歷史は日本史東洋史西洋史、の二部に數學は算術代數幾何、三角法、解析幾何、微分積分の四部に物理及化學は物理、化學の二部に博物は動物及生理、植物、鑛物の三部に圖畫は毛筆畫用器畫鉛筆畫用器畫の二部に家事及裁縫は家事、裁縫の二部に分ちて檢定を出願することを得此の場合に於て一學科目の一部若は數部の檢定を出願するも其の手數料に關して一學科目と看做す

三角法は算術代數幾何に解析幾何は三角法に微分積分は解析幾何に合格したる上にあらざれば檢定を行はず

第五條　左に揭ぐる者は無試驗檢定を受くることを得

一　文部大臣の指定したる學校の卒業者及選科修了者

二　師範學校、中學校、高等女學校の卒業證書を有し更に卒業生の敎員免許資格に關し文部大臣の許可を受けたる公立、私立學校に入り三學年以上在學して卒業したる者但し修業年限五箇年の高等女學校の卒業證書を有する者の在學すべき年數は二學年以上とす

三　師範學校、中學校、高等女學校及之と同等以上の學校の卒業證書を有し更に外國の大學校若は之に準すべき學校に於で修業し學位若は卒業證書を受領したる者

四　外國に於て師範學校、中學校、高等女學校に準すべき學校に入り修學し學位若に卒業證書を受領したる者

五　敎員たらむと欲する學校の學科程度と同等以上の學校の敎員免狀を有する者

第十條　左に揭ぐる者にして體操科の試驗檢定を出願したるときは兵式體操の部分を省く

一　陸軍步兵科士官

二　陸軍步兵科下士任官後滿四年以上現役に服したる者

第十一條　削除

第十三條　削除

第十五條　從前の規定に依り認められたる豫備試驗の合格並に證明書の效力は仍其の有効期間存續す

右の外、第六條は、削除されました。

○侯爵山内家婚禮式

今昔の順序作法と三獻の膳部

山内家の昔時の婚禮につきての作法の次第は、正しく證とする舊記をうかゞはざれども、其の膳部の次第より推察するに、近古の伊勢流を畧して、

正しく用られしが如し。其の膳部の次第にあげられたる、神前の御贄なる姫折、二重折、天井折、置鳥、置鯉、瓶子の樣より參考するも、又省略されたる箇所、

第一　式三献　初献引わたし○二献うちみ○三献わたいりの三ッの膳部を略して初献一膳となして、初献の膳部に、二献の鹽生姜を付込る。

式三献の膳部は、一人毎に、御膳三ッ宛すゑたり。聟、嫁、待女房ともに三人前出して、此時の盃は御料人女より始て、次に殿男のみ、次に待女房と一の盃にてのみ、二の盃にてのみ、三の盃にてのみ、盃の取りかはしはなし。

第二　五の膳　初献雜煮に添肴○二献まんぢうに添肴○三献鯉のあつもの○四献蒸むぎに添肴○五献やうくわんに添肴の順序を略して、御雜煮御副肴のみを出し、(但是は極めて近く略されたりしなり)

此五番の膳部は、三人前出して、盃は三方にすゑて面々の御前に置く、盃の數は、一つゝつなり。又位によりて、足打のだいにのする、是も御料人より始めれて次に殿にあげ、次に待女房の順を初献となして、第二番目よりは、其次第を二の數わしゝとて、待女房より始めて次に御料人、次に殿方と各一度づゝのみて、其膳を引て三献目を出して御盃は御料人殿方待女房となし。又、其膳を引て四献目を出し、御盃は、待女房御料人殿方となし、其膳を引て五番目を出し御料人殿方待女房と盃の順序をなして、盃の取かはしはなし。(以下次號)

○全國各女學校卒業生(第二回)

●埼玉縣高等女學校卒業生　去にし三月廿三日執行せられた、同校卒業生の族籍、父兄の職業、

氏名、生年月等、及び、學業調査の結果は、左の通りであります。しかして、萩原、小笠原、岡、栗原、相島の五子は、寄宿生で、中、萩原子の外は、同校規によつて、學資の補給を受けた者ださうです。

第一回本科卒業生（いろは順）

族籍	父兄職業	氏名	生年月
埼玉縣士族	神職	岩井モト	明治十八年一月
福島縣士族	無職業	今井殖	仝 十八年七月
埼玉縣平民	農業	池田さわ	仝十六年十二月
同	官吏	池田いさ	仝十六年十二月
同	農業	飯野よう	仝 十九年六月
同	同上	萩原美智	仝 十八年四月
長野縣士族	教員	小笠原美壽	仝 十四年七月
埼玉縣士族	無職業	岡本	仝 十六年十月
同 平民	商業	田島きよ	仝 十七年四月
同	醫師	仲田たき	仝 十九年二月
同	農業	野口美屋	仝十八年十二月
同	産婆	栗原まさ	仝 十五年二月
同	醫師	相島浩子	仝 十八年六月
同	農業	新井まさ	仝 十八年五月
同	辯護士	宮崎牧子	仝 十七年九月
同	醫師	荘千代	仝 十七年九月
同	神職	東角井輝	仝 十六年九月
同	農業	本橋せん	仝十七年十一月
東京府平民	官吏	鈴木ひさ	仝十六年十一月

前年度學年末學業調査表

在籍	生徒數	及第者	落第者	欠席
本科四年級	二一	一九	〇	二
本科三年級	三九	三四	二	三
本科二年級	三六	三二	四	〇
本科一年級	二四	二三	一	〇
裁縫專修科一年級	一二	一二	〇	〇
合計	一三二	一二〇	七	五

●●●●●●●●●●彦根高等女學校卒業生の族籍氏名は、次の如くです。

補習科卒業生

滋賀縣士族	小田切せつ	滋賀縣平民	雨森辰生
仝 平民	柴辻きよ	仝 士族	前橋雅尾
仝 士族	中野ふさ	仝 士族	木村一千代
仝 士族	前田糸	仝 平民	土田品

仝　士族　津田さい　　仝　平民　小澤千代

技藝專修科卒業生

滋賀縣士族　林　富尾　　仝　士族　北川かや
仝　士族　大久保貞　　仝　平民　森すみ
仝　平民　島津さき　　仝　平民　三谷きぬ
仝　平民　上阪芳枝　　仝　平民　清水まま
仝　平民　阿知波さみ　　仝　士族　北村春尾

本科卒業生

滋賀縣士族　金田文　　愛知縣士族　青川茂
滋賀縣士族　大橋みね　　仝　平民　橋馨
仝　平民　相場ツ子　　仝　士族　田部茂
仝　平民　藤井玉緒　　仝　平民　増田元
仝　平民　松山繁野　　仝　士族　太田ふさ
滋賀縣士族　林　松枝　　岐阜縣平民　古山實
滋賀縣平民　野口こはぎ　　仝　士族　野津君代
仝　平民　渡邊ゑつ　　仝　士族　青山すゑ
仝　士族　板里輪　　仝　士族　梶ゑん

（以　上）

●福岡縣高等女學校卒業生の族籍、氏名等は、即ち、

補習科第一回卒業生（イロハ順）

福岡縣士族東野直倫三女東野スミ明治十七年十一月生
福岡縣士族河野貫三郎二女河野ヨシ明治十六年三月生
佐賀縣士族辛木秀次長女辛木チサ明治十六年七月生
三重縣士族吉村春樹養女吉村マキ明治十五年二月生
福岡縣士族高島習二女高島マキ明治十七年六月生
福岡縣平民上野彦三郎三女上野モヽエ明治十六年四月生
福岡縣士族井上同長女井上レイ明治十六年十二月生
福岡縣士族野田景山長女野田ナヨ明治十七年四月生
福岡縣平民奥村利吉長女奥村モト明治十五年八月生
佐賀縣士族牟田萬次郎二女前田イワ明治十五年四月生
福岡縣平民荒木玄齡二女荒木タカ明治十七年八月生
福岡縣平民酒井岩次郎二女酒井タ子明治十六年十月生
福岡縣士族柴田治三養女柴田ヨシ明治十七年三月生

本科第二回卒業生

福岡縣平民岩崎庄三郎四女岩崎チカ明治拾八年八月生
山口縣平民伊藤政次郎妹伊藤チヨ明治拾六年七月生
福岡縣平民原田玄侃長女原田ジュン明治拾六年拾月生
福岡縣士族西原五六長女西原トシ明治拾七年九月生
福岡縣平民宮岡善七四女宮岡キク明治拾七年八月生
佐賀縣士族陣内傳八長女陣内トシ明治拾八年五月生
福岡縣士族米澤信夫長女米澤ツ子明治拾八年三月生

福岡縣士族吉本嶽藏長女吉本ヤヱ明治拾八年五月生
福岡縣士族田原養伯姪田原ミヨ明治拾八年三月生
福岡縣平民田原精一三女田原キク明治拾八年七月生
福岡縣士族谷小十郎長女谷キヨツ明治拾八年拾月生
福岡縣平民田中完七郎三女田中カヨノ明治拾七年九月生
福岡縣士族田中晴賢長女田中サダ明治拾八年一月生
福岡縣平民田口卯三郎二女田口イノ明治拾七年拾一月生
福岡縣平民竹田友次郎長女竹田キツ明治拾七年四月生
福岡縣士族中野和四郎二女中野トミ明治拾八年七月生
福岡縣平族中尾卯作三女中尾サダ明治拾八年九月生
福岡縣士族上野勘太郎二女上野アヤ明治拾八年拾一月生
福岡縣士族浦江凡夫二女浦江ワカ明治拾八年五月生
福岡縣士族魚住明善四女魚住サダ明治拾六年拾一月生
福岡縣平民井上佩瑢四女井上シヅ明治拾七年七月生
福岡縣平民野村久次二女野村タ子明治拾八年拾一月生
福岡縣士族野村祐雄三女野村スヱ明治拾八年拾二月生
福岡縣平民栗原伊平三女栗原タヘ明治拾八年四月生
福岡縣平民山田甚吾養女山田ヤヱ明治拾七年拾一月生
福岡縣士族藤井重利長女藤井チトセ明治拾八年拾一月生
福岡縣士族福田志平三女福田キク明治拾八年拾一月生
福岡縣士族兒玉傳男長女兒玉マチヨ明治拾八年拾一月生
福岡縣士族小寺定職妹小寺ナヲ明治拾七年八月生

福岡縣士族近藤政明長女近藤フサ明治拾八年三月生
福岡縣平民有田弘助妹有田トキ明治拾八年一月生
福岡縣士族木原善太郎長女木原ヨシ明治拾八年拾月生
福岡縣士族木原克巳妹木原アサ明治拾七年五月生
福岡縣士族三好織衛次女三好シケキ明治拾八年二月生
福岡縣士族水野護備妹水野カツ明治拾六年一月生
福岡縣士族惠良久次郎妹惠良チヱ明治拾八年四月生
福岡縣平民日高謙也長女日高ヌケノ明治拾八年六月生
福岡縣平民平川良平三女平川チヨ明治拾八年八月生
福岡縣平民森山清太二女森山ヤス明治拾八年八月生
福岡縣士族森山安孫次女森山マサ明治拾八年八月生

當卒業生ハ、明治三十一年六月本校創立ノ際、直ニ第二學年生トシテ入學許可セシモノ二十九人、翌三十二年度ニ於テ、新ニ第三學年生トシテ許可セシモノ四拾人、三十三年度ニ入學セシモノ二人、合計七拾一人ナリトス、而シテ、此内結婚、轉住、病氣、又ハ、家事ノ都合等ニ依リ中途退學セルモノ、合計三拾一人ヲ減シ、現員四拾人トナレリ、

右、四拾人ノ出身學校ヲ擧グレバ、福岡高等小學校十七人、福岡師範學校附屬少學校九人、西新高等小學校二人、住吉仝一人、御笠仝三人、大川仝三人、糸島仝一人、飯塚仝一人、神田仝一人、柳河仝一人、他縣一人ナリ、

以上で御座ります。

●成女校校卒業式の概況●●●●●●●●●

成女學校に於ては、去三月三十日を以て、第一回卒業式を擧行せられました。同日は、昨來の雨天で、道路は泥濘に、天氣は陰鬱でありますにも拘らず、正午より來賓が續々來集せられまして。總体では、無慮百余名に達しました。やがて〇時三十分の振鈴にて、式は開始せられました。其の次第は左の如くです。

第一回卒業證書授與式

一、唱歌（君が代）
二、卒業證書授與
三、校長式辭
四、卒業生謝辭……總代　英　八重子
五、生徒祝辭……總代　白井　さら子
六、唱歌（複音、花のあけくれ）
七、英語對話……杉山　わかな／高橋　もさ子／朝倉　さき子
八、國文朗讀……卒業生　蜂屋　てい子
九、英詩暗誦……福原　はな子
十、地理ノ話……岩田　ひで子
十一、英語對話……福原　ふみ子／萩原　ちか子／小川　ゆき子
十二、箏……鵜澤　やす子／和田　なみ子
十三、英詩暗誦……卒業生　英　八重子
十四、英語唱歌……三箇島　かれ子／中村　みつな／樋村　ひで子／坂井　みか子／向後　その子／大森　さだ子
十五、昆蟲ノ話……武部　みつゐ
十六、英詩暗誦……卒業生　永井　ふみ子
十七、國文朗讀……村井　はる子
十八、英詩暗誦……卒業生　鈴木　なつ子
十九、國文朗讀……仝　大久保　ゆき子
二十、英詩暗誦……仝　福原　ふみ子
廿一、唱歌（卒業の歌）……卒業生　一同
廿二、遊戯及体操

以上

餘興　生徒成績品陳列／茶菓接待

右終て、割烹生徒の調製にかゝる料理品の接待がありました。實は、庭前で、園遊會的にする仕組だつたそうですが、雨天の爲止を得ず校内にてやられましたは、稍物足らぬ心地がせられました。去りながら、生徒一同いづれも、熱心に奔走待遇

して、來賓をして、思はず知らず、腹を厭しめたるなど、頗る趣味に富だやりかたでした、當日、來賓の重なる方々は、内田康哉氏夫人、大森鐘一氏母堂、村井少將夫人、村田翰長母堂、棚橋絢子刀自、嘉悅氏房氏同令夫人等でした。而して、卒業生の氏は、即ち、

全科　（姓名入學順）

千葉縣平民	鈴木ナツ子	東京府士族	永井フミ子
福岡縣士族	福原フミ子	岐阜縣平民	英　ヤヘ子

撰科

秋田縣士族	大久保ユキ子	東京府士族	蜂屋テイ子

（以　上）

●德基女學校卒業生●●●●●●●　山口縣厚狹郡立なる、同校では、本年總計二十八名の卒業生で、ありましたそうです。其の氏名は、即ち、

補習科

平民	縄田　リヱ	士族	鹽田ウメノ	士族	平中　ユキ
平民	木村ミサナ	平民	今橋　サク	平民	西山　トキ
平民	千原　イチ	平民	縄田　キセ	平民	長谷川トク
平民	岡崎　ハツ				

本科

平民	島田　トキ	平民	師井ハルノ	平民	荒川　キヨ
平民	岩崎　ハツ		長谷川ハヱ	士族	江本シゲノ
士族	大田ワカノ	平民	縄田　チヱ	平民	植田サトノ
平民	村田　ヒサ	平民	中村　キク	平民	松尾　ミナ

別科

士族	津田　キク	士族	花田ハツノ	平民	金子　ヒデ
平民	井上マサノ	平民	宗岡　ユリ	平民	三隅マサノ

（以　上）

●鶴岡高等女學校卒業式●●●●●●●●●　同校にては、第四回卒業證書授與式を、去ぬる三月三十日午前九時に行はれました。其の順序は、

第一號鈴　職員生徒着席　第二號鈴　參觀人着席　第三號鈴　來賓着席

一、唱　歌　（卒業式）

はてしなきまなびの道もかぎりはありけり年月に敎の庭より
そのみははなれんこゝろゝのみははなるなよ

二、勅語奉讀　一同起立　三、唱歌（勅語奉答）　一同起立
あやにかしこきすめらぎのあやにたふときすめらぎのあやにたふとくかしこくもくだしたまへりおほみことこれぞめでたきひのもとのくにのをしへのもとゐなるこれぞめでたきひのもとの人の敎のかゞみなるあやにかしこきすめらぎのみことのまゝにいそしみてあやにたふときすめらぎのおほみこゝろにこたへまつらむ

四、證書授與　五、校長告辭　職員、卒業生起立　六、町長告辭、職員、卒業生起立　七、來賓祝辭　職員、卒業生起立八、職員祝辭　卒業生、起立　九、卒業生、總代謝辭職員卒業生起立　十、唱歌（仰げば尊し）職員起立
あふげばたふとし、わが師のおん、敎の庭にもはやいくとせ、思へばいとゞし、このとしつき、今こそわかれめ、いざさらば、
第四號鈴　來賓退席　第五號鈴　參觀人退席　第六號鈴　職員生徒退席

右式終りて、習字、圖畫、裁縫品、其の他手藝品などの成蹟品を、來賓、及、生徒父兄諸氏の縦覽に供せられ。それから、新舊卒業生諸子を一堂に會して、茶話會を開き、日頃、温かなる師弟間の情愛が、一層こまやかに、室内に滿ち充ちたそう

であります。

第四回卒業生（氏名いろは順）

本科

族籍	氏名	族籍	氏名	族籍	氏名
平民	石原　孝	士族	西海　幸	平民	星野　奈嘉
士族	豐田　富	士族	常世　初井	平民	小野寺　梅
士族	小倉　愛	士族	萩原　仙	士族	渡部　操
士族	加藤　卿	平民	加藤　定江	平民	鎌田佐賀惠
平民	高橋　清惠	士族	高木九十代	士族	土屋　政爲
士族	成田喜代榮	士族	永田　政	平民	中里　光榮
士族	中世古　常	士族	村田　豊女	士族	村井　久
平民	大瀧　清野	士族	大山　小菊	平民	松田　松野
士族	阿部　小濱	平民	阿部　佐井	平民	秋野さよの
士族	秋野　元榮	平民	齋藤　柳	平民	坂尾　米
士族	榊原　糸	士族	清水　郁	士族	鈴木まさゐ

補習科修了生

士族	細井うめゐ	士族	川畑さたゑ	士族	吉野　なみ
士族	横山ひさし	士族	鶴田さみよ	士族	村井なをゐ
士族	與津　せき	士族	山本　ゑい	士族	小松しげゑ
士族	江口あさふ	士族	齋藤さたよ	士族	岸本　すつ
士族	疋田うめゐ				

技藝科

士族 岩間ふつ　士族 高橋ひさ　士族 高田しげよ
士族 竹内なほゑ　士族 小宮山きくせ　平民 兒玉しげよ
平民 小池たみゑ　士族 江口きよ子　平民 佐藤まさゑ
平民 齋藤さよゑ　平民 酒井ちよせ　士族 鈴木しげ子

裁縫教員養成所

士族 五十風八重　士族 村井てい　平民 阿部貴惠
士族 佐藤政代　平民 佐藤春惠

以上諸子の原籍地は、皆、山形縣だそうです。

○杜鵑一聲

●●●●●●靖國神社大祭　去にし六日靖國神社春季大祭は、二日目即ち祭典執行當日なりしかば、神官等は前日より社殿を淨め、新築中の拜殿其他を裝飾し、神殿の中央には、菊花の御紋章ある紫縮緬の幕を張りまはし、紫紐にて絞り上げ、拜殿へは麻幕を張りて、皇族、大臣および、海陸軍將校等の參拜席を設けたるが、本年は、臨時の合祀なかりしため、勅使の參向はあらざりしも、午前八時より正午頃までに、第一師團長伏見宮貞愛親王、參謀本部附閑院宮載仁親王、軍令部附山階宮菊麿王、陸軍士官學校附久邇宮邦彦王の各皇族殿下を始め奉り兒玉陸軍大臣、山本海軍大臣、大山參謀總長、佐久間中部都督、伊藤軍令部長、長谷川近衛師團長、奧東部都督、黑木西部都督、井上横須賀鎭守府司令長官、野津教育總監、寺内參謀次長、角田艦政局長、諸岡教育本部長、上村軍務局長、中村陸軍、齋藤海軍兩總務長官、山内憲兵司令官、安樂警視總監、其他陸海軍兩將官、將校各團將校、下士卒警視等二千餘名の參拜あり、斯て午前九時を報ずるや、神樂吹奏の間、神酒、神饌の献供ありしが、終りて加茂宮司の祭文朗讀あり、午後一時よりは、在京戰死者遺族の隨意參拜を許され、同二時には、東宮殿下御代拜者の參拜あり

たるが、四日以來、空模樣の何となく怪しかりしため。本日も多分雨天ならんと期しゐたる觀物業者、及び、露店商人等は、午前十時前後より、日光の雲間より見え初めしに、假に荷物を九段へ輓き出し、九段上より富士見町二丁目の往來片側へ、小屋掛を急ぎ、午後よりは、客を呼びゐたり。されば、人出も追々に多くなり、正午ごろには、非常の雜沓となりたるが、當日の餘興には、境内東南隅に、丸一大神樂の舞臺出來、演藝の催しあり。又西北隅の神樂堂には、里神樂の催しもあり。社務所内には、石州派の生花あり。其他遊就館内には、今回、日蓮上人眞筆七字題目の軍旗、加藤淸正の遺物出でたれば、一覽せんとて入塲する者多かりしが、此は、朝鮮征伐の當時、秀吉自ら淸正に與へたるものなりと。

●●●●●●

●歐洲帝室の皇孫　今回御目出度も、親王御降誕あらせられて、我が、皇室にても、こゝに、始めて、皇孫を有せらるゝ事とあらせ給へり。今歐州列國を見まゐらするに、最も、皇孫に富ませらるゝは、丁抹にて、英吉利、瑞典諾威、希臘、墺太利匈牙利など、之に次せ玉ふ。

丁抹國王クリスチアン九世陛下の皇孫

クリスチアン親王　(卅二歳)
カール親王　(卅　歳)
ロウイザ内親王　(廿七歳)
ハラルド親王　(廿六歳)
インゲボルグ内親王　(廿四歳)
タイラ内親王　(廿二歳)
ガスタヴ親王　(十五歳)
ドグマー内親王　(十二歳)

英吉利國王エドワード七世陛下の皇孫

エドワード、アルベルト親王　(八　歳)
アルバート、フレデリツク、アーサージョージ親王(七歳)
ヴイクトリア、アレキサンドラ内親王(五　歳)
モード、アレキサンドラ　(九　歳)
ヘンリー、ウヰリアム、フレデリツク、アルベルト(二歳)

アレキサンドラ、ヴヰクトリア(十歳)
瑞典諾威國王オスカル二世陛下の皇孫
ガスタフアドルフ親王 (廿歳)
ウイルヘルム親王 (十八歳)
エリツク親王 (十三歳)
希臘國王ジオジオス一世陛下の皇孫
ジオジオス親王 (十二歳)
アレキサンデル親王 (九歳)
ヘレ內親王 (六歳)
墺太利匈牙利國王フランツ、ジヨセフ一世陛下の皇孫
エリサベツト內親王 (十九歳)

此の御目出度ためしには少しくかはりて、皇孫にはましまさねども、皇孫の榮え玉ふは、今の獨逸帝室なり。即ち

フレデリツヒ、ウヰルヘルム親王(皇太子)　一八八二年生
ウヰルヘルム、エーテルフリデリツヒ親王　一八八三年生
アダルベルト親王　一八八四年生
アウグストウヰルヘルム親王　一八八七年生
オスカル親王　一八八八年生
ジヨウヒム親王　一八九〇年生
ウヰクトリアルイセ內親王　一八九二年生

獨逸の今帝ウヰルヘルム二世は、殊に、御子達の敎育に嚴重なりと稱せらる。文武とも、良師に託して、容捨なく督勵せらるゝを以て、フレデリツヒ、ウヰリヘルム親王の幼時には、之れに堪へず泣き出だして皇帝に訴へられたることありしに、皇帝は却つて、其の師傅の嚴なるを賞し玉ひし美談ありといふ。

●子福者の王　我國にては、十代將軍家齊公御子七十餘人ありたれば、諸大名は、將軍家より緣談の御沙汰あらんを恐れ、互に婚嫁を急ぎて、体よく御沙汰を避けたる奇談さへありしが、夫れとこれとは事異れども、亞非利加のオボ土人は、非常に子供を愛し、子供を多く持てるものほど、土民中に尊敬せらるゝ風習ありて、土地の酋長カナハと云ふは、男女の小供十六人を持ち居れるが、多妻主義の土地にても、斯る子福者は珍らしゝとて

土民は神の如く、此の酋長を尊び居れりとぞ。

●物價益す下落す　商況の不振は、殆んど其極に達し、物價の趨勢漸次下落に向ひ、先々月に於て、二分七毛の下落を成したる内國重要品相場は、前月に於て、再び二分五毛の低落を爲したり今、日本銀行の調査に係る、下落したる品目を擧ぐれば、石炭、銅、鐵、綿糸、眞綿、材木、炭、薪、酒、醬油、砂糖、鹽、大麥、小麥、油〆糟、肥料、糠、木蠟、紡績洋糸、雞卵、製茶、食鳥、油、小麥粉、洋釘、裏地類、絹糸の廿七種にして保合たるものは繰綿、金巾、石油、日本刻莨、疊表、味噌、生漆、皮革類麻の九種ありしが騰貴したるは僅に鰹節、裸麥、白木綿、硝子板の四種に過ぎざりし。之れを、昨年の同月の平均相場一八五に比し、一三の下落を爲したるも、今後猶下落を免れざるべしと商業通はいへり。

●蚊張の相場　本年は、氣候一体に早き故、本場の、本所、深川、下谷區には、既に蚊軍の來襲ありし趣にて、嗜みの好き人々は早や古葛籠の底より取出して、損所の繕ひに餘念なきもあらん。又、本年の相場直段は昨年に比べて、麻は一割安、木綿は、二割安なりとぞ。即ち、

	五六	六八	八十
木綿六寸五分巾清風印	七十四錢	一圓三錢	一圓五十一錢
和糸揃太木綿八寸巾極印	一圓七十二錢	二圓四十五錢	三圓五十錢
麻揃鯨九寸五分巾宮村	三圓九錢	四圓三十三錢	六圓六十五錢
麻揃鯨九寸五分極手織	三圓四十一錢	四圓七十五錢	七圓二十三錢
麻揃鯨九寸五分巾誂手織	四圓七錢	五圓七十二錢	八圓六十四錢
麻揃一尺巾上沖風	五圓	七圓六錢	十圓六十三錢
麻揃鯨一尺巾稀沖風	七圓五十四錢	十圓三十五錢	十五圓三十六錢

角母衣

木綿六寸五分巾	二半	三半	三十八錢
同	三	四	四十六錢
麻擶宮村	二	三	七十三錢
同沖風	二	三	九十五錢

●夏景色　この頃は、追々驟暖を催はして、セルの單衣肌に輕く、麥藁帽子の時節となりて、市中は全く夏景色となり、氷屋の玉簾涼くして、風薫る南窓に、風鈴の音を聞くも床しく、ギヤマン玉の金魚を子供の小さき手になぶらるゝも愛らし、夜は、月影若葉をもれて、淸らかに、彼方に吹きすさむ尺八、此方にかなづる琴の音の、御空に渡るも涼しく覺えぬ。

○口繪につきて

●藤波紫白　こは、松亭得意の筆。其の枝の如何に眞に逼り、雅趣に乏しからざるか、否かは、本誌の繪畫擔任者たるを以て、殊更に茲に云はず。

今や、牡丹は散り、菖蒲には少しく間ある、頃しも、今を盛りに咲き匂ひ、綠を漏れ來る涼風に、よりかゝる紫の糸、さながら、靉靆たる紫雲の天空より下りて、下界を彩れるが如く、或は白色の瓔珞風にゆられて、床しく、白に、紫に、大波小波、打ち寄する池の面の、散りしく花に、戯むるゝ鯉の、三ッ四ッ五ッ、浮きつ沈みつ、恰かも、太平の御代を壽ぐ樣の愛らしさ。されど、また、日朗かなるの節、遙に彼方を眺むるも、一入うるはしく、青に、紫に、白に、入り交り、天つ乙女の羽衣も、かくやあらむと、おもはるゝ程の美しさ、とはいへ、徒に、うつくしき花とのみ見てすごし玉ひぞ。古人の句に、

さがる程名は上りけり藤の花

と、あはれ、諸媛よ、記者が、特に、藤波紫白の圖を、呈するも、意こゝにあれば、常に、我が身

を省み、慎しみ玉ひてよ。

●奉祝御降誕　前號に豫告したるが如く、蒼海先生の、筆を染められたる祝詞あり。　皇孫殿下御降誕の御事、宮内省より達せしとき、先生今歳七十有四の高齢を以てかゝることよあき、御慶事に遭ひまつれる、歡びにたへず、即ち筆を洗ひ、硯を淨めて、殊に、和歌の經典たる萬葉集中の古歌の句を拔抄し、謹み書して、以て記者に賜へり。是、即ち、本誌卷頭の揮毫あり。其の特得遒健の筆力、能く、先生の精神を發揮して餘すことなし。

先生は、舊佐賀藩の士、少にして勤王の志厚く、夙に海外の事情に通じ、亦、國史に精しく、常に、君國あるを知りて、一身を忘る、幕末の際、日夜、國事に盡瘁し、維新の後、顯官に歷任して、大に、功績あり。其の、清國に大使たりし時の如き、外交の難局に當りて、能く、列國を操縱し、强を挫き、弱を援けて、以て、國威を發揚し、歐米の新紙をして、如今、天下の豪傑は、日本の副島と、獨逸のビスマークとあるのみといはしむるに至れり。先生、今は、靑山の邸に高臥し、昔日風雲を叱咤せし身を以て、溫顏懇到、後生を誘掖啓發して倦まず。片言隻語も、至誠より發して、世道人心を裨益せざるはなし、我等、幸に、先生の門に出入して、親しく、敎を受くるを得たり。乃、其の賜ふ所のものを掲げ、且、先生の事を記して、謦咳に接せざる諸媛に呈する事爾り。

先生は、現に、樞密顧問官從二位勳一等伯爵たり。

（登雪子）

社告

吾等、幸にして生を、かゝる聖代に受け、加ふるに、こよなき御慶事に遭ひまつり、歡極まりなし。されば特に、紙數十六頁を增し、聊か、奉祝の意を表し、且は、諸媛の愛顧に報ゆるなり。

○次號豫告

筆蹟　梅田雲濱

雲濱は、幕末の志士、夙に、一身を犠牲に供して、尊王攘夷の説を主張し、遂に、幕府の爲に刑せらる。然れども、其の誠忠、靑史に赫々として朽ちず。今、其の遺墨を得たれば、敢て、諸媛に呈し、以て當年の志士を吊はんとす。

肖像　湯地都尾子

こは、精華欄に於て、特に、史傳を紹介すべければ、今茲に、贅せず。

家計簿記法講義　磯部武者五郎

こは、斯道の大家磯部先生、多忙を顧みず、特に、諸媛の爲に起稿せられ、愈々、掲載するのはこびに至りたれば、請ふ刮目して待て。

其の他、例に依り、材料豐富、看るべき記事少からず。

○新刊寄書

家庭
少年世界
女子の友
花さかり小國民
令德
國學院雜誌
日本婦人
工談雜誌
をんな
婦人とこども
大日本婦人教育會雜誌
棋の下風
大八洲雜誌
風調
女學の枝折
うらにしき
織錦叢誌
女學雜誌姫百合
愛國
眞信
言葉のはやし
桑西名婦傳
國學史概論
人民讀本
醉人の妻

第三、四、五號
第五號
第八十六、七、九十號
第十三年九號
第三卷一、二號
第七卷四號
第十六號
第百三十五、六號
第三、四號
第五號
第百三十二、三、四號
第八十二號
第百七十六、七號
第二號
第十七、八號
第百二號
第七號
第三卷第三、四號
第七十六號
第四拾二號
第一卷第二集

大日本佛教婦人會
博文館
東洋社
鳴皐書院
令德會本部
國學院
帝國婦人協會
工談會
大日本學會
フレーベル會
大日本婦人教育會
棋園吟社
大八洲館
風調社
女子講習會
尚絅社
織錦會
姫百合社
愛國社
眞信會雜誌部
東京歌道會
勢陽堂
國語傳習所
開拓社
育成社

女鑑歌文月次兼題

六月五日分

歌　月前橘

文　節倹の説

右五月廿四日〆切

六月廿日分

歌　旅中梅雨

文　某瀑布に遊ぶ記

右六月九日〆切

七月五日分

歌　蓮露

文　轉地療養中の友に送る文

右六月廿四日〆切

七月廿日分

歌　松下泉

文　水邊納涼の記

右六月九日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

題　住所　姓名

…………………………
…………………………

文書式

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

題　住所　姓名

……、……、……。……。
……。……、……。……
……、……、……。……
……、……、……。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なにひとにても、隨意に投稿することを得。

女學 姫百合 雜誌

郵券代用一割增

毎月一回二十日發行定價郵税共一冊拾錢六冊五十五錢十二冊一圓

今の敎育は智育德育に重きをおきて美育を省みず今の女子は自信なく自ら以て劣等の性となす今の思想は國家の差別を忘れて世界の平等を夢む今の女學校は國家敎育に務めずして宗敎々育につとむるもの多し姫百合は此等の欠點を補はむとして現はれたる女學雜誌なり。

本誌は毎號名家金玉の文字を滿載す○本誌は投書を歡迎し每號懸賞撰拔あり○原稿は直接に本社へ御發送を乞ふ

明治三十四年 第三卷第四 四月廿日發行

口繪
○寫眞版 二個

論說
○享保文學と有德公 栗島山之助

學藝
○枕の草子評釋 跡見女學校講師 渡邊文雄
○保元物語の一節 文學士 內海弘藏
○かゝりむすび法 松下大三郎

文苑
○春の山家 栗島狹衣
○乘合ぶね 毛呂清春
○花ぐもり のぶを
○わけはの集 月の桂のや

叢談
○神話にあらはれたる女性 神田中學校講師 高橋龍雄
○獨逸婦人の生活 獨逸婦人 ハイデンライヒ
○成女學校をみる 古藤園

寄書
○新葉集 河野霞月
○女郎花 松井嚴夫

詞藻
○和歌 渡邊文雄選
○文章 松下大三郎選
○新體詩 栗島山之助選

附錄
裁縫講義 裁縫高等女學院長 小出新次郎

發行所 東京神田北神保町三番地 姫百合社

女鑑

明治三十四年五月廿日發行

毎月二回五日廿日發行　第貳百貳拾九號

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可